

茨城県行方郡玉造町

八重橋遺跡
発掘調査報告書

2001年3月

玉造町遺跡調査会
玉造町教育委員会

序

茨城県の南東部に広がる湖、霞ヶ浦に面している玉造町は、町中央部を梶無川が流れ、北西には鎌田川があり、この川は小川町と玉造町の町境をなしています。古くから農業が盛んに行われていた地域で今でも台地では畑作を、沖積地では稻作やイチゴ栽培等が行われています。

このように私たちの郷土は古くより人々の生活の場となり、そこには幾多の歴史が残されています。現在でもその人々の生活の痕跡として、貝塚や古墳・城館跡等の遺跡が町内に数多く点在しています。

玉造町沖洲地区には底部穿孔壺形土器が出土した勅使塚古墳をはじめ、馬形飾付金銅冠が出土した町指定史跡三昧塚古墳や、国指定重要文化財埴輪猿が出土したとされる大日塚古墳など県下でも有数な古墳群を形成しています。

この度、県営担い手育成基盤整備事業沖洲地区内における埋蔵文化財の事前調査を行ったところ、遺物・遺構が確認されたため、工事に先立ち平成11年10月～11月と平成12年9月～11月の2回にわたり発掘調査を実施いたしました。

今回の調査と平成12年2月～3月に明治大学を中心として実施された「第3次三昧塚古墳発掘調査」により、本遺跡には古墳時代から中世初頭にわたる大規模な集落跡が存在していたことがわかりました。また自然科学分析により、一時期ソバを栽培していたなど、微高地においても人々が生活していたことは驚くべき発見といえます。

本調査に際しまして、発掘調査並びに報告書の執筆を担当いただきました鹿行文化研究所汀安衛先生、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課、鉢田土地改良事務所、沖洲土地改良区岡田廣志理事長をはじめ、地元の関係各位に心から厚く感謝を申し上げます。

最後になりましたが、本報告書が多くの方々に活用されることを祈念してご挨拶と致します。

平成13年3月

玉造町遺跡調査会長
玉造町教育委員会教育長
大崎博之

八重橋遺跡発掘調査報告書 目次

序	I
目次	III
調査会組織、調査団	IV
例言、凡例	V
抄録	VI
第1部 第1次発掘調査		
目次		
挿図・図版目次		
第2部 第2次発掘調査		
目次		
図表目次		
図版目次		
第3部 自然科学分析報告		
目次		
図表・図版目次		

調査会組織

会長	大崎 博之	(玉造町教育委員会教育長)
	海老澤幸雄	(前玉造町教育委員会教育長)
副会長	風間 亨夫	(玉造町文化財保護審議会長)
理事	野原幸之助	(玉造町文化財保護審議会副会長)
	鈴木 亮然	(玉造町文化財保護審議会委員)
	八木 操	(玉造町文化財保護審議会委員)
	笛目 吉夫	(玉造町文化財保護審議会委員)
	成島 崇	(玉造町文化財保護審議会委員)
	小沼 政雄	(玉造町文化財保護審議会委員)
	堀田 好男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	真家 幸治	(玉造町文化財保護審議会委員)
	堀田 正義	(茨城県鉢田土地改良事務所所長)
	小林 三郎	(明治大学文学部教授)
	汀 安衛	(鹿行文化研究所長、調査主任)
事務局	大森 一夫	(玉造町教育委員会生涯学習課長)
	池畠 正夫	(前玉造町教育委員会生涯学習課社会教育係長)
	中田美代子	(玉造町教育委員会生涯学習課主幹)
	森作 保繁	(玉造町教育委員会生涯学習課社会教育主事)

調査団

団長	汀 安衛	(鹿行文化研究所長、調査主任)
調査協力員	横田 泰隆	西田 和子
	根本 武雄	菅谷 益雄
	杉村かず子	前田チヅ子
	橋本 キヌ	今川 本子
	飯島 八郎	石津 久雄
調査協力者	高埜 栄治	橋川 栄治
	栗原工務店	島田 安則
		林 好志
		兼光 里果

例　言

1. 本報告書は、茨城県行方郡玉造町沖洲字八重橋537番地他に所在する八重橋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、沖洲地区の農村生活環境基盤整備に伴う事前調査であり、三味塚古墳東側周辺の水田、畑地部分で、面積約5,000m²である。
3. 本遺跡の調査は、確認調査が平成10年、トレンチ調査が平成11年、本調査のうち、第1次調査を平成11年10月13日から11月10日まで行い、第2次調査を平成12年9月25日から11月14日まで行った。
4. 本遺跡の調査は、鹿行文化研究所の汀安衛が担当した。
報告書では、拓本、実測を西田和子、前田京子（1次）、図版作成、遺物の写真、原稿執筆等は汀安衛が行った。
5. 本報告書に当たり、次の方々のご協力を受けた。記して感謝の意を表したい。
(敬称略)
横田泰隆、西田和子、菅谷益雄、前田京子、根本武雄、徳利初代、橋本光枝
(鹿行文化研究所)
石津みな、杉村かず子、前田チヅ子、宮川須真子、橋本久子、橋本キヌ、
今川本子、今川せい子、塚本八重子、飯島八郎、石津久雄
6. 本調査に当たり、茨城県鉢田土地改良事務所、沖洲土地改良区岡田廣志理事長には多大な協力を受けた。
表土除去は、橘川英治氏、栗原工務店に協力をお願いした。
7. 調査については、茨城県教育庁文化課、整理については茨城県歴史館の斎藤弘道氏、内山俊身氏、佐藤好雄氏に再三にわたりご教示、ご指導を受けた。
記して、感謝の意を表したい。
8. 堂宇、墨書き文、古代村落についてはさいたま文学館の学芸員宮瀬交二氏に、藏骨壺については愛知県常滑市立常滑資料館の中野晴久氏にご教示を受けた。末尾ながら記して感謝の意を表したい。
9. 事務局の地元玉造町教育委員会大崎博之教育長を始め、海老澤幸雄前教育長、大森…夫生涯学習課長、池畠正夫係長（現総務課）、森作保繁社教主事に多大なる助力を受けた。
10. 木材及びプラントオバールの分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社にお願いし、結果を掲載した。

凡　例

本報告書の縮尺は、原則として1/10, 1/20とした。遺物は1/30とした。
レベルは図中に表示した。

抄 錄

フリガナ	ヤエバシイセキハックツチョウサホウコクショ							
書 名	八重橋遺跡発掘調査報告書							
発行者名	玉造町教育委員会、玉造町遺跡調査会							
所 在 地	〒311-3511 茨城県行方郡玉造町乙1179中央公民館内							
編集者名	江 安衛							
編集機関	鹿行文化研究所							
所 在 地	〒311-2211 茨城県鹿嶋市青塚718-3							
発行年月日	2001年3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ 一 ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
八重橋遺跡	茨城県行方郡 玉造町沖洲 537他	市町村 08425	遺跡番号 074	36° 09' 07"	140° 22' 08"	1999.10.13 1999.11.10 (1次) 2000.9.25 2000.11.14 (2次)	5,000 m ²	農村生活環境 基盤整備に伴 う調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
八重橋遺跡	包蔵地	古墳時代 ～ 中世	掘建・溝・土坑 御堂根石	石器 土器 柱 銅錢	(土師器坏、埴輪、高台坏、甕)		根石に墨書き 低地集落	

第 1 部

八 重 橋 遺 跡

第 1 次 発 掘 調 査

第1部 目 次

目次

挿図目次

図版目次

I 遺跡の位置と史的環境

II 調査に至る経過

III 調査の概要

IV 遺構と遺物

1. 1号烟地

2. 2号烟地

3. 3号烟地

4. 4号烟地

V 総 括

挿図・図版目次

- 第 1 図 遺跡位置図
第 2 図 遺跡地籍図
第 3 図 遺跡全測図及びトレンチ位置図
第 4 図 トレンチ土層図
第 5 図 1号烟地下部遺構全測図
第 6 図 1号烟地下部遺構出土遺物実測図
第 7 図 2号烟地下部遺構全測図
第 8 図 2号烟地下部出土堂宇跡根石実測図
第 9 図 2号烟地出土遺物実測図
第 10 図 3号烟地下部遺構及び出土遺物実測図
第 11 図 4号烟地下部出土遺構実測図
第 12 図 4号烟地下部溝土層及び断面図
第 13 図 4号烟地下部出土掘建遺構実測図
第 14 図 2・4号烟地下部出土木柱及び木片
第 15 図 4号烟地下部出土木柱及び木片
第 16 図 4号 " "
第 17 図 4号 "

- PL-1 確認調査とトレンチ、蔵骨器、人骨
PL-2 本調査前、第1号烟地下部調査風景、溝大小、方形状区画烟地?
PL-3 2号烟地下部全景、溝土層、土坑、柱材、出土土器
PL-4 2号烟地堂宇根石、根石1, 2, 3, 4, 6 その他(3の上部?)
PL-5 3号烟地下部全景 4号烟地下部全景、木材出土状態、出土遺物
PL-6 3号烟地下部の溝 4号烟地全景、木材出土状況、出土遺物
PL-7 1号烟地溝出高台坏 2・4号地下部出土遺物、墨書き根石と石器
PL-8 2・4号烟地下部出土木材(1・2号烟地)他、4号烟地下部縮尺不動

I 遺跡の位置と史的環境

本遺跡は、茨城県行方郡玉造町大字沖洲字八重橋537番地に所在する。町の西北部、沖洲集落の北西端部の砂州状微高地に位置し、北側には小川町と境を接し鎌田川が流下する。周辺は大部分水田として利用され、西及び北側が一部畠地、南東側は沖洲集落、西側は著名な三味塚古墳が所在している。

三味塚古墳の調査報告書によれば、砂洲は繩文時代に成長し今日に至っているといわれている『玉造町教育委員会、三味塚古墳発掘調査団1995』。遺跡下部は砂層で、下部灰白色のシルト層であり、ほぼ海底により堆積されたと推定され、西側は、西浦の関係から直線的、東及び北側は鎌田川の下流で若干の鰐歯状部分が認められる。

遺跡は、このような標高5.2m程の微高地下部、標高4.5mの現水田下に平安末期前葉の一時の集落が確認された。今後、本域微高地の遺跡の存在を示唆するものとなろう。

北側の小川町の台地上には、かなりの遺跡が登録されている。玉造町沖洲地区には、(1)三味塚古墳を始め、(2)前方後方墳の勅使塚古墳、(3)大型の円筒埴輪をもつ微高地に占地する権現山古墳、(4)横穴式石室をもつ大日塚古墳、(5)埋葬施設が箱式石棺で円筒埴輪をもつ八重塚古墳群がみられ、古墳時代の墓域的正確が見られる。

周辺の畠地部分には、タマネギ等が作付され、南東側に沖洲集落が位置し、西側を国道335号線が微高地南端部を直線的に伸びている。このように史的自然環境に恵まれた中に占地する。

II 調査に至る経過

沖洲地区において、県営担い手育成基盤整備事業に伴う農村生活環境基盤整備の計画がなされ、平成9年9月4日、玉造町教育委員会に対し、茨城県鉢田土地改良事務所より本工事地区における埋蔵文化財の有無について照会した。玉造町教育委員会は、現地踏査及び確認調査を実施した結果、開発予定地内には、町指定史跡三味塚古墳が所在し、その周辺の畠地に遺物、遺構が確認された旨、平成9年11月11日付で回答した。

このため、玉造町教育委員会は、茨城県農地部農地建設課、鉢田土地改良事務所、町経済課及び茨城県教育庁文化課と協議した結果、この調査だけでは、遺跡の範囲及び性格が明らかではないので、再度確認調査を実施したのち、再協議することになり、2次調査を実施した。

その結果、この調査においても遺物、遺構は確認されるものの、遺跡の範囲や性格については、特定出来なかったため、発掘調査によらざるを得ない旨、平成10年3月10日付で、追加回答した。その後三度協議を重ねた結果、茨城県教育庁文化課の指導の下、記録保存の措置を講ずることになり、その間、玉造町教育委員会は、文化庁長官に遺跡発見届を提出し、遺跡名をこの地区の字名をとり、「八重橋遺跡」とした。

発掘調査に当たっては、鹿行文化研究所の汀安衛先生の協力を得て、平成11年1月13日から平成11年1月10日の期間で調査を実施することになった。



第1図 遺跡位置図

III 調査の概要

本調査は、平成9年度の土地改良工事に伴う事前調査の結果により、一部本調査を行うべきとの判断から行われた。平成10年度に各畠部分のトレンチを設定し土層の観察を行い、本畑地部分はすべて盛土によって畑地が作られた事が判明した。第2号畑地から平安

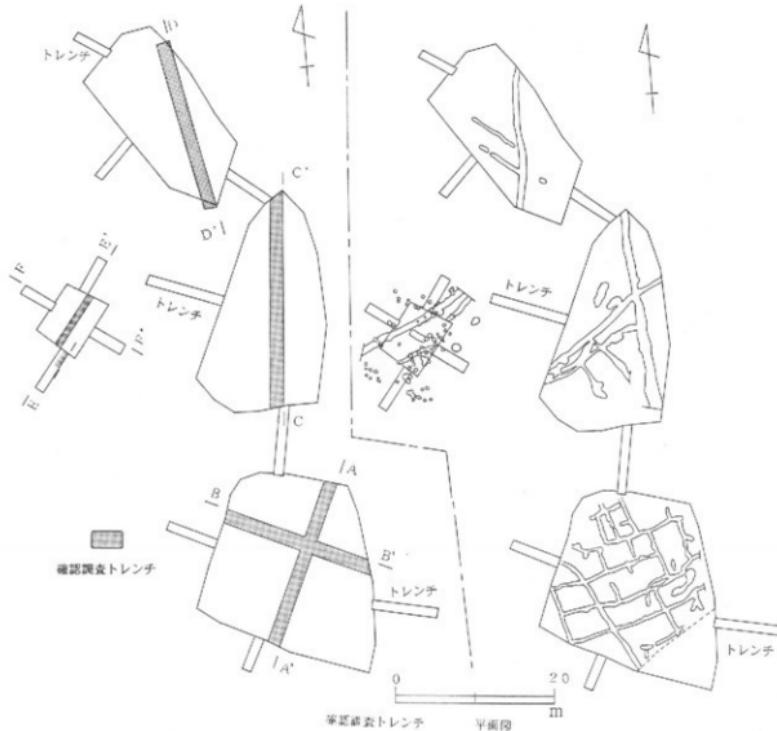


第2図 遺跡位置図

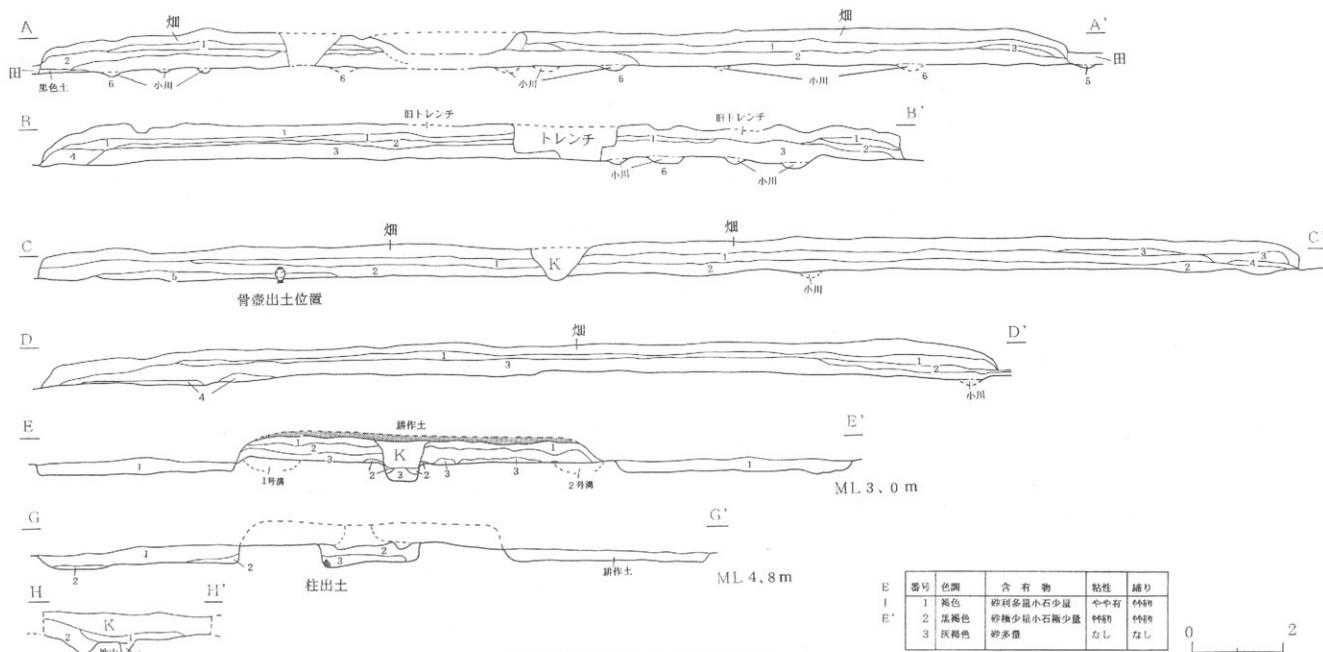
末期～12世紀初頭の骨壺が出土し、幼年期の火葬骨が埋葬されていた。（図版1）

盛土下部には黒色の腐蝕土層が部分的に認められ下部に小川が存在したと推定された。第4畝地からは長方形上の土坑？とピット群、木片が認められた。また、骨壺の周辺は拡幅し平面的に遺構等の有無を確認したが、他には検出されなかった。2次調査では、下部の遺構の存在は否定的であった。小川状の凹部が存在するにとどまった。

その後、県教育庁文化課の指導もあり畝地部分の全面調査を平成11年度行った。その結果、第1号畝地下部分から、平安末期から中世初頭の畠と思われる遺構、第2号畝地下部から2間4面のお堂が一字、やや古い時期の小川、水路、四角の木柱が出土した。建物、お堂の土台下の根石と思われる石から「願文」と思われる墨書きが認められた。第3号畝地下部では、直線的水路と自然流路状の溝が検出されている。遺構は少ない。レベル的には20cm程低い。第4号畝地下部、平面規模7m×10mの長方形形状プランからは溝と建物・柵跡と思われるピット群、木柱が7本出土した。何れも水田面下部からの検出であり、



第3図 遺跡全測図及びトレンチ位置図



番号	色調	含 有 物	粘性	粒性
A	1 茶色	砂利や多量	弱い	細粒
1'	2 黒褐色	砂利や多量	弱い	細粒
B口	3 黒褐色	黒色土全量	強い	強い
I	4 茶黄褐色	砂少量、水田シブ	弱弱	細粒
B口	5 茶赤褐色	水田シブ多量	弱弱	細粒
A	6 黒色	黒植土	強い	強い

番号	色調	含 有 物	粘性	粒性
C	1 茶色	砂利少量	弱い	細粒
I	2 黒褐色	砂やや多量	弱い	細粒
C'	3 茶色	砂多量	なし	細粒
D	4 茶色	砂、小石様少量	弱弱	細粒
I	5 黒褐色	砂、里和土少量	弱弱	細粒
D'	6 黒褐色	難溶性砂多量	弱い	弱い
	1 明褐色	砂多量	弱弱	細粒
	2 黑褐色	砂多量 砂利	弱弱	細粒
	3 黒褐色	砂少量の砂多量	弱弱	弱い
	4 黄褐色	水田のシブ弱	弱い	細粒

番号	色調	含 有 物	粘性	粒性
E	1 茶色	砂利多量小石少量	やや有	細粒
E'	2 黒褐色	砂極少量小石極少量	無弱	細粒
E	3 灰褐色	砂多量	なし	細粒
類				
E	1 茶色	砂利、小石少量	弱い	細粒
E'	2 黑褐色	砂利、黑白石少量	弱い	細粒
E	3 黑褐色	砂利、難溶石少量	弱い	細粒
G				
G	1 茶色	水田耕作土	弱い	弱い
I	2 黑褐色	砂利少量	弱い	弱い
G'	3 黑褐色	細石利少量	弱い	弱い
H				
H	1 前褐色	水田シブ	なし	弱い
I	2 黑褐色	細石少量	弱い	弱い

0 2
m
土層

第4図 トレンチ土層図

周辺の畑地や水田下部にかなりの遺構の広がりが推定される。盛土中から埴輪の小破片が出土している。微高地における平安時代前後の様相を把握できる好資料である。それは、水面の変化のため、沖洲地区集落下部周辺に古墳時代から平安時代・中世初期の集落の存在が肯定される。三味塚古墳整備調査でも同様の成果が得られた。それは、墳丘下に古墳時代和泉期の住居跡が検出される事からも裏付けられる。

以上のような調査経過をふまえ、本遺跡は平安末期の一時期の村落形態を知る重要性と好資料を得た。また、お堂根石の「願文」という類例のない出土をみた。古代末、玉造町にも川の氾濫によって埋もれた古代の集落が存在した。

IV 遺構と遺物

本調査は、畑地部分の作為的 existence が調査の発端となった。よってこの畑地部分を調査した。畑地部分は、水田中に4ヶ所島状に認められた。畑地は集落よりの南側から1~4と番号を付し調査を進めた。その中でも4は水田中に単独で位置し、プランも長方形で作為的に見られた。

以下この番号に従って、後述したい。なお畑地周辺部分も一部調査したがこれは畑地部分と合わせて述べる。

1. 1号畑地（第3、4、5、6図 図版2）

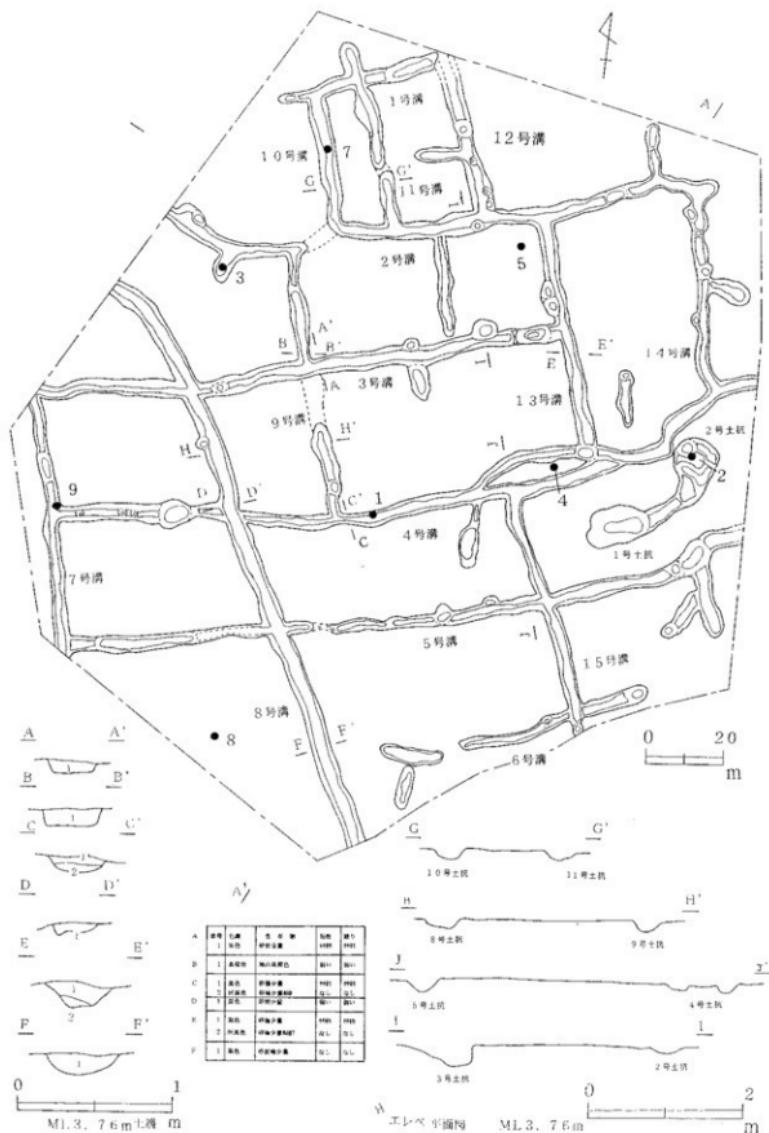
本畑地は、変形した五角形状を呈し最も南に位置し、北側とは60cmほどの高低差がある。南・西・北側では30cm程のレベル差の水田が広がる。東側10mには砂洲の先端部分の畑が位置する。南側には三味塚の周堤？部分農道が位置する。本畑地の面積は約400m²である。

表面は、畑として耕作され遺構の存在は確認できなかった。細砂礫層である。以下黒褐色の砂礫層が約30~40cmの厚さで盛土がなされている。この黒褐色土中には、遺構は認められなかった。黒褐色砂層の下には灰褐色の砂層が見られ、これは砂洲形成時の堆積土層？と推察された。部分的に確認調査時に黒褐色の腐蝕土層が認められた。当時は、自然の「小川」の可能性が大と思われた。

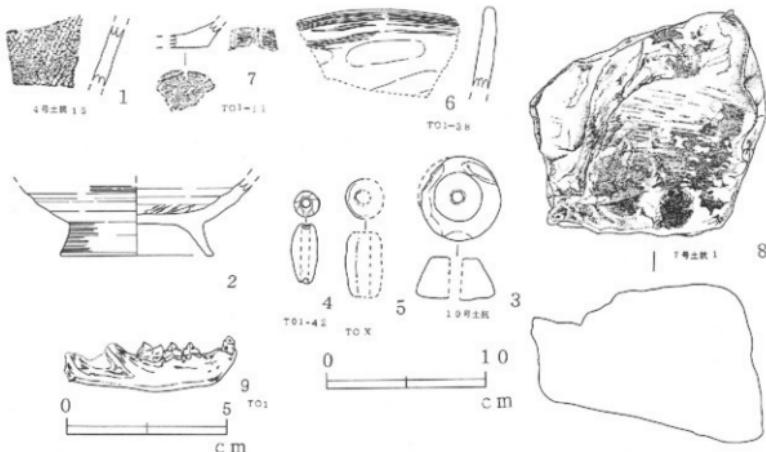
今回の全面調査によって、これらの大半は人工的掘り込みであることが判明した。いずれも幅30cm~40cm、深さ10cm~20cmの溝であり畑地の水はけのためか、一部には、自然状の形と思われるものも見られたが大部分人工的である。

本畑地下では、N-15°-W前後の主軸で幅30cm~40cm、深さ10cm~20cm程のU字状の溝で面積5m²~12m²前後の長方形状区画がなされていた。面積、形状は一定ではないが、溝の状態、プランツオパールの分析報告からいずれも畑地の跡の可能性が高いと推定される。

本遺構の盛土中、溝中からは第7図1~8が出土している。溝中からは1~5、7、8が出土し、1は縄文か弥生式土器の胴下部の一部と思われる。SD-4の溝中から出土。2は、SD-1の溝中から出土した高台付壺で台部は長目で「ハ」の字状に開き、内面は黒色、口クロ成形で付高台、平安末期10~11世紀の土器である。3は、台形状で中央



第5図 1号煙地下部遺構全測図



第6図 1号烟地下部遺構出土遺物実測図

部に孔をもつ防錐車で、一部欠がみられる。4、5は管状の土錐でやや大きい5と小型の4がある。6は、古備前の茶碗で口縁部の色調は茶褐色、黄橙で内面に青灰色の釉がみられる。7は、いわゆるカワラケの底部で糸切り痕が残る。8は、砂岩で全面に赤褐色、煤がみられ焼けたと思われる。その他9は、イヌの下顎骨がみられるが、近世の烟地耕作時の可能性が強い。本遺物の1、2、8以外はすべて盛土中からの出土である。

以上出土遺物から、本烟地下の遺構は平安末～中世初頭の烟地跡の可能性が強い。

2. 第2号烟地 (第7、8、9図 図版3、4)

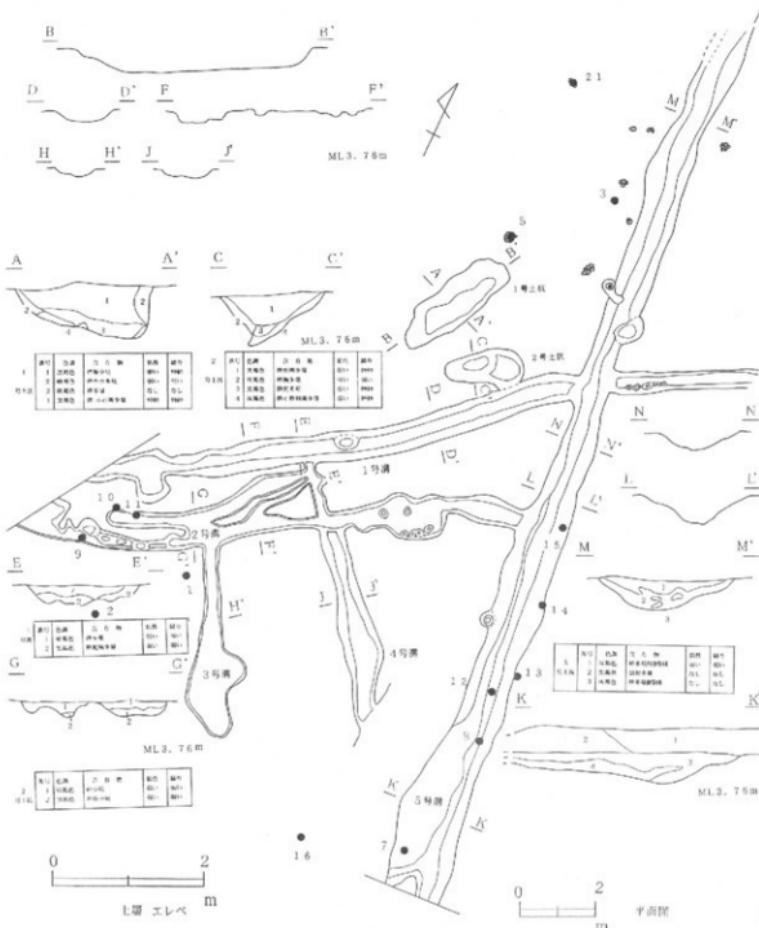
本烟地は、1の北側8mに位置しレベル的には1とほぼ同位である。北側は、1号烟地同様60cmほど下がる。そのためトレンチは設定しなかった。上部は、烟として利用されていた。烟地下は、砂礫層の黒褐色土層で、本土層中には遺跡の存在はなくいずれも一時期に盛土されたもので、ほぼ水平に積み上げられたと理解される。

下部には小川状の黒色腐蝕層がみられ、前回の調査では「小川状」の自然のものか?としてとらえた。また、トレンチ部分から中世初頭の蔵骨器が出土している。

遺物はやや多く出土したが、完形はない。1は2回目の土層確認時の南北トレンチ盛土層中から出土した常滑焼の古い三筋壺、片側の肩部が若干下がる。口縁部は欠いて使用したと思われ欠失している。現存高20cm、肩部最大径18cm、底部径9.5cmを測る。底部は安定した平底で胴部は弱く開きながら最大径の肩部に移行し、頸部は9cm程としまる。肩部の一部に自然釉が観察される。(スクリーントーン部) 胴部には、中位と肩部下部に1条づつの沈線が施されている。一部に2線になる部分もあり、又、器面も全体的に凸凹がみられる粗雑な作りである。常滑焼の土器で、三筋壺と呼称される(常滑市資料館清水氏教示)。その他、1の高坏脚部、2、3、4も盛土中からの出土で3、4は

須恵器、7、8は同じで小型の人物埴輪の脚部と思われ、三味塚古墳のものか、9は円筒埴輪の破片でやや大型と思われる。細かな刷毛目がみられる。3の高台付壺の脚は低く、径は小さく、やや古手の碗形土器で9～10世紀か、内面は黒色である。

10～16は土錘で、10は丸玉、11～16は管状形状のものでいずれも小型である。すべて盛土中からの出土である。17は、石製模造品で刃部状の尖りをもつが大半を欠失し形状は不明。18～20は石器状の河原石で、一応石器として図示した。いずれも盛土

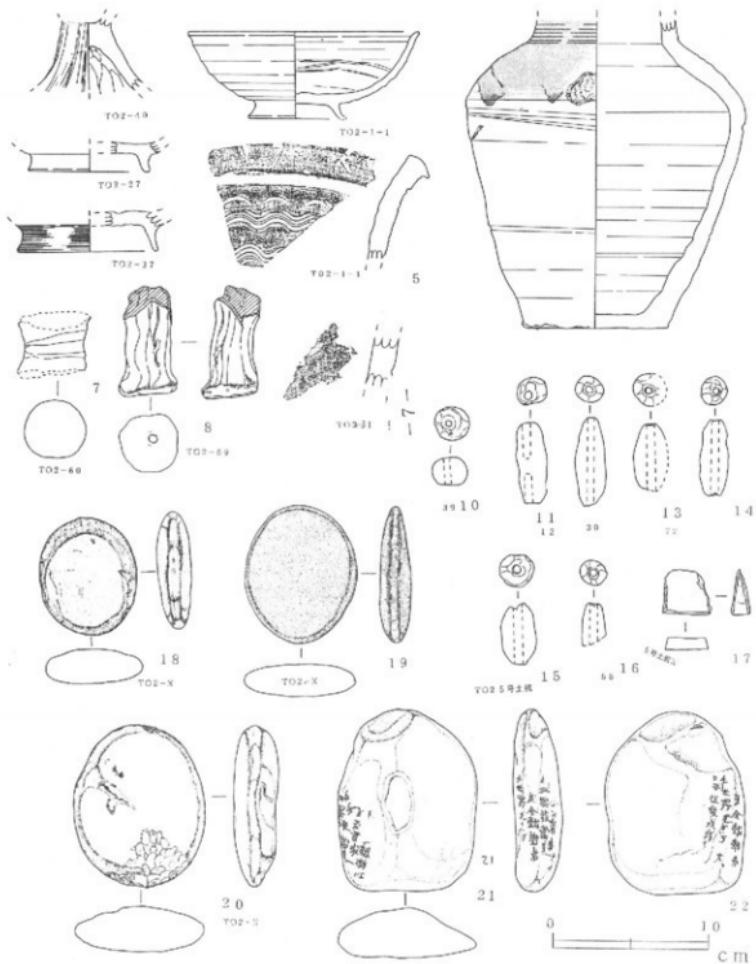


第7図 2号塚地下部遺構全測図

中から出土、20, 21は堂宇の根石である。21はやや変形した石で、6番目の根石の上から2番目に位置し、水平状態で検出された。石右端部の角部に墨書が認められ、判読できる字句からは願文と推察される。



第8図 2号畠地下部出土堂宇跡根石実測図



第9図 2号烟地出土遺物実測図

○堂宇根石と繩張り及び藏骨壺

根石状に存在したと思われる堂宇は、2間4面の方形プランで1間2.2m、7尺3寸である。4.4m4面の繩張から「お堂」の可能性が強く根石の墨書から「功德院」か?

その他、前面? 南側から、角材の柱状部分が砂、シルト層を掘り込み出土した。「願文」の文章は上下反対に書きこまれており、合わせて一文となる書体、書き方で類例はない。

口	我	口
口	世	口
受	界	果
戒	尤	余
身	讃	報
口	弗	當
一	ニ	三
四	五	六
七	八	九
十	十一	十二
		口

本文章が意味するものは、「戒を受け我が世の界は、幸で献仏の果報が當来する」と解析される。

本年代平安末期（出土土器から）における古代仏教の思想の中で最も身分の高い一人であったと推定される人物が、堂宇の土台根石に願文を墨書した。このこと自体が本時代の特殊な宗教心、身分をもつ人と思われ、そして出土した2間4面のお堂と深い関わりをもつ有力者と推察される。

本例は、関東周辺では例がない。出土土器から、根石が存在すること自体重要かつ貴重な資料である。土層上部から出土した藏骨器は、出土状態から本域の使用例から中世初頭とした。

このほか、お堂下部には調査で長さ30m幅1m、深さ40~50cmのU字の直線的な溝が存在していた。お堂はこの溝を埋めた上部に位置する。

その他、自然上の水路? 2、3号みられ腐蝕土が埋積している。土坑状、ピット状のものお堂前後に2ヶ所存在している。

本畠地は、1号同様遺跡の上面まではすべて人工的盛土層で下部は自然埋積層で、その下部は繩文時代からの砂洲として形成をみたシルト層で、すべての遺構はこの層を掘り込んでいる。

お堂根石は第9図の通り最低1ヶ所ないし3ヶ所の欠失部が認められ、一部小ピットの掘り込みが存在する場所もある。調査範囲では、1間2.2mで4.4mの2間4面の規模をもつ。

3. 第3号畠地（第10図 図版5）

本畠地は、1、2、3と北に向かって並列する最も北側に位置する地点で北側で約60cm程が低くなる。遺構が確認出来たのは、南側の部分で直線的な溝とこれと交叉する2本の溝である。1号溝は、全長30m、幅70cm、深さ15~20cmでU字状掘り込みであった。上層は、黒褐色の腐蝕層と砂礫層の2層で埋積は自然? 2、3は黒色層で、1号溝と「中」の字状に交錯する。これは、1号畠地の溝同様の幅30cm前後で深さ10~20cmできれいなU字形態で1号溝に掘り分けられている。溝内部からは時代を

判断する明確な遺物はない。本畠地はより鎌田川氾濫域よりに位置する。

上部畠地の盛土層下にも、遺構等の掘り込みは存在しない。遺構形態、埋積土からは、1, 2号畠地同様の時期が推定できる。

4. 第4号畠地 (第11, 12, 13図 図版5)

本畠地は、南側の農道と前述の1~3号に畠地に囲まれた水田中に位置し、長さ10m、幅6cm程の長方形状プランを呈し、面積60m²ほどの最も小さな畠地である。上部は、畠地として利用され30cm程は搅乱をうけている。以下は、黒褐色と砂礫層である。この部分で、長方形状の土坑が1基検出されている。掘り込みは30cm前後で、砂礫上を僅かに掘り込む。その他は、すべて黒褐色土層。下部から検出された遺構は、灰白色に近い砂礫層を掘り込み溝、土坑、建屋、柵列等が出土した。現水田面下30~35cmからの検出である。(遺構の一部は)ピットは95基、溝は2条、土坑2、掘建遺構と思われるもの4軒、柵列と思われるもの2, 3列がみられた。

1号掘建は、北側は1.1m(約3.4尺)程で3間、幅は2.7m(9尺)程で、南側は中央が1.5m(5尺)左右が90cm(3尺)と1.3m(4.3尺)とやや不規則な柱間をもつ。2号建屋は、北側では1.2m(4尺)の2間、幅は1.5m(5尺)で両側の柱は検出できなかった。小型の作りで物置状か、3, 4号建屋も北側部分のみの調査で南側は不明である。

○出土木材 (第14図、15図、16図、17図、図版5)

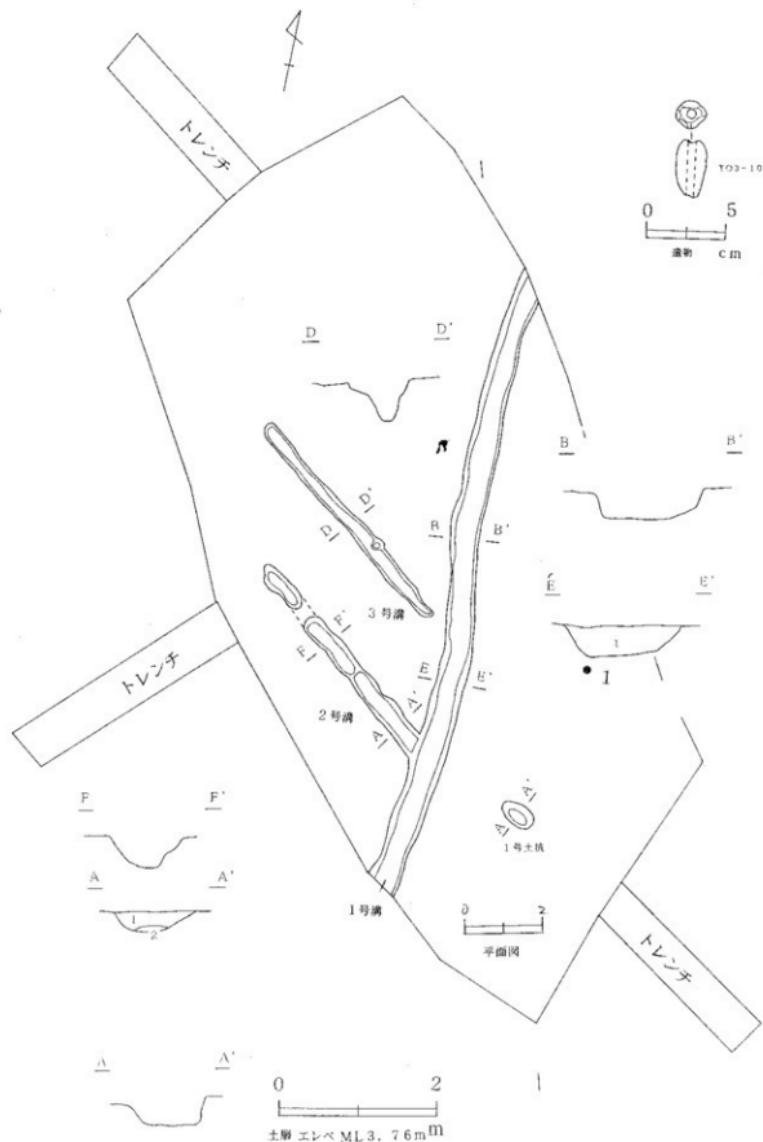
本遺跡から出土した木材はクス科のものと松等の材質が見られた。1は2号畠地下部のいわゆる堂宇の前面、30cmから出土した角材で幅14~15cm(5)程の柱材の下部と思われ、底部はノコギリ状の道具で切断している。

2からは4号畠地下からの出土で、2はP-28部分から立ったままで出上下部は鉈状の工具で小さくとがいでいる。材木の白太部分は腐蝕し欠失し、いわゆる赤味部分が遺存している。約14cm前後の方形状に加工した柱在の1部と推察される。長さは45cm程を測り、材質はクスノキ科の木材か。

15図3は、P-66から出土したもので、直列状態で出土した1辺12~13cm程の角柱に加工されたもので下部はかなり鋭利なものではほぼ平面的カットされている。長さ40cm程で上部は欠失部が多く三角状に尖る。材質はクスノキ科か。4は、P-38から横位で出土した。半円状のもので厚さ6.5cmほどを測る。

2同様、ナタ状の工具でカットしている。以前は立っていたのか、上部は尖り氣味。長さは、38cm前後で材質はクスノキ科?第16図-5は、P-74から出土したもので、円形状の小土坑掘り込みで、南側底部に横位で出土したもので前後、上下は尖り氣味、本来両側ともカットした状態で使用されたと思われる。長さは45cm程で、中央では12cm×9cm前後の長方形状、材質はクス科。6は横位で、P-65から出土した木製品と思われるもので1部欠失している。用途は不明、長さ22cm、幅18cm、厚さ2.5cmで薄い。材質は松である。7はP-6から出土したもので、こぶし大で辺8~9cm、三角形状の下部である。上部はかなり腐蝕、欠失している。材質はクスノキ科。

8は、P-16北西側から出土した柱状木材で、断面5cm×7cmの長方形状を呈し



第10図 第3号煙地下部遺構及び出土遺物実測図

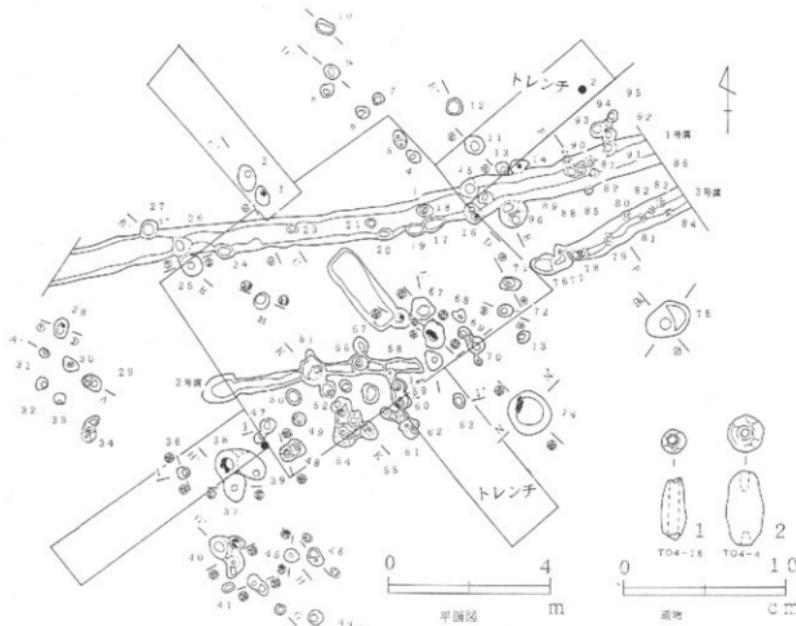
ている。遺構状態からは、柱状の1部と思われる立った状態で出土している。長さは30cmで、材質はクスノキ科である。

9は、8の東側から出土した角柱の1部と推察され立った状態で出土している。断面上部は欠失し赤味のみで尖る。材質はクス科か?長さは35cm前後を測る。

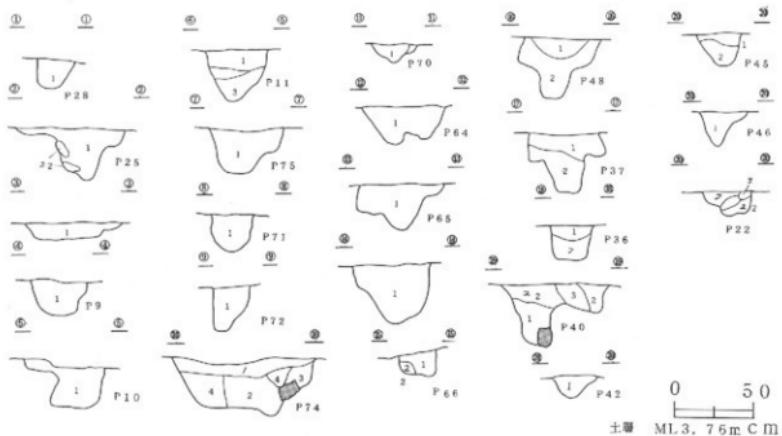
10は丸太状の木片でP-38から横位で出土した。木製状の木片で、断面半円形状で長さは21cmと短く用途等は不明。

11, 12は、P-40から横位で出土して、丸太状のもので白太部分は欠失し、赤味部分のみが遺存し断面半円形状、11の下部はとがった状態でカットされている。長さ20cm、12は25cmで材質はいずれもクス科。

以上が出土遺物の概要であるが、いずれも建物の柱材か柵列の柱材の可能性が強く、周辺にはかなりの建物が存在したと推定される。全面調査を行わなければ本来の姿は解明できない。

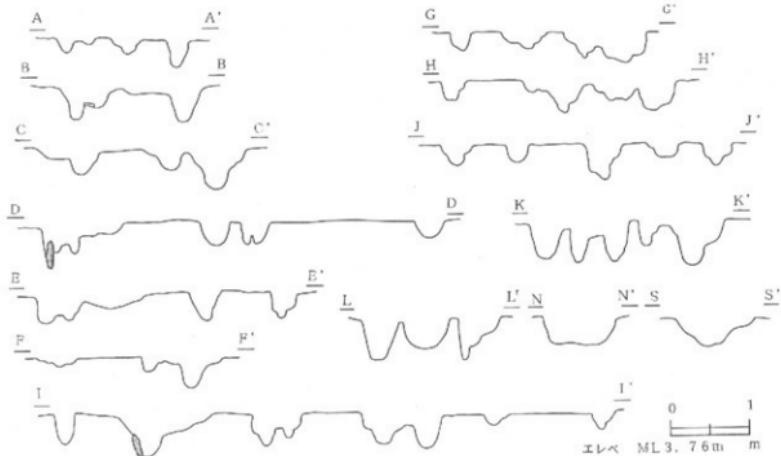


第11図 4号畑地下部出土遺構実測図

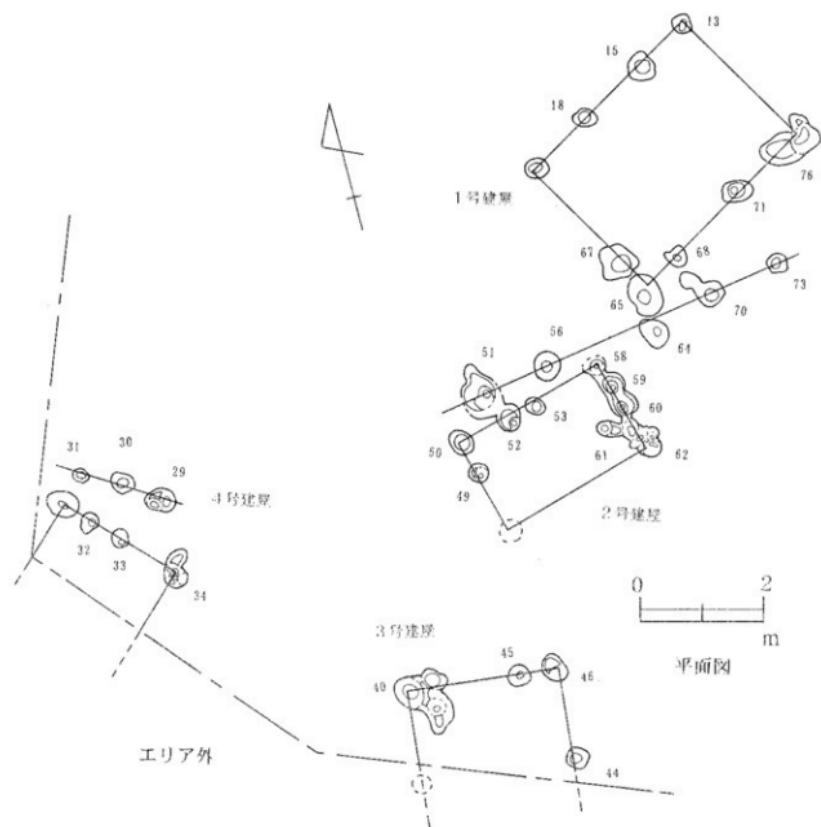


土壠 ML 3. 76 m C M

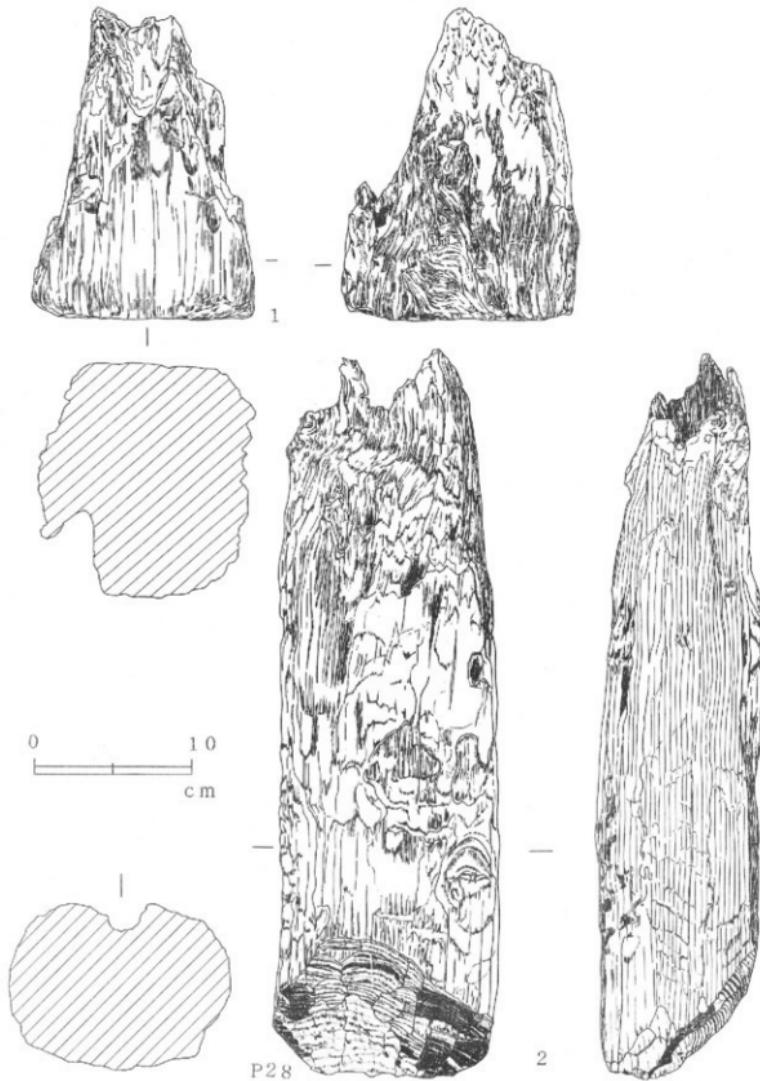
P	番号	地名	地質	岩相	層厚	層位										
P	28	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	29	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	30	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	31	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	32	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	33	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	34	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	35	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	36	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	37	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	38	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	39	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	40	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	41	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	42	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	43	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	44	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	45	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	46	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	47	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	48	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	49	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6
P	50	新潟市	新潟層	砂岩	10	1	10	2	10	3	10	4	10	5	10	6



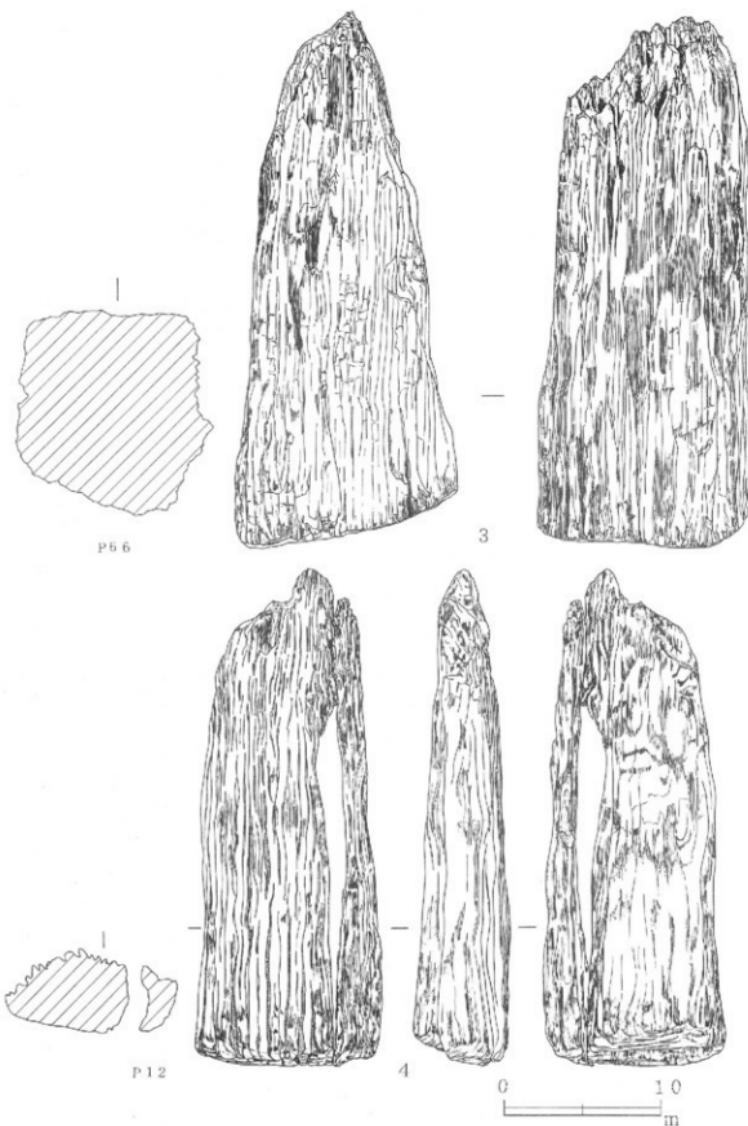
第12図 4号煙地下部溝及び断面図



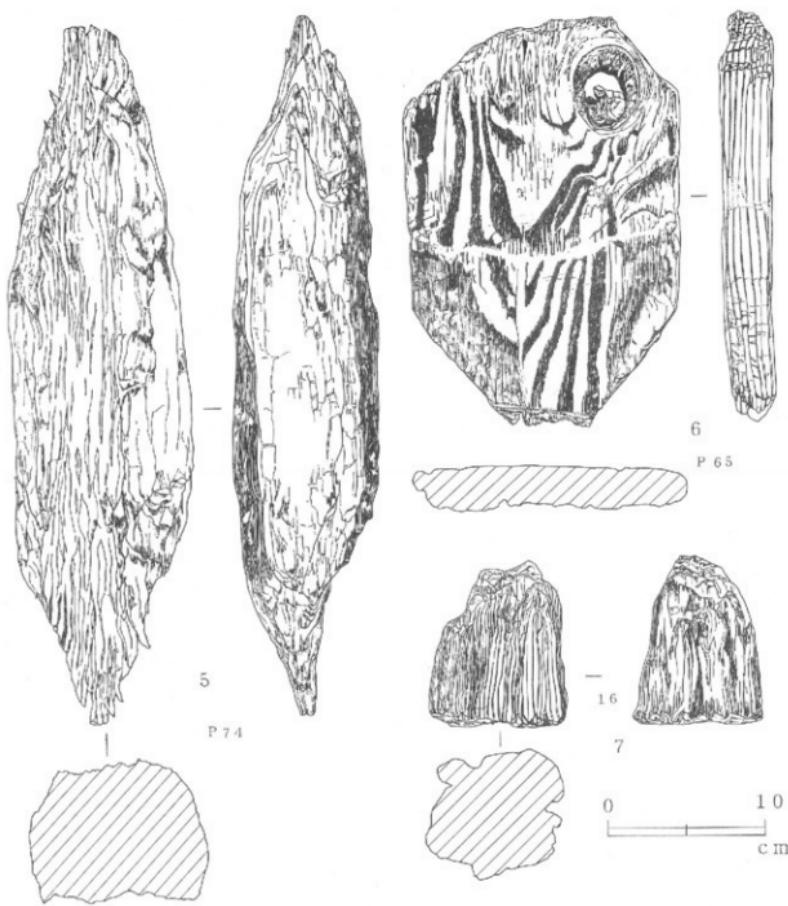
第13図 4号煙地下部出土掘建遺構実測図



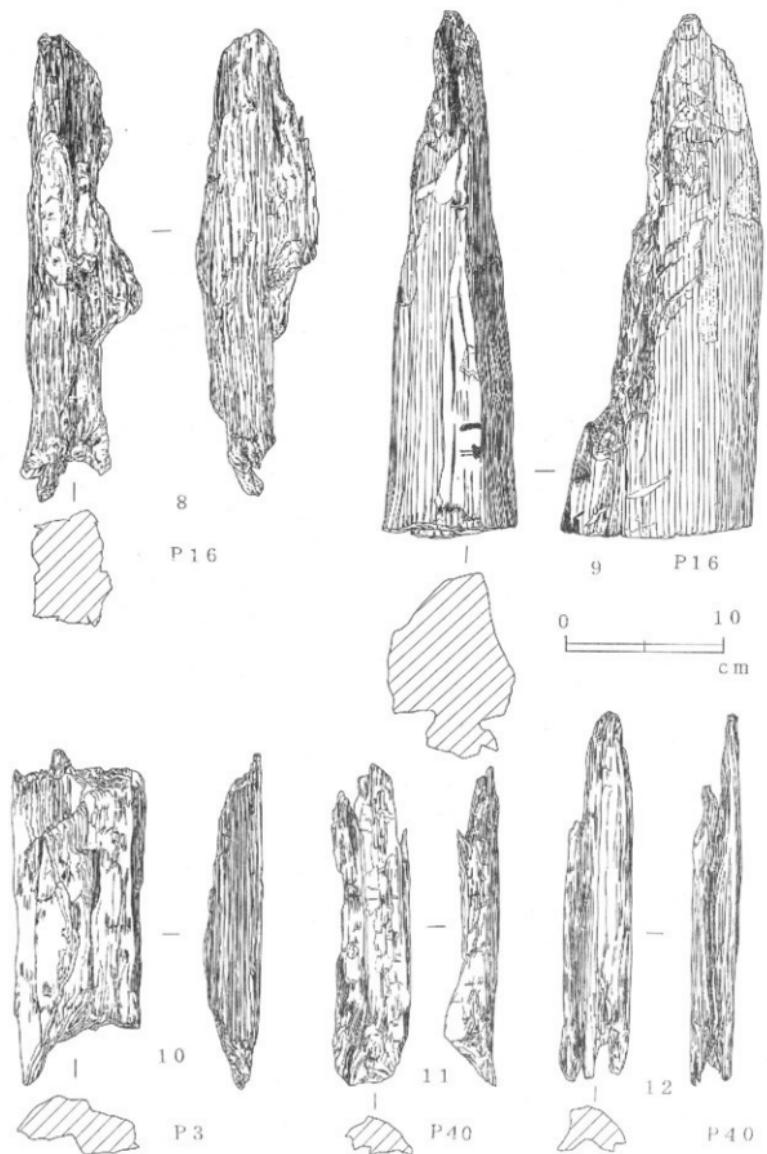
第14図 2・4号煙地下部出土木柱及び木片



第15図 4号烟地下部出土木柱及び木片



第16図 4号煙地下部出土木柱及び木片



第17図 4号煙地下部出土木柱及び木片

V 総 括

八重橋遺跡は3次にわたる確認試掘、本調査と回を重ねた。その結果、9～10世紀、10～11世紀の遺構、遺物の出土を見た。本来、標高3.8m前後の微高地に集落の存在は想像できなかった。しかし本調査の結果、前述の時期の遺構、遺物、建物が検出された。

ここで最も注目されるものは、堂宇と根石、根石の「願文」であり、水田下の砂洲状低地の古代集落の存在である。これらは鹿行地域の微高地の形成された時代、遺構を把握しなければ歴史は語れないことを意味している。

神栖町における低地遺跡の存在、潮来町辻の微高地の古墳等、微高地砂洲上の遺跡は今後注意しなければならないことを本遺跡は言っている。

古代における2間四面の堂宇の存在は古代寺院の在り方、集落と仏教、堂宇の位置関係等、その包含する問題は複雑多岐である。また、溝に区画された畠の存在、柱材の種類、また、地理的な要因で極限られた一時期の遺跡、これは鎌田川のためか霞ヶ浦の水位変化のためか定かではないが、陸地から湿地と向かう気候の変化の時期が存在したことは事実である。

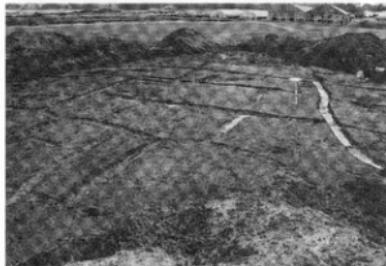
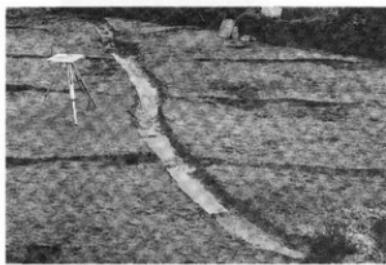
その他、常滑焼の三筋壺による埋葬や火葬の風習は、その生産地の確認が重要であり、中の骨は当時本地域で火葬の風習等が存在していたことを示す事例である。

参考文献

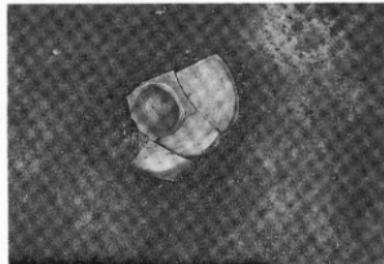
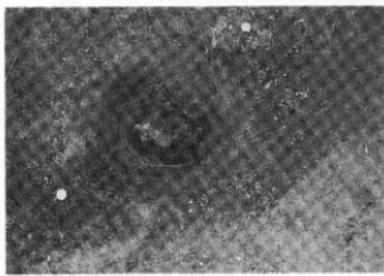
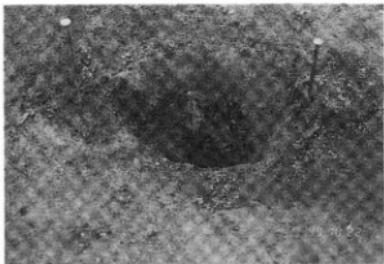
明治大学 1995 『三昧塚古墳発掘調査報告書』



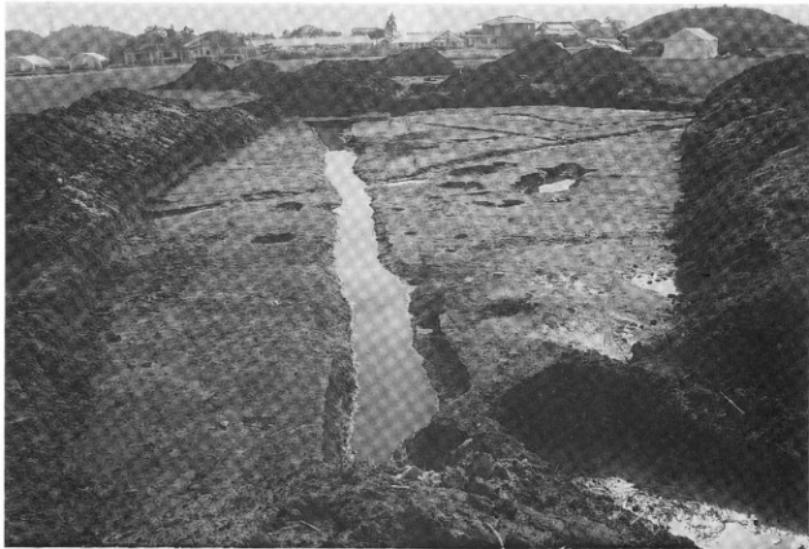
確認調査とトレンチ、藏骨器、人骨



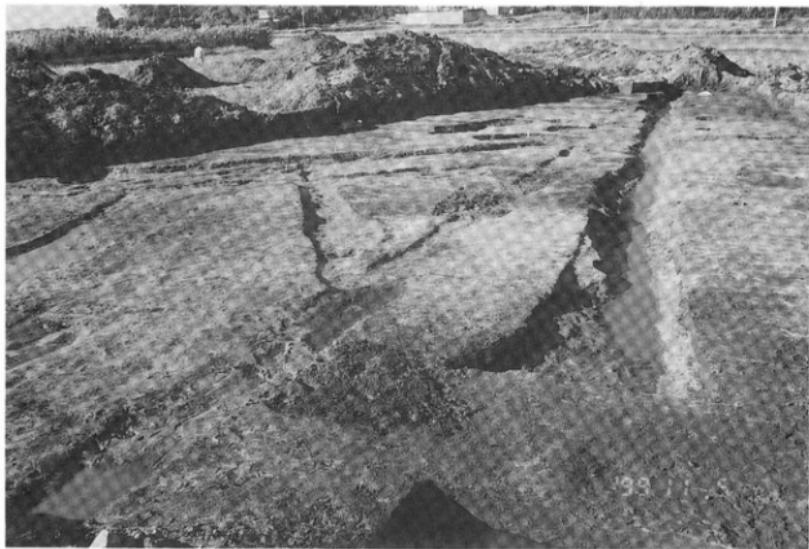
本調査前1号畠地下部。調査風景。溝の大小。方形状区画畠地？



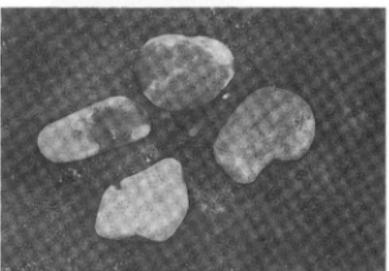
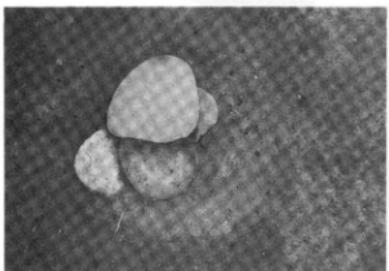
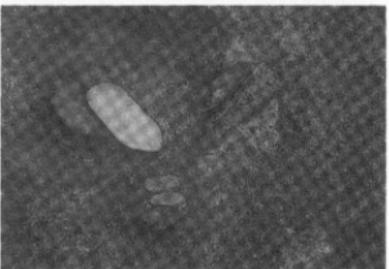
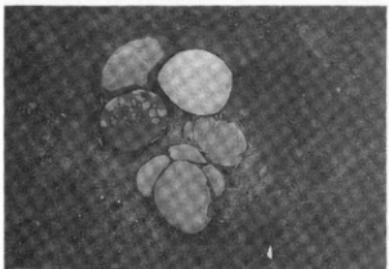
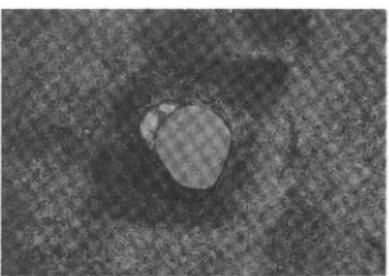
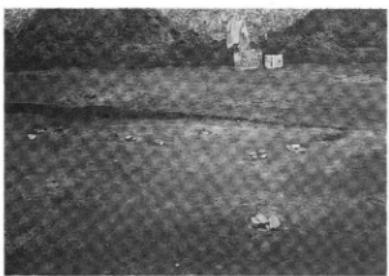
2号烟地下部全景 满土层、土坑、柱材、出土土器



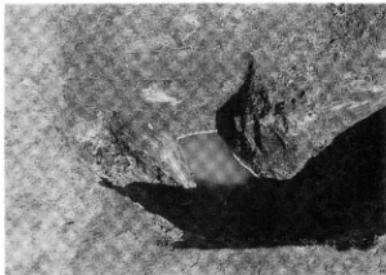
2号烟地下部溝と根石（北側から）



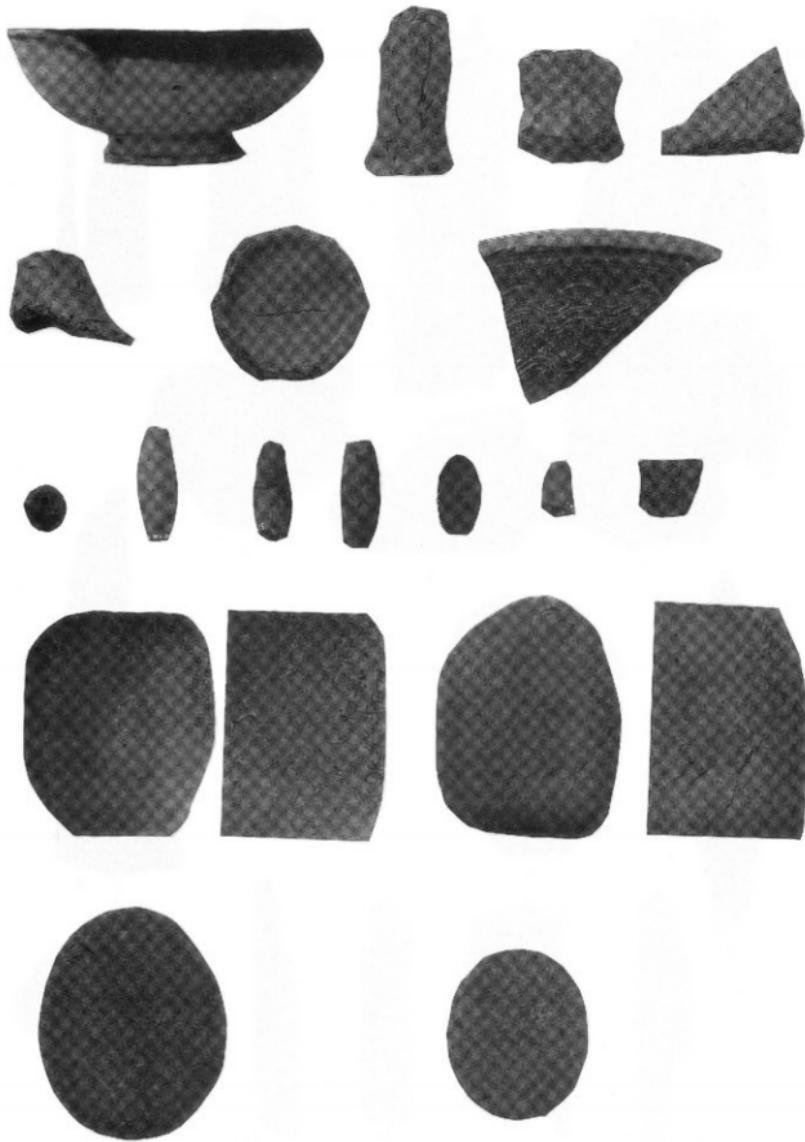
同・南側から



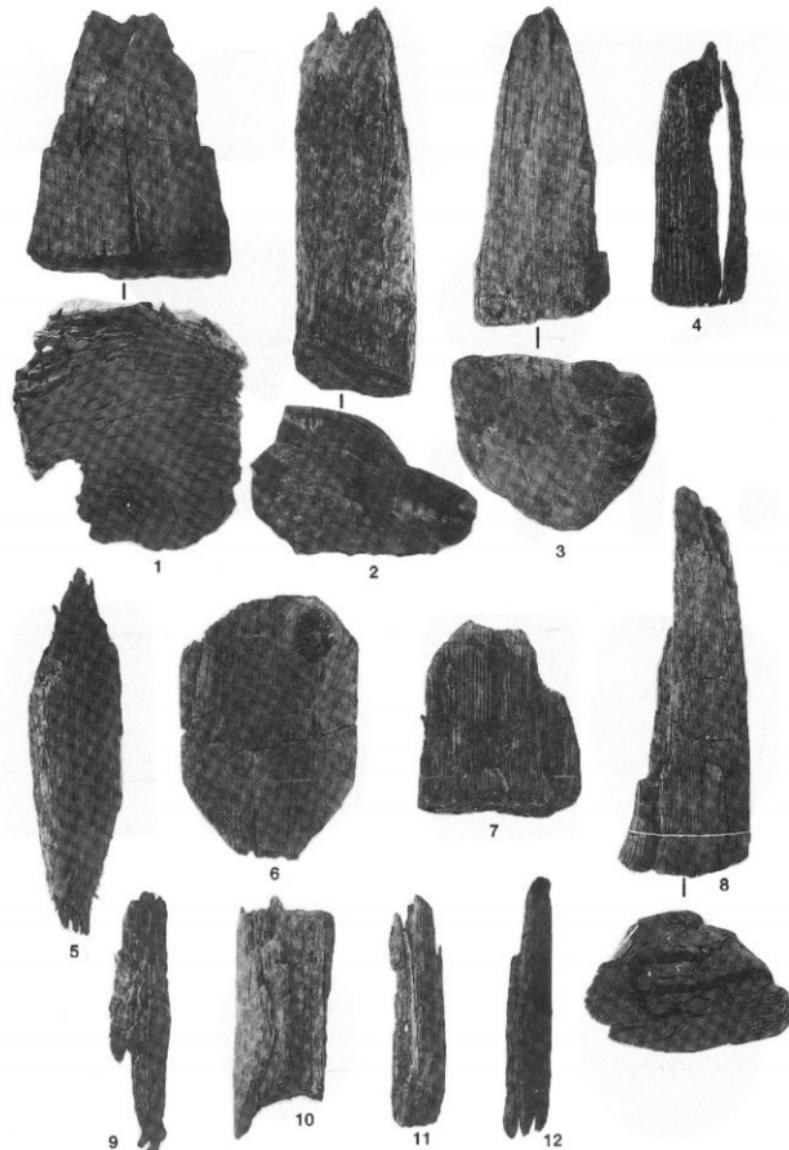
2号畠地、堂宇根石、根石、1、2、3、4、5、その他（2の上部？）



3号畠地下部の溝 4号畠地全景、木材出土状況、出土遺物



1号煙地溝出高台坏2、4号地下部出土遺物、墨書根石と石器



2、4号烟地下部出土木材、(1、2号烟地) 他、4号烟地下部縮尺不動

第 2 部

八重橋遺跡

第 2 次 発掘調査

第2部 目 次

目次

表目次

図目次

図版目次

はじめに

I 調査区域と調査方法

II 遺構と遺物

III 溝

IV 土坑

V ピット

図表目次

- | | |
|--------|----------------------------------|
| 第 1 図 | 遺構位置実測図 |
| 第 2 図 | 第 1 号掘建遺構実測図 |
| 第 3 図 | 第 2 号掘建遺構実測図 |
| 第 4 図 | 第 3 号掘建遺構実測図 |
| 第 5 図 | 第 4 号掘建遺構実測図 |
| 第 6 図 | 第 5 号掘建遺構実測図 |
| 第 7 図 | 第 6 号掘建遺構実測図 |
| 第 8 図 | 第 7 号掘建遺構実測図 |
| 第 9 図 | 第 8 号掘建遺構実測図 |
| 第 10 図 | 掘建遺構出土遺物実測図 |
| 第 11 図 | 第 9 号掘建遺構実測図 |
| 第 12 図 | 第 1, 2, 103, 104 号溝実測図 |
| 第 13 図 | 第 3, 4, 5, 8, 9, 12, 13 号溝実測図 |
| 第 14 図 | 第 7, 10, 11, 103, 104, 105 号溝実測図 |
| 第 15 図 | 第 14, 15, 18, 20 号溝実測図 |
| 第 16 図 | 第 16, 17, 19, 30 号溝実測図 |
| 第 17 図 | 第 21, 22 号溝実測図 |
| 第 18 図 | 第 23, 24, 25, 26, 27 号溝実測図 |

- 第 19 図 第 28, 29, 32, 33 号溝実測図
第 20 図 第 31, 35, 36 号溝実測図
第 21 図 第 34, 37, 38, 39 号溝実測図
第 22 図 第 40, 41, 43, 44 号溝実測図
第 23 図 第 42, 45, 46, 47 号溝実測図
第 24 図 第 48, 49, 50, 51, 52 号溝実測図
第 25 図 第 53, 54, 55, 62 号溝実測図
第 26 図 第 56, 56', 57, 58, 59, 60, 61 号溝実測図
第 27 図 第 103, 104, 105 号溝実測図
第 28 図 第 63, 64, 65, 66, 103 号溝実測図
第 29 図 溝出土遺物実測、拓影図
第 30 図 第 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13 号土坑実測図
第 31 図 第 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 22, 23, 24, 25, 26 号土坑実測図
第 32 図 第 27, 28, 29, 30, 30', 31, 32, 39, 40 号上坑実測図
第 33 図 第 43, 44, 46, 47, 48, 50, 52, 53, 54 号土坑実測図
第 34 図 第 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67 号土坑実測図
第 35 図 第 69, 70, 100, 101 号土坑実測図
第 36 図 土坑出土遺物実測、拓影図
第 37 図 第 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 19', 20, 21, 22, 23, 24, 25, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31 号ピット実測図
第 38 図 第 36, 37, 38, 39, 40, 40', 41, 42, 42', 43, 45, 46, 47, 48ABC, 49, 49', 50, 51, 52, 53, 53', 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64 号
ピット実測図
第 39 図 第 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 99', 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 112', 113, 114, 115, 116, 116', 117, 118, 119, 119', 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139 号
ピット実測図
第 40 図 第 147, 156, 156', 157, 157', 158A, 158C, 168, 169, 169', 170, 173, 177, 179, 185C, 185D, 191, 192, 193, 193', 194', 213, 215', 215ABC, 216, 242, 243, 436, 437, 438, 439, 440, 442, 449 号
ピット実測図
第 41 図 第 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 252', 390, 392ABC, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 412, 413, 414, 415, 416, 417A, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 426, 427, 428, 429, 430 号
ピット実測図
第 42 図 第 229, 252, 253, 253', 254, 255, 256, 257, 257', 258, 259, 259', 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268', 269, 270, 271, 272, 273, 276, 277, 278, 279, 290B, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 300 号
ピット実測図
第 43 図 第 301, 302, 303, 312, 312', 313, 323A, 345, 347, 348, 349, 356, 358, 363A～F, 364, 365, 366, 367, 368', 369, 370, 371, 372, 373, 374, 376, 377, 378, 380, 380', 381, 382, 385, 388, 389 号
ピット実測図
第 44 図 第 45', 447, 448, 450, 452, 453, 454, 455, 455', 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 465, 466, 468, 469, 470 号
ピット実測図

第 4 5 図 ピット出土遺物実側図

第 4 6 図 沖州、八重橋表採遺物出土遺物実側図

第 4 7 図 遺構位置図

- 表 1 第 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 25', 26, 27, 28,
29, 30, 31, 36, 37, 38, 39, 40, 40, 41, 42, 42, 43, 45, 46, 47, 48ABC, 49, 50, 51,
52 号ピット
- 表 2 第 53, 53', 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 90, 91, 92, 93, 94,
95, 96, 97, 98, 99, 99', 100, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111,
112, 112', 113, 114, 115, 116, 116' 号ピット
- 表 3 第 117, 118, 101, 119, 119', 120, 121, 122, 123, 124', 125, 126, 127, 128,
129, 130, 131, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 147, 156, 156', 157,
157', 158BC, 168, 169, 169', 170, 173, 177, 179, 185C, 185D, 191, 192 号
ピット
- 表 4 第 193, 193', 194', 213, 215', 215ABC, 216, 242, 243, 436, 437, 438, 439,
440, 442, 449, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 252', 390, 392ABC, 400, 401,
402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412 号ピット
- 表 5 第 413, 414, 415, 416, 417A, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 426, 427, 428,
429, 430, 430', 229, 252, 253, 253', 254, 254', 255', 256, 257, 257', 258,
259, 259', 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 269, 270, 271, 272, 273
号ピット
- 表 6 第 274, 275, 276, 277, 277', 278, 279, 290AB, 291, 292', 293, 294, 295, 296,
297, 298, 300, 301, 302, 303, 312, 312', 313, 323A, 345, 347, 348, 349, 356, 35
8, 360, 361, 362, 363A~F 号ピット
- 表 7 第 364, 365, 366, 367, 368, 368', 369, 370, 371, 372, 373, 374, 376, 377, 378,
379, 380, 380', 381, 382, 385, 388, 389, 45', 447, 448, 450, 452, 453, 454,
455, 455', 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 465, 466, 468 号ピット
- 表 8 第 469, 470 号ピット
- 表 9 管状土錐、煙管、出土錢

図版目次

PL- 1	調査前の全景（南側から）鎌田川と小川町の台地を望む	...
PL- 2	調査区北隅と三昧塚古墳、沖積地と霞ヶ浦の高浜入り	...
PL- 3	三昧塚古墳と中央部の柱穴群、溝	...
PL- 4	調査区東北部の柱穴と溝	...
PL- 5	中央部の柱穴群、溝、1, 2, 5, 6号掘建遺構柱穴群、 46, 101号溝	...
PL- 6	9号掘建遺構柱穴群（北西、東、西北側）	...
PL- 7	1, 2, 4, 5号溝完掘状態	...
PL- 8	10, 11, 100号溝、16, 13, 32号溝完掘	...
PL- 9	6号、17, 16, 19号、甕出土状態、28号溝完掘	...
PL-10	1, 2号掘建遺構、104, 101, 8角形の柱が出土した右手前 ピット群	...
PL-11	7, 8号掘建遺構、100, 101号土坑完掘、 7, 8号掘建遺構ピット群	...
PL-12	16, 13, 31, 22号土坑完掘、7, 8号掘建遺構ピット群	...
PL-13	28号溝、8号土坑土層、12号溝、30, 30'号土坑完掘、 19号土坑土層	...
PL-14	15, 32, 41, 27, 37, 43号ピット完掘	...
PL-15	35, 83, 66, 92, 73号ピット柱、根太出土状態	...
PL-16	92, 151, 152, 176, 239, 000, 229号 ピット柱出土状態	...
PL-17	SK-1, 61, 61, 85, SD-100	...
PL-18	P-73, 92, 157, 165	...
PL-19	9-151, 152, 174, 236	...
PL-20	P-138A, 171, 183, 243, 179	...
PL-21	P-189, 239, 227, 196, 243, 329, 303, 310	...
PL-22	P-449, 303, 325, 319, 416, 359, 304, 305, 324, 294, SD-15	...
PL-23	(上) SK-25下駄、SD-46, 100, 103, 46, 10 (中) SD-39, 17, 36, P-273, 39 (下) P-73, 384, 156, SD-103	...
PL-24	グリット表採（上、下）	...

はじめに

平成11年10月～11月にかけて本遺跡を発掘調査した際、9世紀～11世紀の遺構、遺物が確認された。本来標高3.8m前後の微高地に集落が存在することは考えられないことである。

これにより本遺跡の重要性を認識し、茨城県歴史館齊藤弘道氏、内山俊身氏、佐藤好雄氏、さいたま文学館学芸員宮瀬交二氏、愛知県常滑市立常滑資料館中野晴久氏にご教示を受けた。その結果更に、本遺跡の持つ価値を意識し、遺跡保存の為鉢田土地改良事務所との協議、玉造町教育委員会、沖洲土地改良区との再三の協議を重ねた。

しかしながら、ほ場整備事業の早期実施のためには、発掘調査による記録保存を実施する以外手段はないということになり、その費用を補正予算で対応し、平成12年9月25日から11月14日の期間で第2次調査を実施することになった。

I 調査区域と調査方法

第2次調査は、約40aを調査対象区とした。一次調査分を含めると50a程の平面部を調査した結果になる。

対象区域は標高4.5mを基準としたが、耕作土を剥いで見ると表面観察とはかなりの差が見られた。一次調査の関係から、東から南は『畑』、西側は屋敷跡と推定して調査に臨んだが見事に裏をかかれた。それほど単純な遺跡ではなかった。

表土「耕作土」を除去後10m方眼のグリッドを設定し、西側の隅部から遺構確認作業を開始し、調査に入った。調査をはじめ10日間程は晴天が続き季節柄調査日和が続いたが以後、雨と風に見舞われ水田の下を掘る難しさ、砂質のシルト層の軟弱さに悩まされ続けた。10月下旬には大雨に度々見舞われ、水汲みが仕事になり、調査は遅々として進まない。遺構プランは変形、半裁の土層は崩落しセクションのみの遺構が多い。

調査は、水と時間との戦いに終始し本来の目的が完遂出来なかった。一部に未調査部分を残し、11月14日に終わりとした。都合46日間であった。

以下、建屋、溝、土坑、ピットの順に遺構と出土遺物を述べる。一次調査とは別に遺構番号は1号から付けた。重複するものについては別に述べる。

II 遺構と遺物

掘建遺構（第1図）

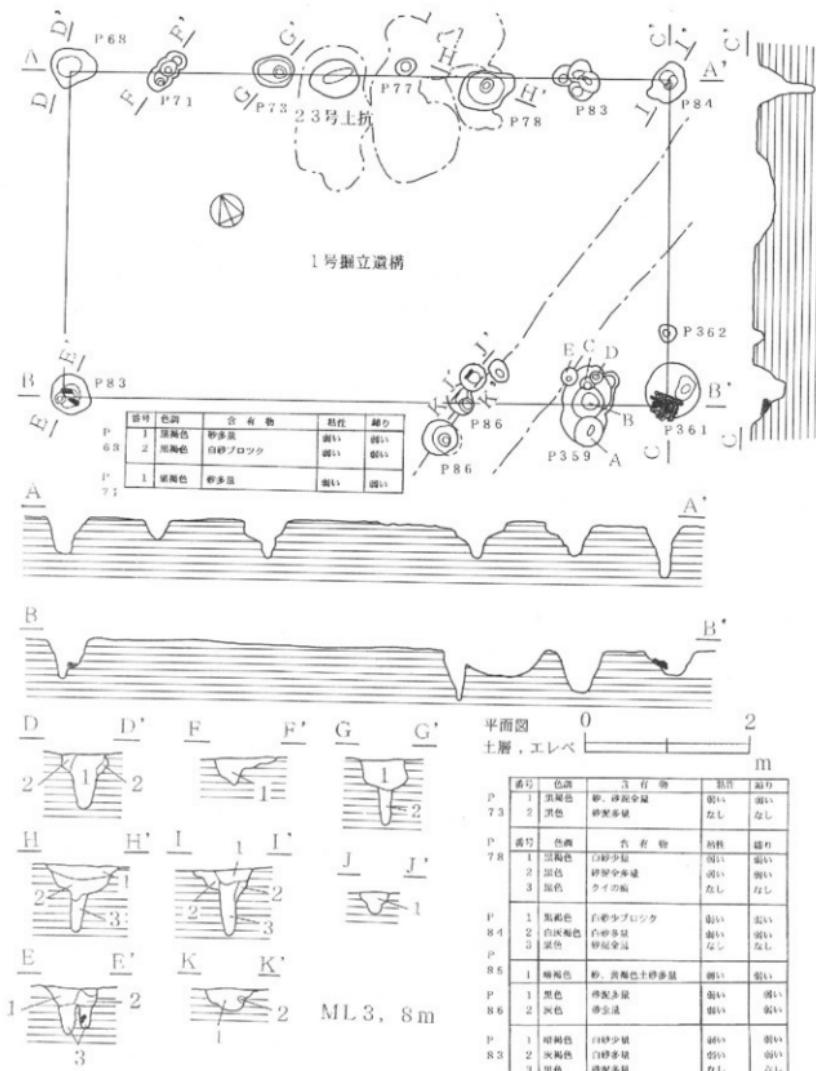
本調査では都合9軒の建屋が存在していたと推察され、一次分と合わせ10軒以上の家屋と1堂宇が存在した。これは本遺跡の極一部であり遺存部の三昧塚周辺、沖洲地区の下部には相当の遺構の存在が推察される。長屋状の位置と思われるものも北隅に検出されている。方位的には南北、東南の差異が見られた。何れも調査順の番号で有り、時期等の差によるものではない。



第1図 遺構位置実測図

1号掘建遺構 (第2図 図版3, 4)

本遺構は、C-5区の調査区中央部西側に位置し東西7.4m南北4m程のプランで北側に1.2m程の間隔に柱、ピットが位置している。約1間6尺1寸として4間×2間半の掘建が想定さ



第2図 第1号掘建遺構実測図

れる。南側は、かなり柱は粗である。8 8 と 3 6 1 には木材が根石状に底部近くに位置する。掘建遺構は主軸が N-67°-W を示す。ピットは径 4.0 ~ 5.0 cm でには 6.0 cm 前後のものも見られる。層序は確認面の黒褐色、黒色で黒褐色は砂が混入し、黒色は泥が混入している。灰褐色や白灰褐色はシルト層の混入である。平均的に縮り、粘性は弱くシルト、砂泥層は無い。

東側には 101 号溝が掘り込まれている。

2 号掘建遺構 (第3図 図版3, 4)

本遺構は、1号建屋より南、西側に 1.30 cm 程ずつずれて位置し、東西 7.6 m、南北 4.6 m 程の長方形プランでおよそ 6 尺 2 寸間である。1号掘建遺構と物差しに差がある。ピットの間は 1 m と 1.5 m の二通りが見られる。8 5 と SD-2 1 の 5 に丸太状の木材が遺存している。南側に 3 尺程の【さげ】と思われるものが有る。向きは N-65°-W、ピットは径 3.0 ~ 6.0 cm の楕円、長円形状を呈している。掘り込みは全体的に断面三角形 V 字状を示す。1号掘建遺構のピットとは差異が見られる。一部に U 字状も見られる。(8 2 と P-5) 掘り込みは 2.5 ~ 4.0 cm のものが多い。一部に 5.0 cm 前後のものも見られるが全体に 1号掘建遺構に比べると浅い。

層序は、確認面で黒褐色が多い。6 6 は抜き取り状の埋積か。黒色は砂泥が全量に近い。6 9 はやや特異な層序を示し、白砂ブロックを含む。何れも縮まり、粘性は弱い。

遺物は、P 83 A' と 3 6 1, 1 7 4 から木片が根太状に見られた。東側端部に 101 号溝が掘り込まれている。

3 号掘建遺構 (第4図 図版4)

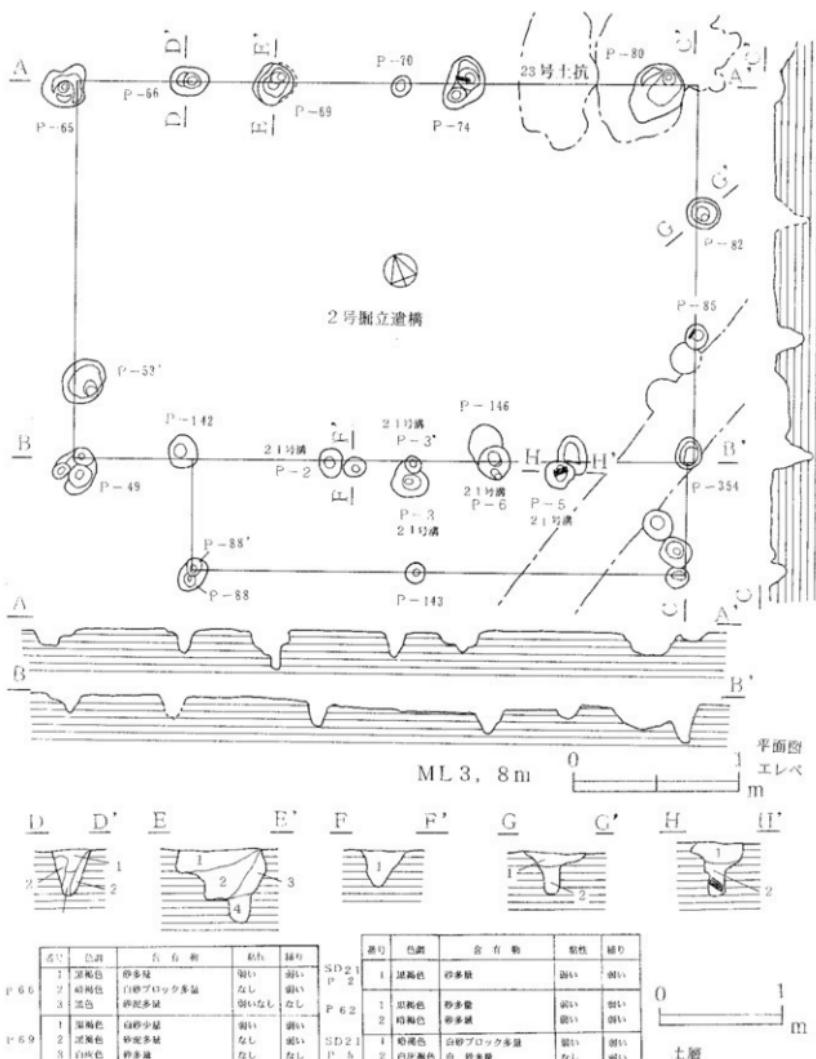
本遺構は、1号掘建遺構と 2 号掘建遺構の間に位置するものと思われ、やや無理があるがピットの掘り方プランから推察したが変則的な間取りとになった。東西 5.5 m に 2.4 m の変則的間取りで N-65°-W。東西 4 間、南北 3 間半前後の規模と思われる。ピット間は 2.4 m と 4 m 前後と不規則な位置関係である。ピットの掘りこみも V 字状と U 字との形態に分かれ。平面プランも円形と楕円状から長円形の二系統が見られる。円形のものは径 4.0 cm 前後と一定で、長円形は 3.5 ~ 4.0 cm と不規則。掘り込みは浅い不整形のものとやや深い V 字状に分かれ。前者は 3.0 cm と浅く、後者は 5.0 cm 前後と深い。層序は、何れも白砂を含むものが見られ抜き取り、腐食等の判断は出来なかった。各層とも縮り、粘性は弱い。

遺物は 1 5 1 に小径の 4 本の丸太が底に並列していた。材質はカシ、クス、松、栗等がある。出土状態から根太とも思われる。

3 軒複合しているがピットの切り合い、掘り方、柱間から 2 号掘建遺構が先行すると思われる。何れも居宅の性格が強い。遺構の向きは何れも N-65°-W 前後を示し短時間中での建て替えの可能性を指摘されよう。遺存している木材の状態から 1 号掘建遺構は建て替えの可能性が高い。1, 2 は遺存する木材、土層等から倒壊や柱材の抜き取り等も想定されよう。

4 号掘建遺構 (第5図 図版5)

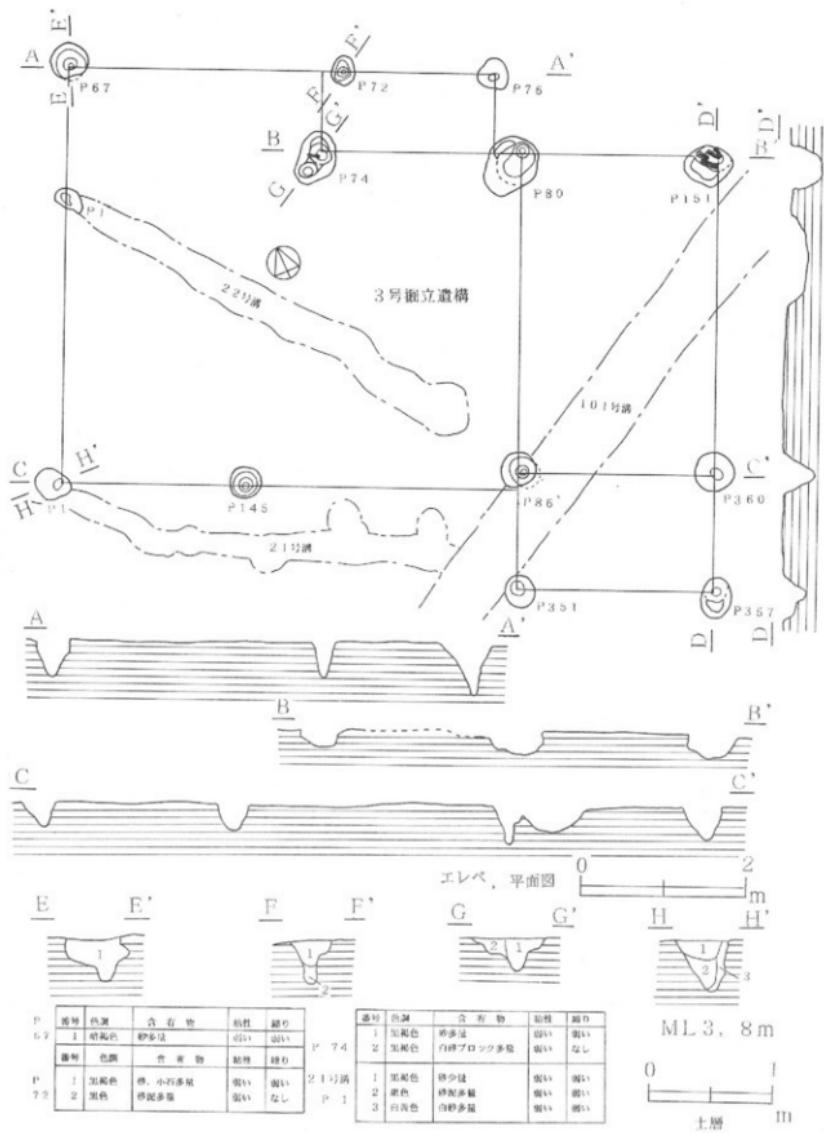
本遺構は、3 号遺構の東側 8 m 程に位置し主軸を N-51°-W に置き東西 4.4 m、南北 3.9 m 程の方形状プランで、尺間計算は 2 間半前後の掘建遺構と推察される。各柱間は南、東側では 1 間幅、北側では 3 尺前後の幅でピットが見られた。ピットは径 3.0 cm 前後が U 字状形態を



第3図 第2号掘建遺構実測図

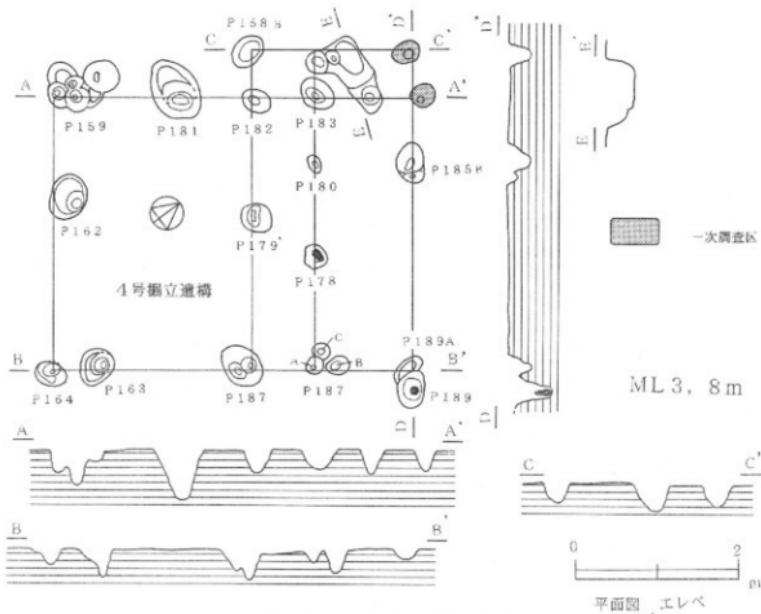
示し、僅かに底部に円筒形の掘り込みを持つものも見られた。

層序は図示しなかったが確認面では黒褐色が大部分で円筒部分は黒色で泥を多量に含む。断面U字状のビット層序は、白砂ブロックを含む。遺物は189に立柱が見られ材質は栗の木であり



第4図 第3号掘建遺構実測図

根元から折れた感じの出土状態であった。178は小片で柱の根太に使用か、



第5図 第4号掘建遺構実測図

5号掘建遺構（第6、10図 図版10）

本遺構は、4号遺構の中に位置し主軸をN-55°-Wに置き東西は6.5m、南北3.9mで4間、2間の建屋が推察され柱間6尺2寸か。柱間は西側では2尺前後と密で北側は6尺前後である。南、東ではかなり飛ばされている。本掘建遺構も居宅の可能性が高い。ピットは平面楕円形径3.0~7.0cmと不規則なものである。掘り込みは3.0~7.0cmと幅がある。断面はU字状が多く。柱の遺存する189は円筒状である。断面形態から抜き取りと放置にピット形態の差異が有るのかもしれない。本例は倒壊したまま根元を放置したと理解したい。

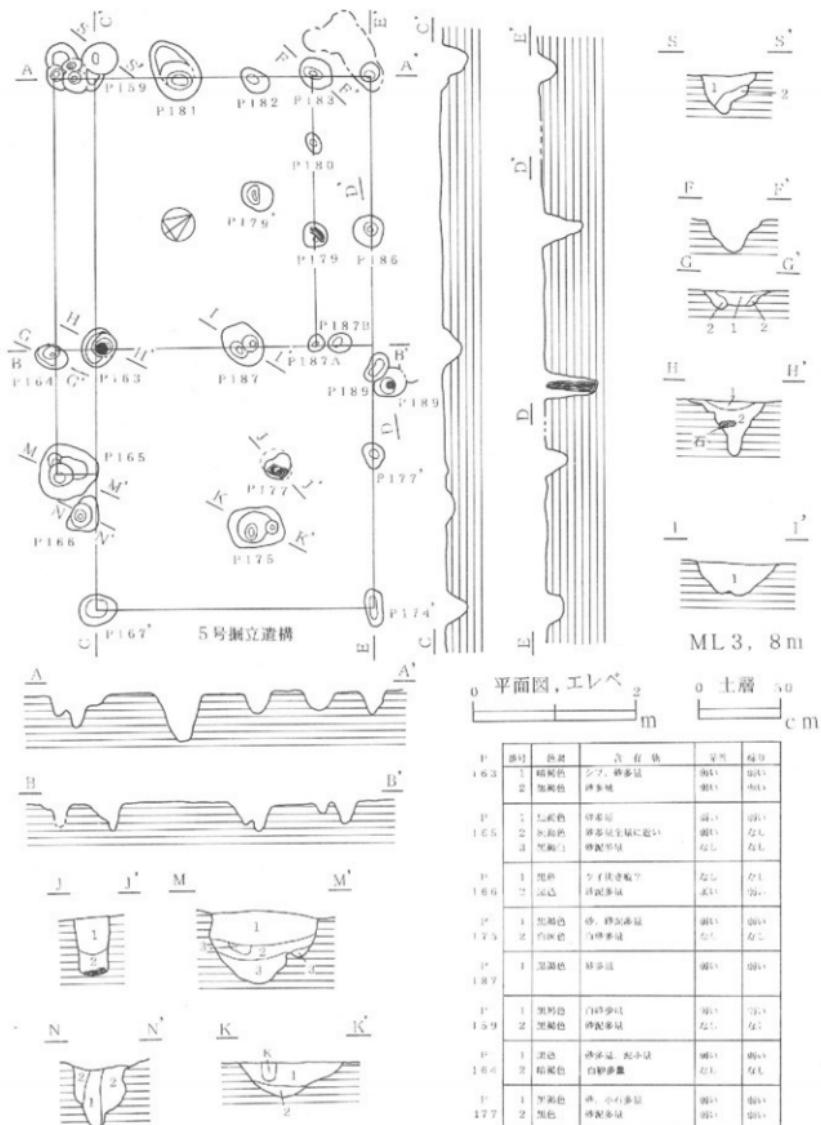
層序は単純なものが多く確認面は黒褐色が多く1.66のように柱の抜き取り痕の黒色のものも見られる。何れも粘性、締まりは弱い。本遺構もシルト層への掘り込みである。

遺物は柱等が2本程出土している。P189は上部が折れた感じで9角前後の柱と思われ、長さ4.5cm、幅1.1cm。その他163には根石が見られる。177は根太か。

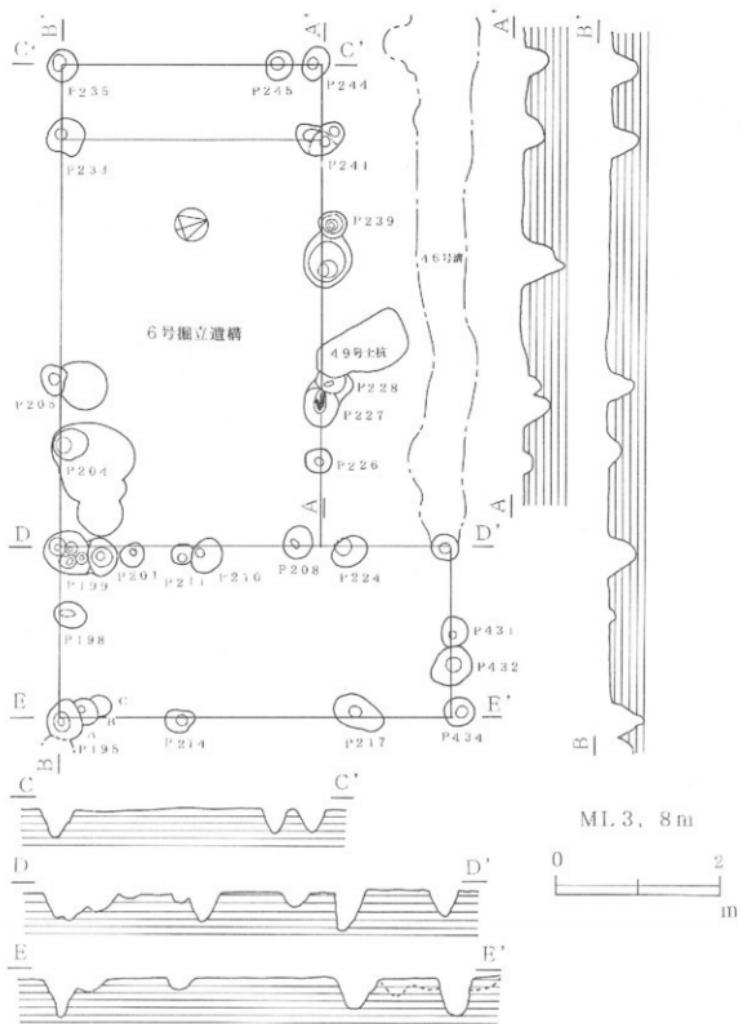
6号掘建遺構（第7図 図版6）

本遺構は、5号掘建遺構の東側D-7に位置し主軸をN-70°-Wに置き東西8m、南北3.2m、4間2尺と10尺5寸前後の長屋状の掘建遺構が推察される。

北側から東側は幅3尺前後でピットが位置している。東側は1間程後に伸びるか。南側は幅1間程にピットが位置している。各ピットは径3.0~6.0cm前後の楕円、長円状で円形のものは



第6図 第5号掘立構造実測図



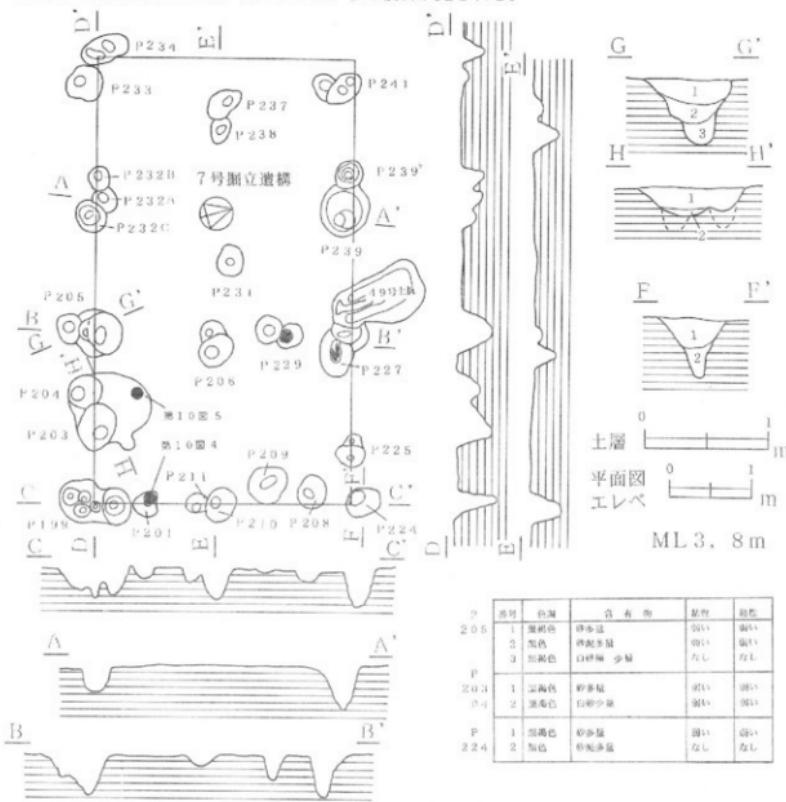
第7図 第6号掘建遺構実測図

少ない。断面はU字状、V字状形態が大部分である。掘り込み深さは50cm前後が多い。P227には小径の丸太2本が底部に見られる。遺物は前述の桜の小木が根太状の底部に見られる掘建遺構の後、北側には屋根の水落部分に46号溝が位置する。

7号掘建遺構 (第8図 図版7)

遺構は、6号遺構より30cm程北にずれて位置し主軸をN—73°—Eに置き、東西5.5m南北3.2mの6尺1寸間、3間×10尺6寸の長屋状掘建遺構が推察される。ピットは西側を除き幅狭く掘り込まれ、中央部にも一例存在している。ピットは径30~40cmが大半を占め、掘り込み深さは40~55cm前後が多い。

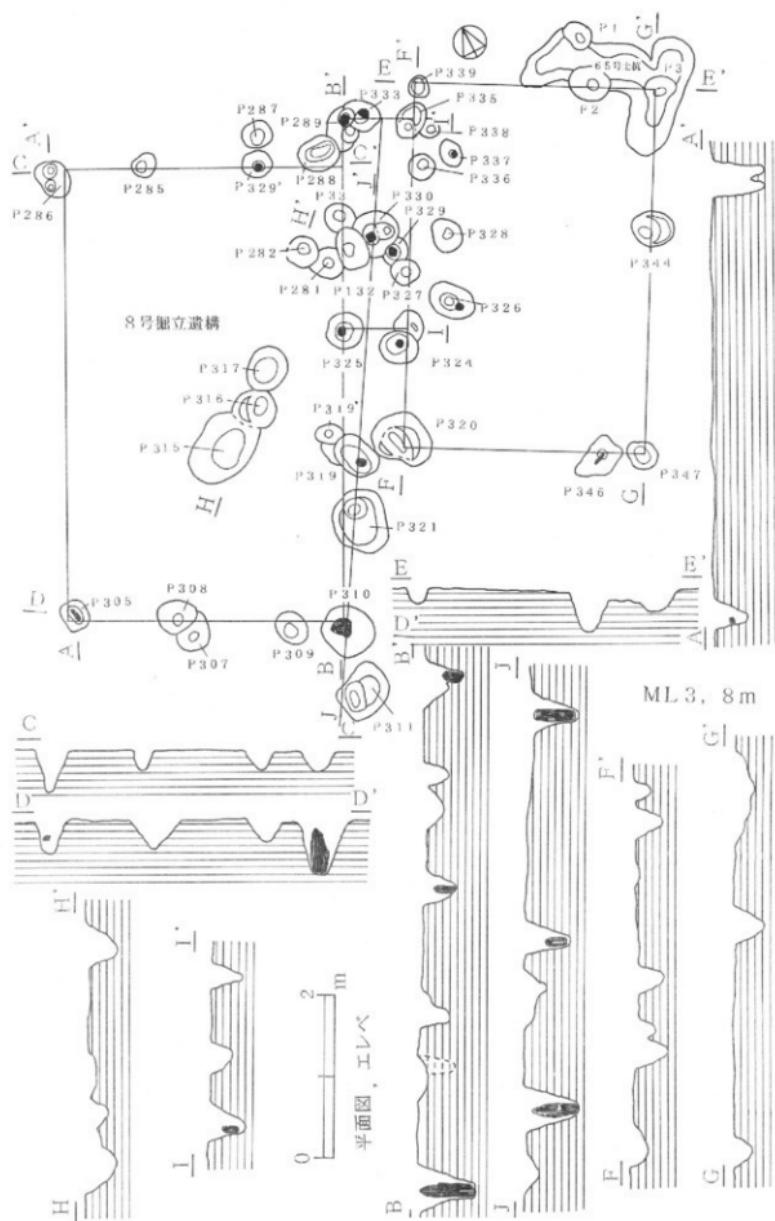
層序は何れも黒褐色から黒色で円筒状形態の下部は黒色の砂泥質の層を持つ。遺物は227に丸太が敷かれた感じに見られ229では松の丸柱が折れた感じで遺存している。203からは土師器壺の体部が出土している。232からは根石が見られる。



第8図 第7号掘建遺構実測図

8号掘建遺構 (第9図 図版11)

本遺構は7号掘建遺構の西側E5, 6, F5, G6に位置し主軸をN—60°—Wに置き東西



第9図 第8号掘建遺構実測図

5.5m南北3.4mで6尺1寸間、3間×2間の倉庫状の建物が推察される。北側にも東西4.5m、南北2.99mで主軸をN—73°—Eに置く同様な掘建遺構が位置している。6尺1寸間で2間半×10尺の掘立遺構が推察される。間が狭い事から同じに存在した可能性もあるがピット群の集中度から並立より時期に差があると理解すべきと思う。また間の一組のものには『柱』4本が存在している事から別の掘建遺構の存在も推察される。(289, 319, 329, 333)これらはすべて建てた状態の検出で上部は折れた感じで検出されている。何れも遺存状態は良い。

ピットの掘り込みはU字状からV字状でこれらは何れも「柱」は遺存しない。柱の遺存するものは底幅のあるV字状であった。これはすべてに共通する掘り方である。深さは30~60cmを測る。遺物は前述のとおり柱が主である。材質は、305は槧の残材、310はクスの木で三角形状、319は38cmの槧の角柱で幅11cm。329はクスの残材、324は松の角材で長さ27cm幅11cm、333, 289は根石を持つ。

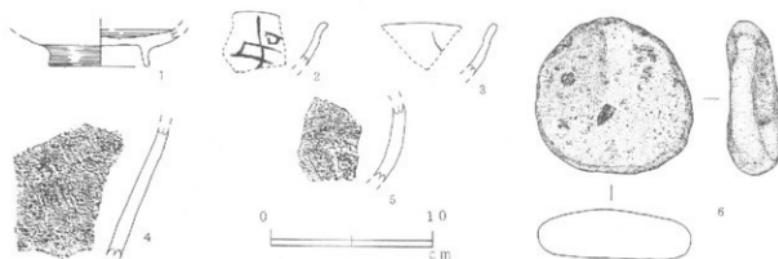
9号掘建遺構 (第10図 図版6)

本遺構は、調査区内の北隅II4, G5に位置し4m程離れた部分から50cm程下がり遺構は確認出来ない。これは水田耕作で煙滅の可能性や鎌田川の変遷にも関係するのかもしれない。本調査からは本掘建遺構が遺跡の限界の可能性が高い。主軸をN—38°—Wに置き西20尺南北7尺の細長い倉庫状の形態で掘り方の遺構は何れも径80~130cmを測る。形状は梢円、方形、円形と変化に富むがこれはシルト層であるための変形と考える。掘り込みの深さは40~50cmで土抗の規模、プラン等から『高床式』の倉庫の可能性が高い。

本遺跡の掘建遺構の中でも、掘り方プラン、並列する土抗、遺跡北端等の位置関係等、一次調査でも検出されなかった掘建遺構である。柱のすべては抜き取られて自然埋積状の堆積状の層序を示す。層序は黄砂、白砂、砂泥をブロック状に含むが主体的には黒褐色層である。粘性、締りは弱い。これからも家屋は解体移築の可能性が高い。木材の遺存は皆無であった。

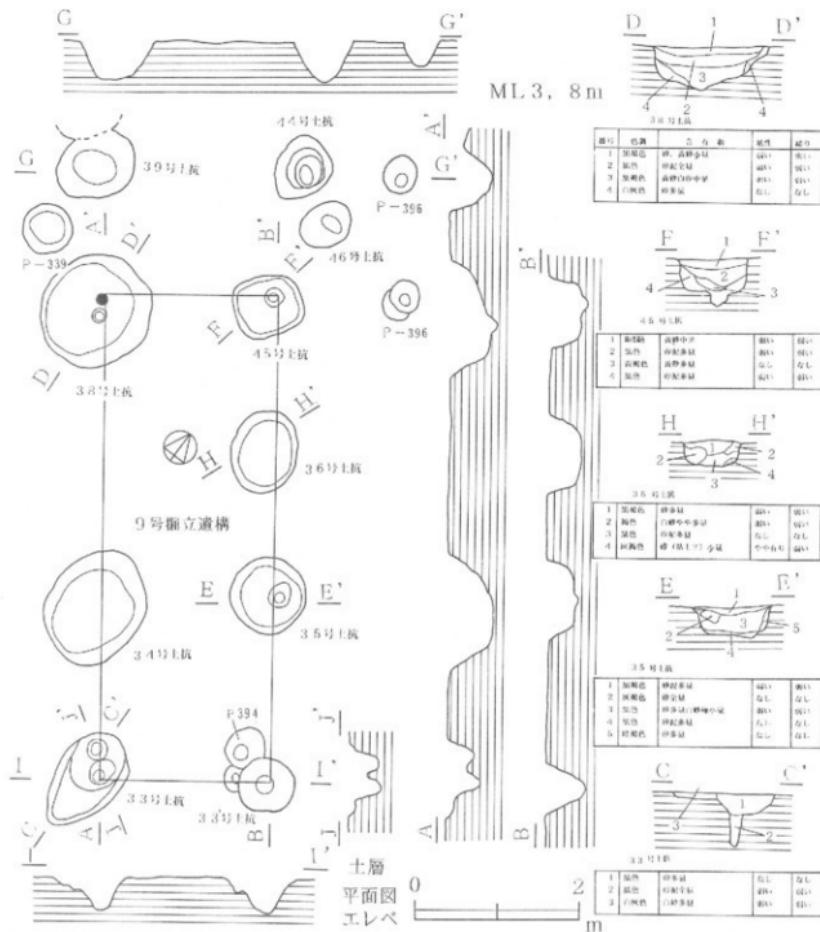
◎私考夢想

本遺跡では平安時代の堂宇根石に無量三部経の一部が墨書きされていた。遺跡の極一部の調査で性格を想定するのは無法に近いが出土遺物から9世紀前後から集落の形成が見られやがて堂宇を



第10図 第5, 7, 9号掘建遺構出土遺物実測図

伴う抛点集落に発展していった。勿論、古墳時代前半から砂州上に集落は点在していたが、三昧塚築造のために10軒前後の家屋は移転に迫られて周辺に家を建て替えて住んだと思われる。今回の発掘調査はそうした人々の子々孫々の人々たちの生活の場であった。



第11図 第9号掘建構実測図

III 溝

溝は、今回の調査で69条検出された。長いものは100mにも及び短いものは2m前後と規模、形態、時期にかなりの差がある。一部には集落の境、川状のものや排水の格子状のもの、掘立遺構の雨落ち的なもの等多様である。以下、各溝の形態、長さ等について述べる。時期は9世紀から12世紀が出土器から推定された。新しいものは近世のものもある。

なお100、101号溝は一次調査で発掘した溝の延長である。番号のまま延長部について述べる。時期的に幅があるが調査番号順に述べる。

1号溝（第12図 図版7）

本溝では、調査区の西隅に位置し一部畠として使用されていた為全掘は断念した。調査した部分では南北方向に13.5mで南、北側はともに農道である。掘り方はU字状で、南側の103、104号溝を掘り切っている。幅は60cm前後、深さは30cm前後とほぼ一定した溝である。中央北よりに柱状の丸太が折れた感じで底部から出土している。（松の丸柱）土器は僅かに見られるが時期を特定できる程のものはない。切り合い関係から12世紀代に入ると思われる。

2号溝（第12図 図版7）

本溝は1号溝の東側に並列状に検出され、半ばで止まる。北側は未掘で不明。調査区域では長さ10.5m幅は40cm前後である。掘り込みは10～30cmと不規則、底部で凹凸が激しい。性格、時期は不明。

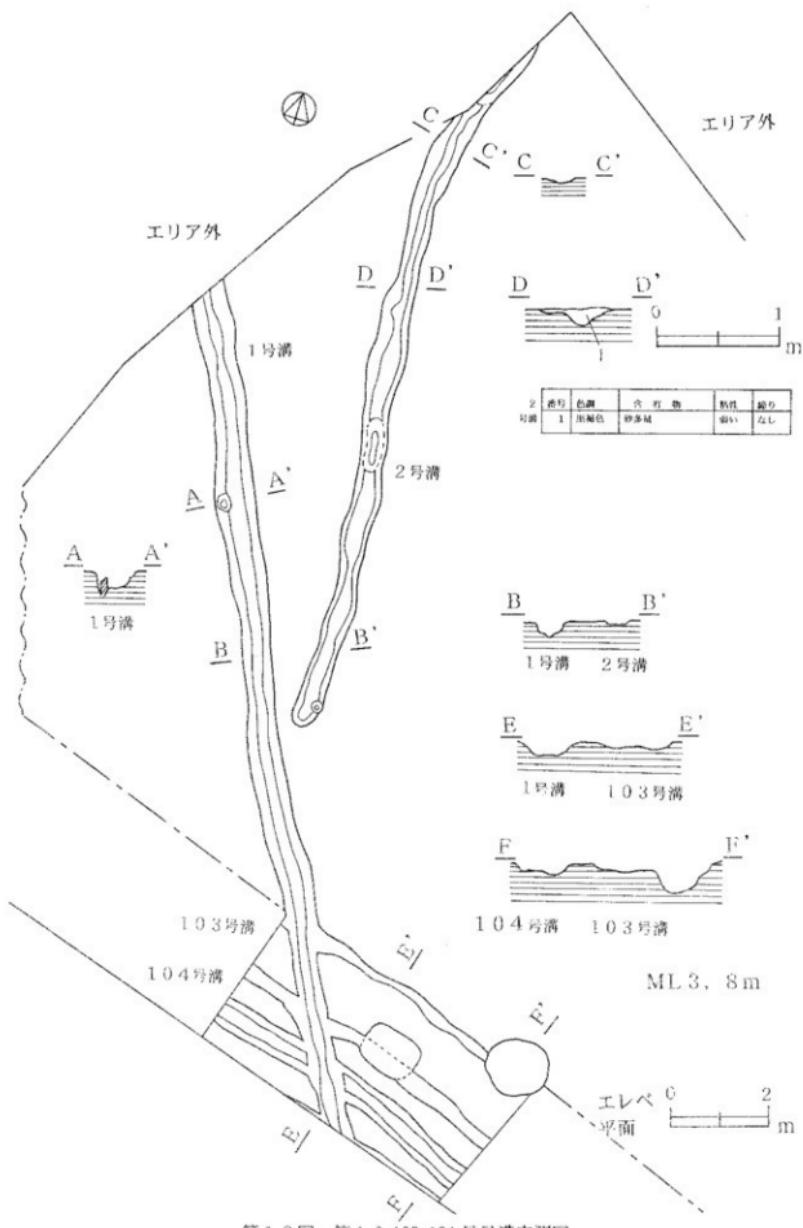
遺物は皆無。時期、性格は不明。

3号溝（第13図）

本溝は、2号溝の東側10m、E-2Gに位置し検出された。北側の未掘区から7m程の長さで南に伸びる。幅は北側で80cm南側で40cmと狭くなる。掘り方は鎖状に深く、浅くを繰り返している。10～20cmの範囲である。土層は投げ込み的で黒褐色、灰褐色等で砂を多量に含む。2、3、4号溝は北側から放射状の感じで直線的。

4号溝（第13図 図版7）

本溝は、3号溝の南東2mに位置し南北方向に7m程の長さでのびる。幅は50cm前後で一定している。掘り込みは3号同様鎖状に浅く、深くの繰り返しである。10～30cm前後で不規則、底部は凹凸が多い。ちょうど人の足で捏ね回した感じである。弱く反る。土層は暗褐色、黒色で砂を含み、粘性、締まりは弱い。



第12図 第1, 2, 103, 104号溝実測図

5号溝（第13図 図版7）

本溝は、4号溝の東側2mに位置し並列、長さは3mと短い。確認面から僅かに掘り込み幅は50cm、底部は凹凸が激しくまさに足でかき回した感じである。

覆土は鈍い暗褐色で砂を含む。これは一次調査の畠の排水溝に相似するが？直線的。遺物は皆無。時期は特定できない。

（6号溝は欠番）

7号溝（第14図）

本溝は、5号溝の南側6mのD-2、D-3に位置し南北に長さ8.4m、幅1.5~2.0m狭く小ピットの連続状部分もある。5号溝に相似する溝で確認できたのは「底」のみと理解する。覆土も同様な状態であった。直線的な溝である。

遺物は皆無。時期は特定できない。

南側で100号溝「12世紀以降」に切られていることからこれらの溝よりは古い。

8号溝（第13図）

本溝は、7号溝の北側40cmに位置し北側は未掘区に入るが遺構確認の為に表土を精査した所30cm程のので消える。長さは南北3.5m、幅は30cm前後で短い。

掘り込みは5~10cmで凹凸が激しい。覆土に白砂を含み、粘性、締まりは弱い。

3、4、5、7、8号迄の溝は何れも覆土に白砂ブロックを含み、不規則な掘り込みで企画性はなく、時期、性格についての特定はできない。

9号溝（第13図）

本溝は、8号溝の東側2m、D-3Gに位置して検出された。東西方向に1.5mと短いもので幅も30cm以下であり、深さは10cm前後である。底部は凹凸があり3基のピットの連続状である。覆土は黒褐色で掘り込み等から7号溝に近い。

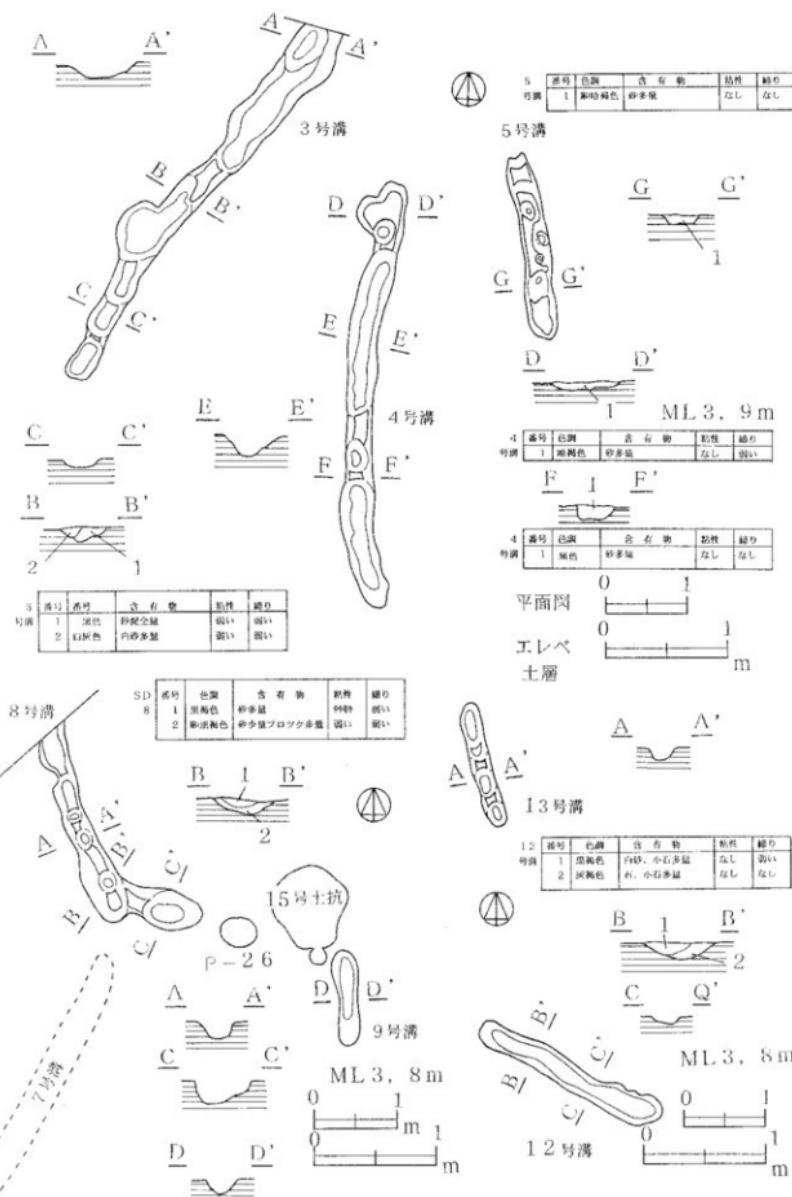
遺物は皆無で時期、性格は推定出来ない。

10号溝（第14、28図 図版8、23）

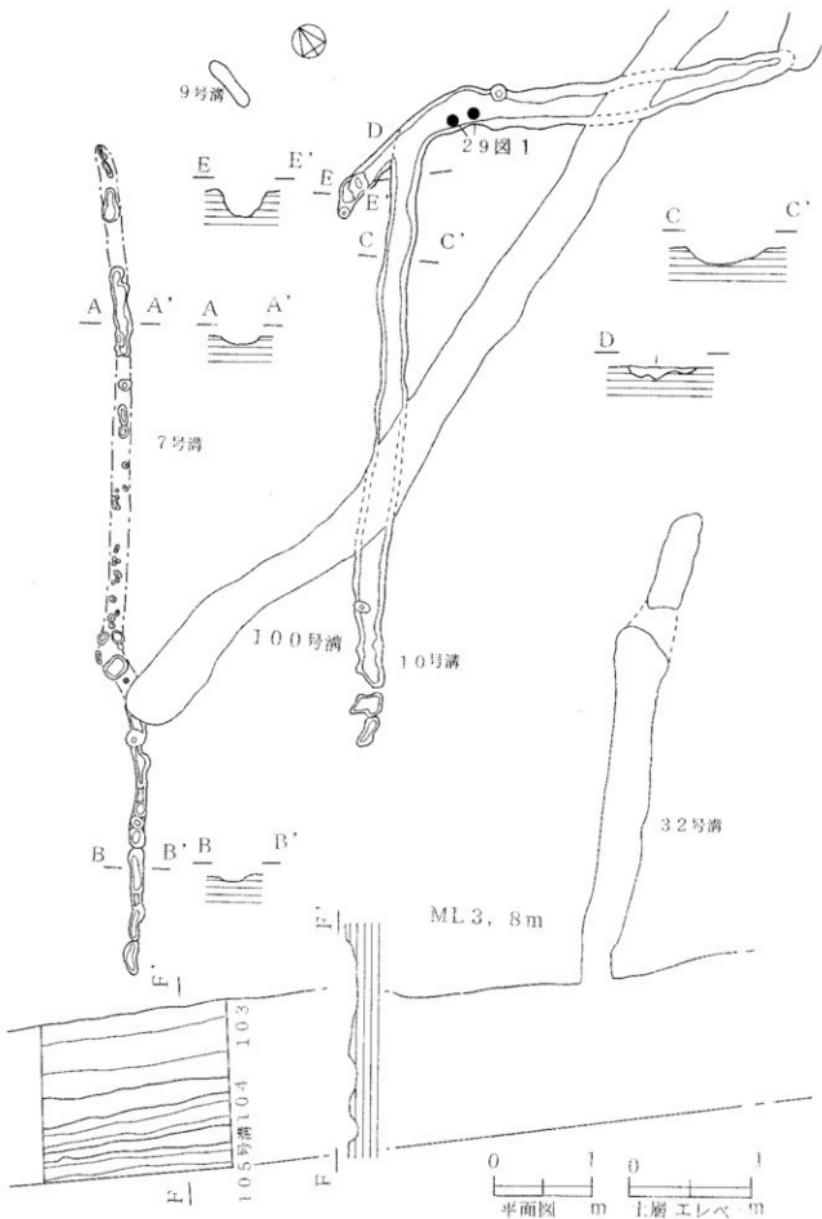
本溝は前述の7号溝の南側2.5mに位置しほぼ並列して検出されたが木跡は6.3m付近から直角に南に折れて3.5m程のびる。幅は30cm前後で一定に近い。途中100号溝に掘り込まれ、鋭角部分では11号溝を掘り込む。掘り込みは5~10cmと浅いが底部は平坦に近い。覆土は、黒褐色層のみで粘性、締まりは弱い。遺物は木片、土師器皿3片は底部糸引き、川原石等が出土している。

11号溝（第14図 図版8）

本溝は、前述の10号溝の鋭角部分に位置し、大部分10号溝に掘り込まれた状況は不明。依存



第13図 第3, 4, 5, 8, 9, 12, 13号溝実測図



第14図 第7, 10, 11, 103, 104, 105号溝実測図

部分は東西に長さ80cm、幅25cm前後である。本溝は掘り込みがU字状のプランでは古い形態。覆土は黒褐色で縦まりはやや有り、粘性は弱い。

遺物は皆無、時期、性格は不明。

12号溝（第13図 図版13）

本溝は10号溝の北側3mに位置し東西に2.5mと短く幅は30cm前後と一定である。掘り込みは10~15cmと浅い。掘り込み形態は10号溝に近い。時期的にも同様か。覆土中には小石2~3mmを含む。

13号溝（第13図 図版8）

本溝は12号溝の北側2.3mに位置し南北に1.6m程の短いものである。幅は20cm程で一定している。本溝も小ビットの連結状で7号溝に相似する。覆土、形態等から同時期が推察される。

遺物は、石が1個出土している。

14号溝（第15図）

本溝は、13号溝の東側に位置し南北に1.6m、幅50cm程の短いもの、かつ直線的で他の溝との合流、接続はない。掘り込みは10cm程で浅く、ビットのみが15cm程で底部は平坦、5cm程深い。覆土も確認面は黒褐色層であった。遺物は皆無。

15号溝（第15図）

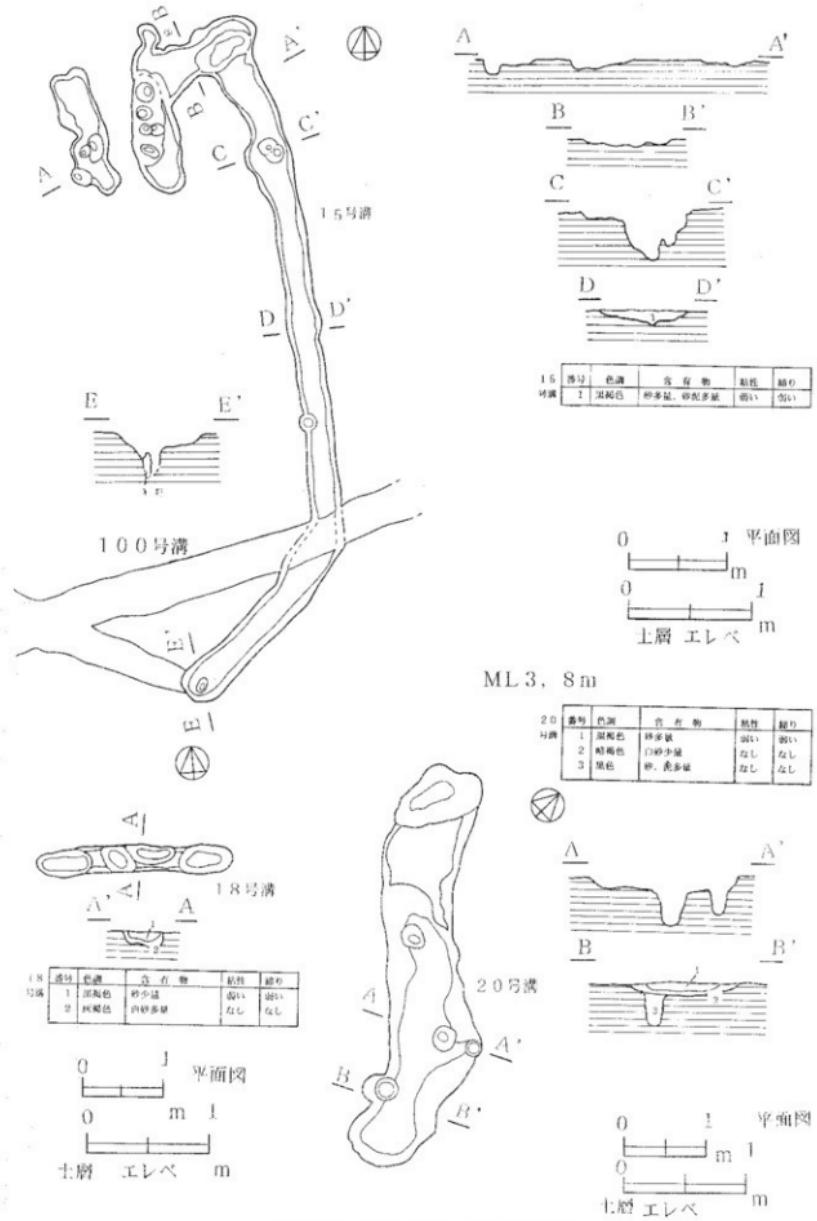
本溝は、14号溝の東側に位置し斧状形態で斧部分は2m、柄の部分は8mで〔へ〕の字状に曲がる。幅は40~50cmとほぼ一定の幅で移行している。掘り込みは5~10cmと浅く南端にビットが掘込まれ小木が立っていた。松の丸太である。南側で100号溝に切られている。底部は小さな凹凸が多数見られた。確認面は黒褐色である。やや古い時期の造構か。

18号溝（第15図）

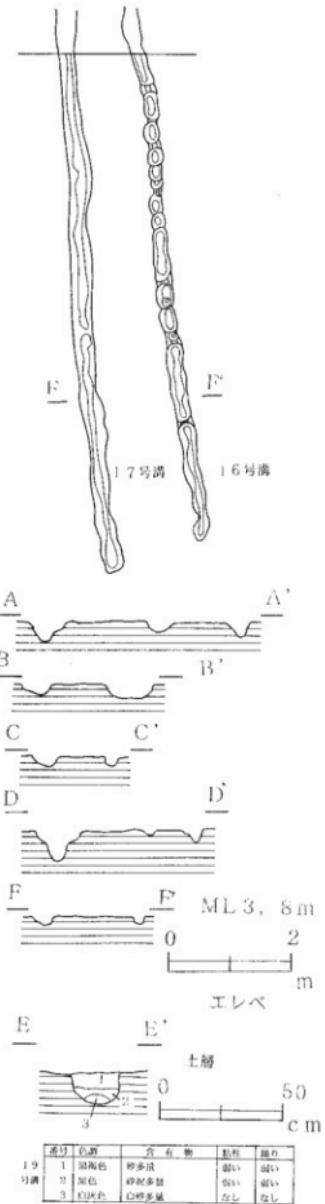
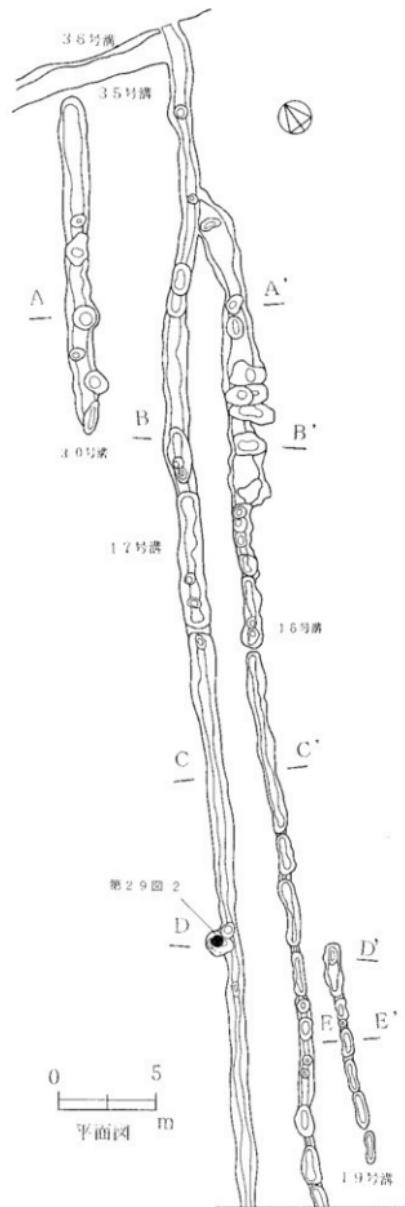
本溝は、15号溝の南側に位置し東西2.5m、幅30cmの狭いもので4ヶ所の掘り込みがあり15cm程を測る。溝の一部の可能性が強い。確認面では黒褐色で2層には白砂を含みレンズ状の埋積。遺物は皆無。溝プランから古手か。

20号溝（第15図）

本溝は、18号溝の東側に位置し東西に5m、幅90cmと広い。掘り込みは20cmとやや深い。底部はほぼ平坦でシルト層剥だし、縦まりは無い。3ヶ所の小ビットの覆土3層は砂泥層である。遺物は皆無で時期を特定すべきものはない。



第15図 第14, 15, 18, 20号溝実測図



第16図 第16, 17, 19, 30号溝実測図

16号溝（第16図 図版9）

本溝は、調査区の北西側に細長く南北に31m、幅は20～30cmで短い溝の連続状で長い。ピット状、溝状の連続が溝を形成している。掘り込みは15～25cmで北側の下流部にむかって深く、広くなる。遺物は土師器、坏等が出土している。出土遺物からは9世紀前後が推察出来る。北側で17号に接続合流する。

17号溝（第16図 図版9、23）

本溝は、16号溝の西側に位置しほば並列している。南北に34.5mで北側の35号溝に流れれるがあくまでも溝水に成っての事で16号同様【排水】の為の溝と推察する。本溝の使命は、周辺の冠水と水腐れを除くものと理解すべきと思われる。

遺物は国分期の、甕、坏、高台坏、やや新しい皿等が出土している。器形から時期が推察される。掘り込みは20～40cmで凹凸が激しい。

19号溝（第16図 図版9）

本溝は、16号溝の中程の東側60cm前後に並列し長さ4.5mで遺存状態は16号同様、細長い溝の連続で溝を構成している。幅は10～20cm。掘り込みは10～25cmを測る。16、17、19号とも2層は黒色で砂泥層を持つ。遺物は土師器底部が出土している。時期は土層、プラン、遺物から17号と同時期に使用されたと推察する。

21号溝（第17図）

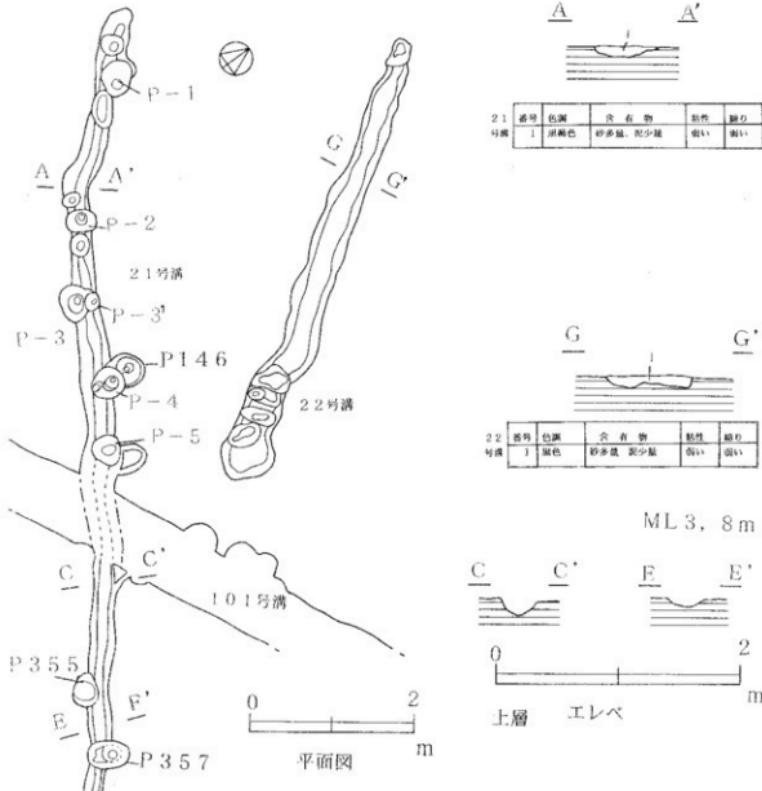
本溝は、調査区の中央部西側1号掘立造構の南側に位置し南北9.8m、幅は30cm前後と一定で掘り込みは5～15cmと浅く、底部は小さな凹凸が足跡状に見られた。中央部で101号溝に切られる。溝には多数のピットが見られるが何れも掘立造構の柱穴で大半のものはU字状で底部に砂泥層を持つ。遺物は、土師器皿片が根石状に出土して一部は溝以前のものと、溝の後に分かれる。本溝も前述の17号溝と同時期が推察される。

性格も同様と推察、私考する。

22号溝（第17図）

本溝は、21号溝の北側2m程に並列し長さ3.8m、幅30～40cmで類似する。掘り方も4～15cmで有る。両端と共に他に合流、接続は無い。本来の溝としての性格は異なると思われる。底部の凹凸は少なく砂質性で締まりは無い。

覆土も黒色で砂泥を含む。



第17図 第21,22号溝実測図

23号溝（第18図）

本溝は、22号溝の北東側に位置し10号溝の先端部とも取れる部分で東西に4m程の直線的溝で幅は50cm前後で一定、掘り込みも5cm前後で浅い。底部は凹凸が足跡状に見られる。締まりは弱い。覆土は黒色で砂泥を含む。中央部で23号溝を掘切る。

遺物は、土師器碗、甕、木片等が出土している。覆土、掘り方等前者の時期と差はあまり無いと私考する。東側には25号溝が40cmの間をおいて連続する。

24号溝（第18図）

本溝は、23号溝に十字状に掘切られる溝で長さ7.3m。幅は30~50cmで掘り込みは5cm前後で浅く、底部の凹凸は激しく足で捏ね回したようで、上部が削平された感じである。両端とも接続、合流は無い。覆土は黒褐色で砂泥を含む。

遺物は皆無である。溝では23号よりやや新しい時期か。

25号溝 (第18図)

本溝は、24号溝の東側に40cmの間を於いて連続的な感じで伸びる。長さ11mで直線的、幅は50~70cmでやや広い。掘り込みは5~10cmと浅く皿状である。東側端部で101号溝に掘切られている。覆土は黒褐色層で砂泥を含む。遺物は円筒埴輪のタガの部分、小石が出土している。埴輪は三昧塚古墳の物と思われる。

位置、プラン等から24号溝と一連の構成を成すと思われる。

26号溝 (第18図)

本溝は、24号溝の北側に接続する感じで1.5m程掘り込みカギ状に南に直線的に折れる。直線部は8.5mで、前述の25号溝に掘切られて消失する。幅は20~40cm、掘り込みは皿状に5cm前後と浅い。覆土は、黒褐色で砂泥を含む。底部の凹凸は比較的少なく平坦、締まりは無い。遺物は皆無。

27号溝 (第18図)

本溝は、26号の中程から枝分かれした感じの溝で2.5mほど西に伸びる。幅は40cm前後で一定、掘り込みは5cm程と浅い。掘り方から見れば26号と同一の遺構を見るべきと思われる。覆土は黒褐色で砂泥を含む。底部の締まりは弱い。遺物は皆無。

28号溝 (第19図 図版9)

本溝は、調査区中央部E-5Gに位置し南北方向に4.6mの長さを持つ。幅は30~40cm前後、掘り込みは10cm程で浅く平坦、締まりは無い。接続、合流は無い。覆土は、黒褐色で砂泥を含む。遺物は皆無。プランからはやや古い遺構か。

29号溝 (第19図)

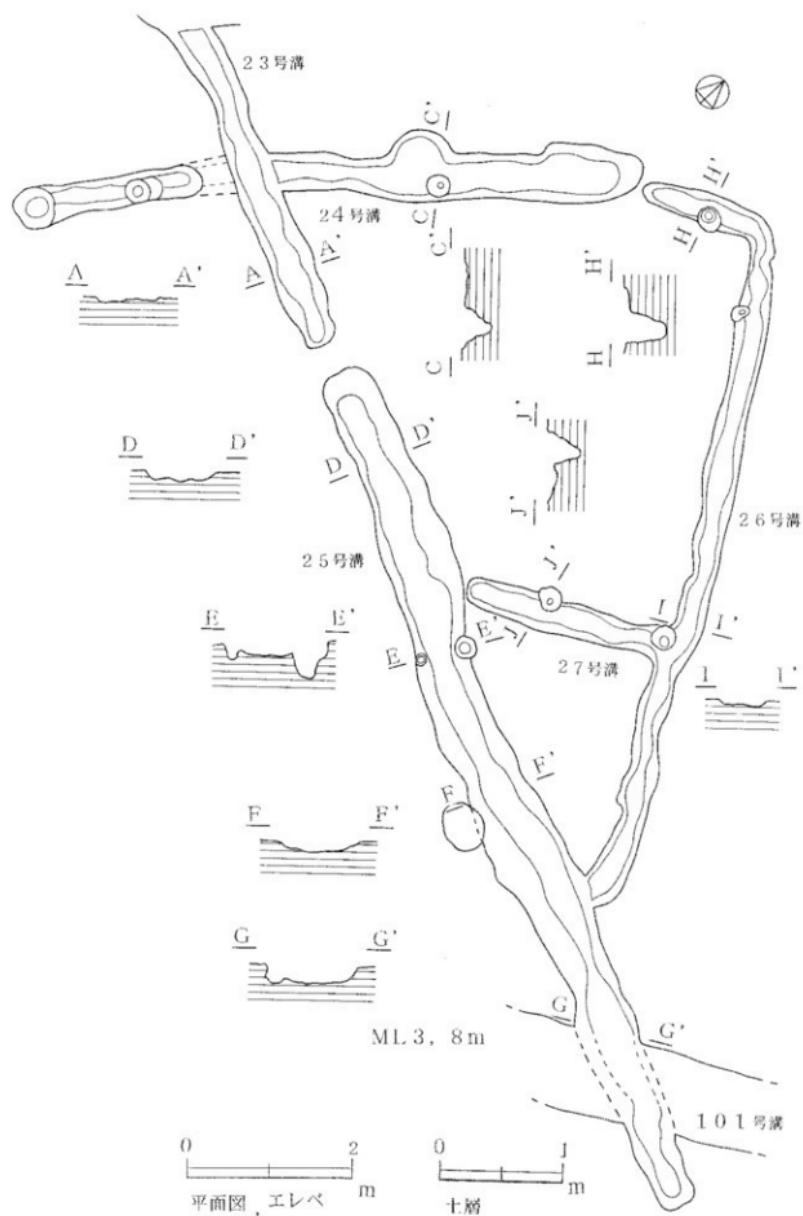
本溝は、28号溝の東側に位置し南北に長さ4.2m、幅は40~60cmとやや広い。底部はシルト層剥出して締まりは無い。内部には多数のピットが掘込まれ蜂の巣状である。大半は溝以前の物で底部に砂泥層を持つ。覆土は黒褐色で砂泥、白砂等を含む。遺物は皆無。時期はやや新しい時期の所産か。

32号溝 (第19図 図版8)

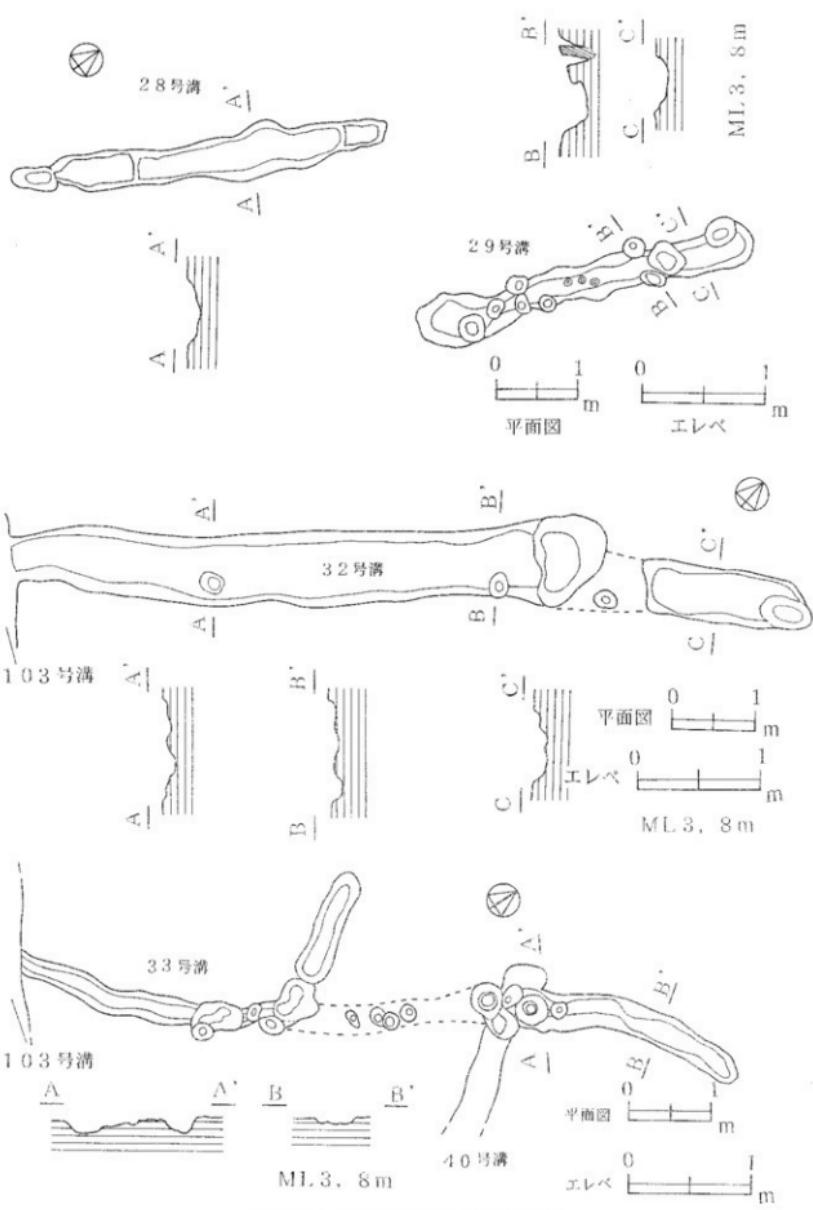
本溝は、調査区西側の農道側に位置し東西に9.6m、幅は60~80cmとやや広い。掘り込みは10cm前後と浅く底部の凹凸は激しい。足で捏ね回した感じである。底部は砂質等で締まりは弱い。西側の103号溝に流れこむ感じで西側で接続している。感じからはあくまでも流路ではない感じである。覆土は黒褐色で砂泥を含む。遺物は皆無。

33号溝 (第33図)

本溝は、32号溝の東側に位置し、長さは東西に9cm、幅20~40cmと狭い。堀り込みは5cmと浅い。途中西北側に1.5m程短く伸びる。覆土は黒褐色で砂泥を含む。



第18図 第23, 24, 25, 26, 27号溝実測図



第19図 第28, 29, 32, 33号溝実測図

3 1 号溝 (第 20 図)

本溝は、調査区北隅の 16 号溝の東側に位置し不明確なもので東西に 5 m 程で 36 号溝に接続、切られている。幅は 50 cm 前後で掘り込みは 30 cm 程でやや深い。覆土は暗褐色層で下部では白砂を含む。遺物は皆無で本溝の時期、性格は不明。

3 5 号溝 (第 20 図 図版)

本溝は、調査区の北隅に位置し内湾気味で北西側は畠地、農道の為確認出来ないが西側の水田には伸びは無い。鋭角に曲がる可能性が強い。東西に 23 m 北側で曲がる。幅は 50 cm 前後で一定に近く、掘り込みは台形状で本遺跡では類例は隣接する 36 号のみである。深さは 20 ~ 30 cm で上部の削平等により若干の差が見られる。覆土は黒褐色、暗褐色等で底部は白砂を含む。平坦で凹凸は無く、締りは悪い。遺物は土師器碗、皿、須恵器瓶等が出土している。隣接して 9 号高床式掘立造構が存在する。一種の環濠か。途中で東側は欠失する。

3 6 号溝 (第 20, 23, 29 図)

本溝は、前述の 35 号溝の北側に位置しほぼ同様な形態、プランを有し調査部分で長さ 40 m と長く [環濠] の可能性が高い。東側では段差の為欠失するか、10 m 先では検出出来なかつたが一次調査の [堂宇下] の埋め戻しの溝に連続すると推察する。(第 1 図) 西側では農道と畠地の為調査は断念した。鋭角に曲がり伸びる可能性がある。

覆土は確認面では暗褐色、黒褐色等でやや明るい。白砂、黄砂等を含む。遺物は須恵器、土師器、坏等破片が 30 片程 2 層、底部から出土している。

出土遺物から 35 号同様な時期が推察され一段階古い 7 世紀前後の可能性を指摘しておきたい。

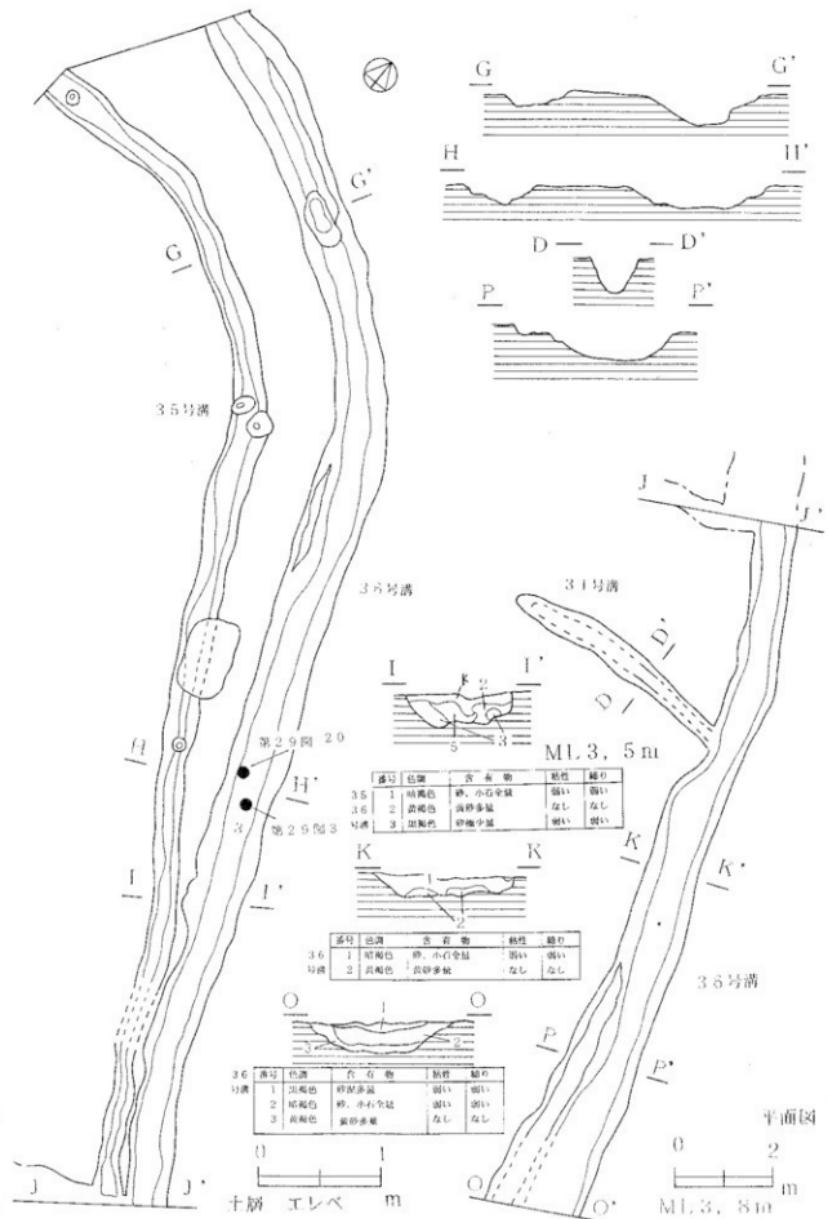
3 4 号溝 (第 21 図)

本溝は、調査区中央部 C-5 G, 25 号溝の西側端に近接し、長さは南北 4.8 m、幅 30 cm 程で内部に長円形状、円形の掘り込みが連続し溝を構成している感じである。北側の一部のみが平坦な底部で 5 cm と浅い。シルト層剥出しで締まりはない。覆土は黒褐色で砂泥を含む。遺物は皆無。掘り方プラン等からやや古手の溝と推察される。

本溝は一連の後述する一群の『溝』と同一と思われる。また前述した 21, 26, 33 もプラン等から一群のものである。

3 7 号溝 (第 21 図)

本溝は、調査区北東側の F-6 G に位置する。南北に 3.3 m、幅は 1 m 前後と広い。底部には 8 基程のピットが掘込まれている。溝自体は 10 cm 前後と浅くシルト層が剥出しの感じであり、締まりは無い。ピットは U 字状で 30 cm 程の掘り込みを持つ。何れも崩壊気味である。東西南北ともに接続、合流は無い。覆土は暗褐色で白砂が混入する。遺物は土師器甕、石が出土している。



第20図 第31, 35, 36号溝実測図

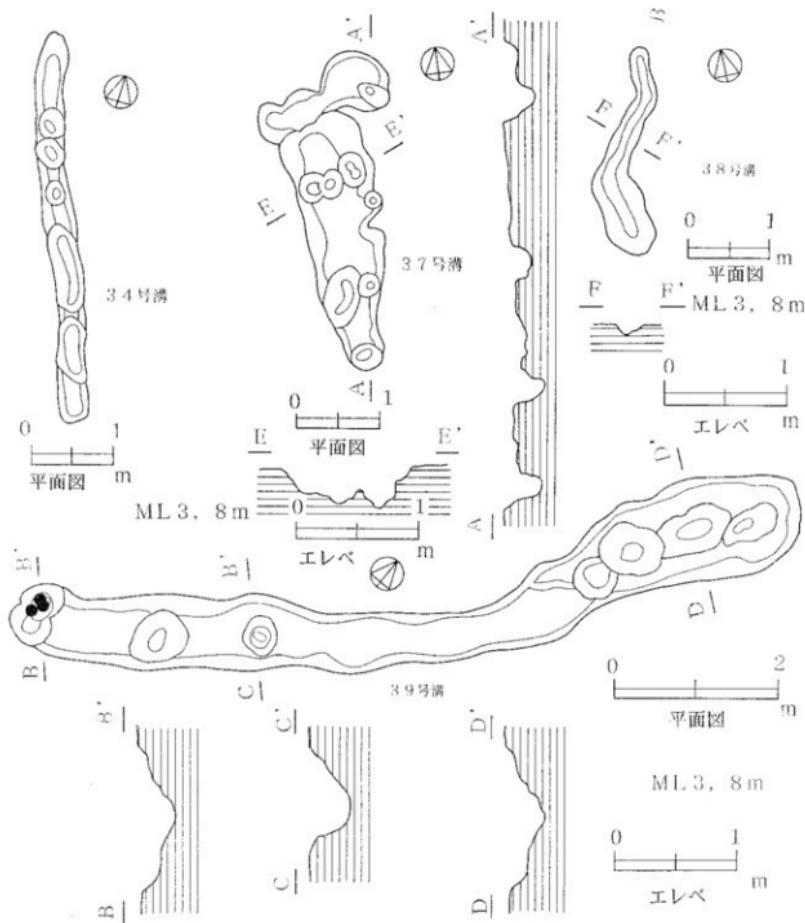
38号溝 (第21図)

本溝は、37号溝の北側G-5Gに位置し『へ』の字状の変則的なプランを持つ『溝』で南北に2.5mの長さを持つ。掘り込みは10cmと浅く皿状を呈する。覆土は暗褐色で底部はシルト層剥出し、縮まりは無い。遺物は土師器碗が出土している。

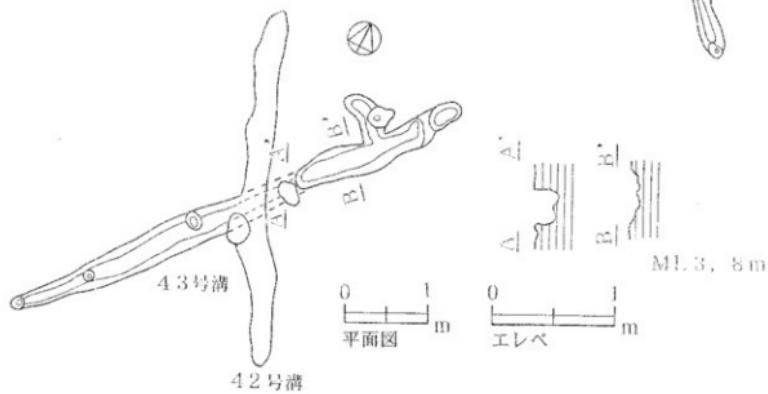
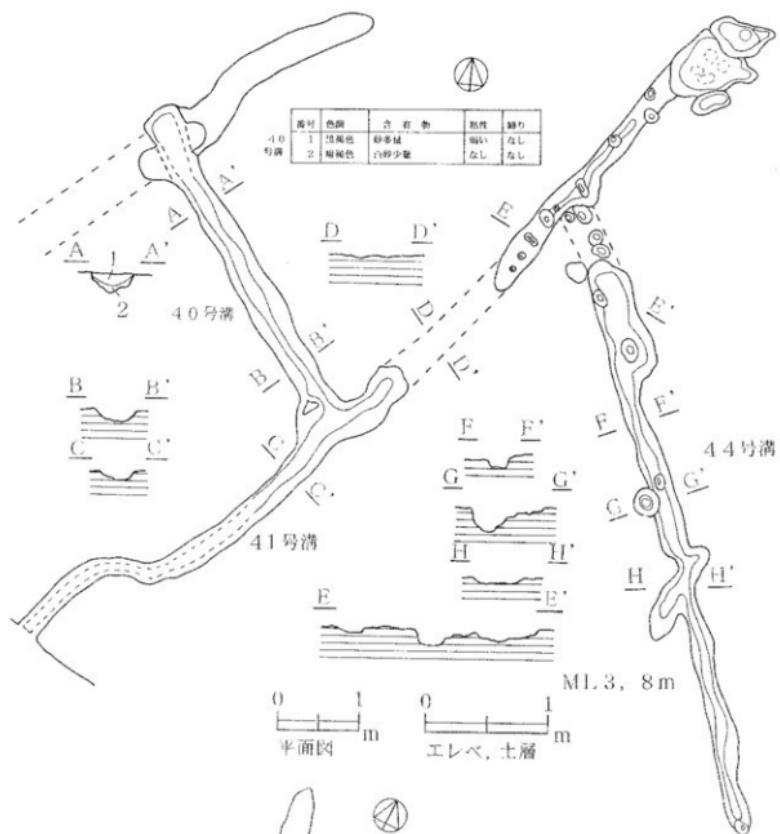
本グリット周辺の遺構は一時期に集中するのか。

39号溝 (第21図 図版23)

本溝は、16号溝の東側のG-5Gに位置し南北に9.8m、幅は0.5~1.2mと中央がやや



第21図 第34, 37, 38, 39号溝実測図

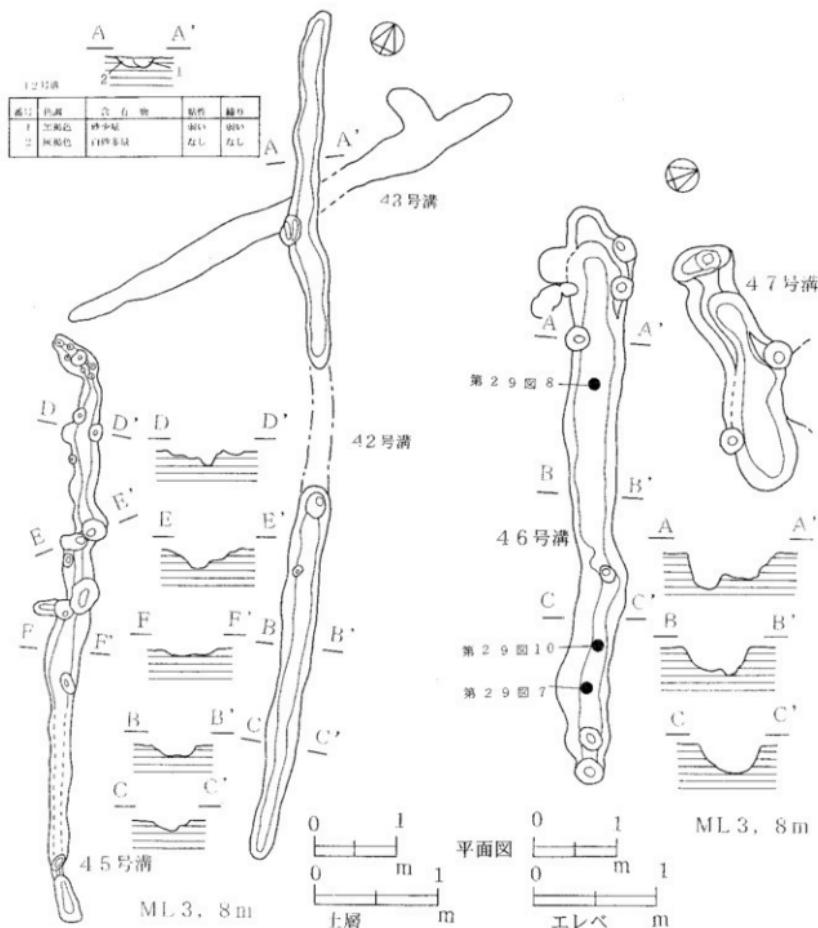


第22図 第40, 41, 43, 44号溝実測図

括れ気味である。掘り込みは15cm前後で平坦、縦まりは無い。底部には7ヶ所のピットが散在している。掘り込みは開き崩壊気味で本来の姿では無い、と思われる。覆土は黒褐色で一部砂泥を含む。遺物は土師器壺、甕、須恵器がピットから出土している。溝からは糸きりの皿、内黒の壺、甕等が出土している。

40~45, 48~54, 57, 58号溝 (第22, 23, 24, 25, 26図)

本溝群は一連のものとして理解したい。全測図を見るかぎり何れも幅、掘り方等プランは酷似

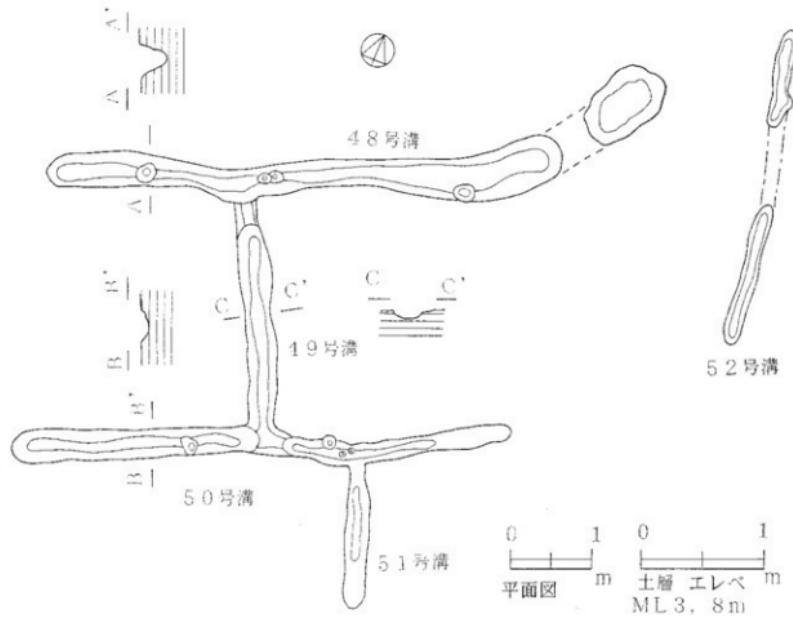


第23図 第42, 45, 46, 47号溝実測図

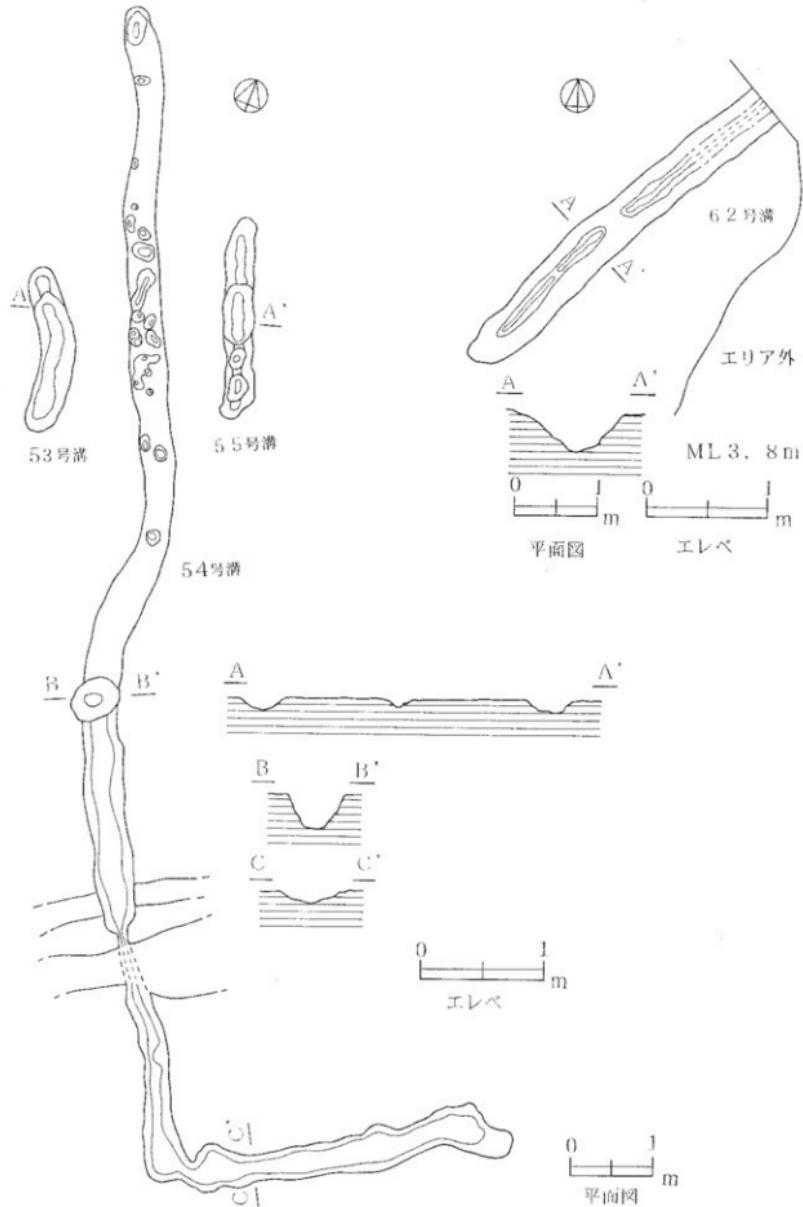
し一次調査の1区の畑の水捌け溝と酷似している。これらの『溝』を復元すれば方形状、長方形状のプランを持つ区画が成立する。そしてこれらの溝は一次調査の溝と接続、合流する事からも時期は同一であることが判明した。

遺物は40号から土師器壺7片、43号溝からは石、陶質の甕、46号溝から高台付壺、内黒の碗、甕、埴輪が出土している。砥石、石、糸きりの皿等が見られる。これらの遺物から一次調査の遺物、時期は合致する。これらは10～11世紀の間の造構と思われる。時間は、遺物から四半世紀前後か。【溝】から出土した高台壺の時期、この上の盛土した畑から出土した常滑焼『骨並』三筋壺の【12世紀前半】と言う年代から推察してこれら以前に存在した畑が有り、その水捌け溝と判断した。

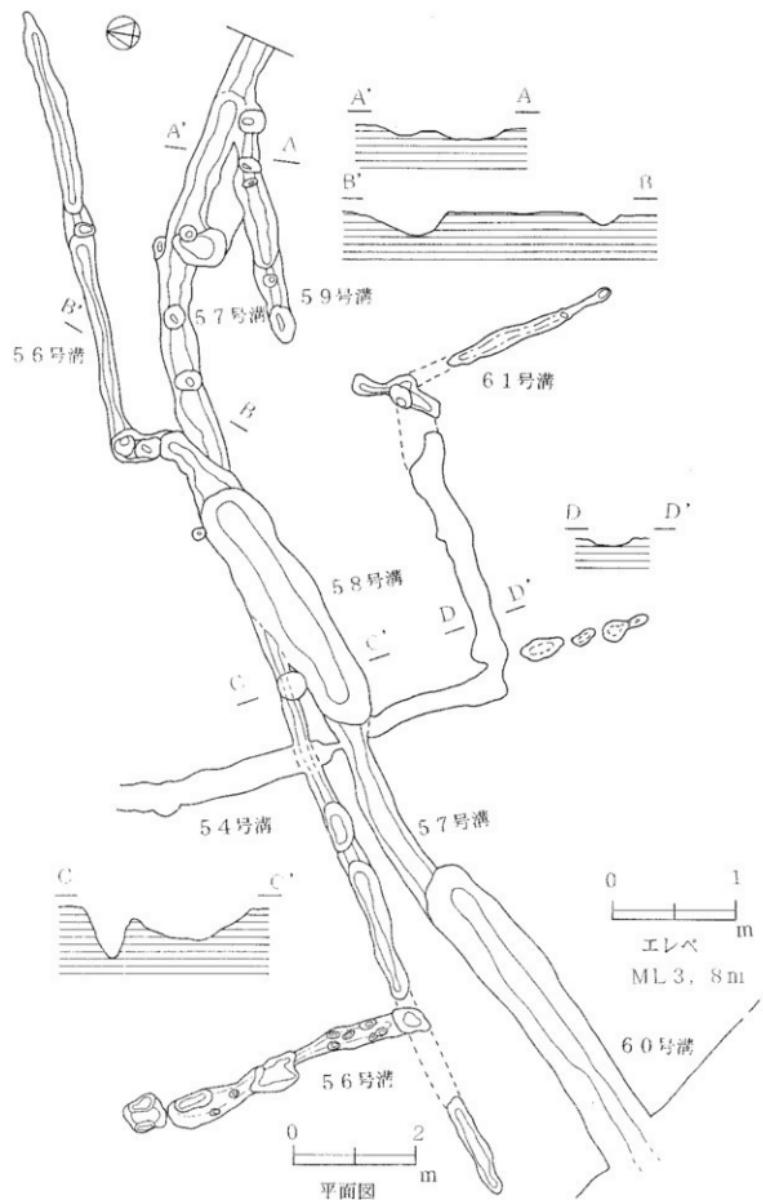
一群のものはB-5, 6, 8, C-5, 6, A-7G調査区の東南部分に『畑』の存在が推察される。【一次調査の花粉分析結果から推察して】64号溝としたものが一連のものと繋がる。上部が水田耕作で欠失しているだけである。



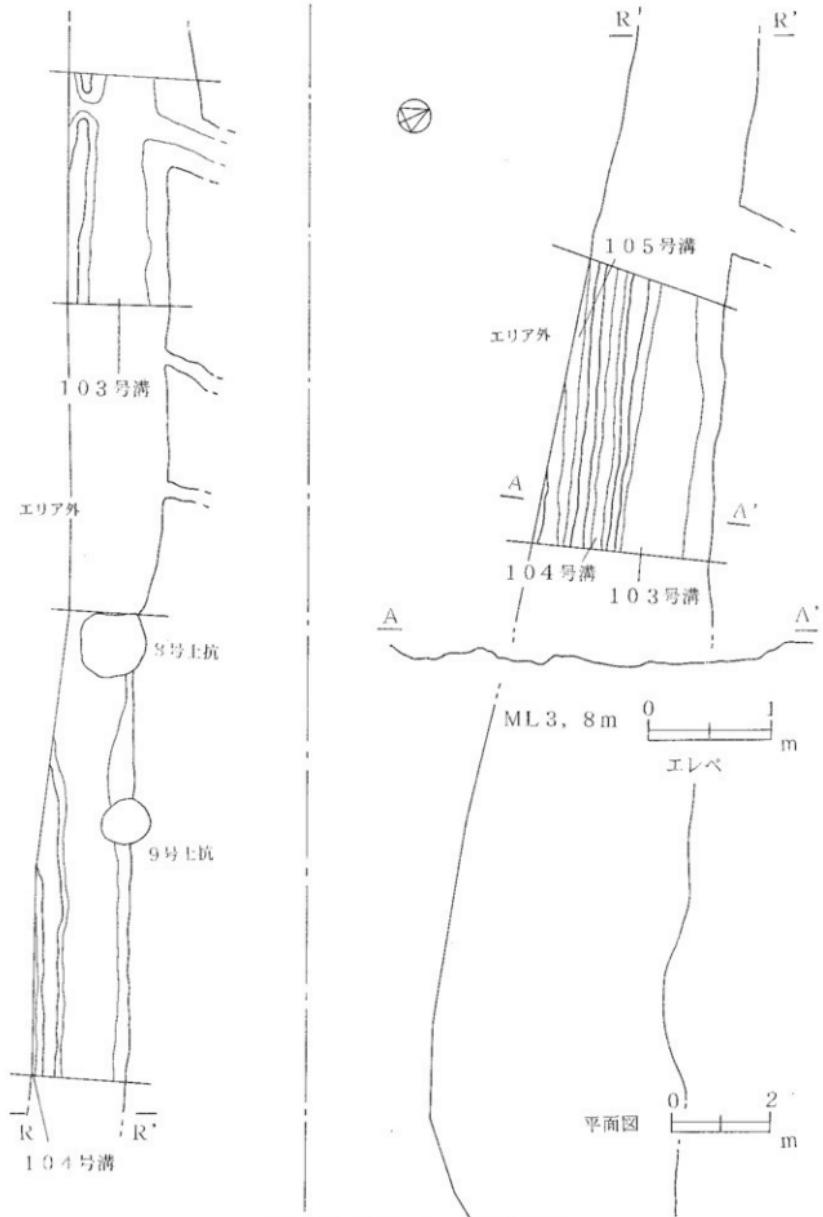
第24図 第48, 49, 50, 51, 52号溝実測図



第25図 第53, 54, 55, 62号溝実測図



第26図 第56, 56', 57, 58, 59, 60, 61号溝実測図



第27図 第103,104,105号溝実測図

46, 47, 53, 55, 62, 58, 60, 62号溝 (第23, 25, 26図 図版23)

本溝は何れも前述の溝とやや性格、時期を事にすると思われるもので46号溝は、掘建遺構の雨落ちの感じに掘られた溝で長さは東西に7m、幅50~60cmで掘り込みは鍋底状で深さは30cm程度で、ほぼ平坦、シルト層剥出し、縮まりは無い。覆土は黒褐色等で砂泥を含み自然埋積。遺物は土師器碗、甕、高坏、円筒埴輪、糸切り皿等が出土している。溝両端等接続、合流は無い。時期は10~11世紀。

47号溝も東側に隣接し並列、長さ3.1m、幅70cm前後で鍋底状、20cmと浅い。接続、合流はない。遺物は皆無。

53号溝は、南北に2mと短く、幅は40cm前後と狭い。遺物は皆無。形態、プランから前述に近いが54号に隣接しているため判断しがたい。55号も東に70cmと西と東の差だけ相似する。長さは2.5mと短く、ともに接続、合流は無い。

62号溝は、一次調査で10号溝としたもので長さ5m、幅50cmと一定規模で続くが途中で段があり西、東に分かれる。掘り込みは40cmで台形状。崩壊が進まない事から畠の時期11世紀後か。58, 60号溝も一連の流れの一部と思われ掘り方、プラン等類似点が多い。本溝は断片的に続くものか。前述の畠の溝を掘り切り、60号溝は西側の103号溝に合流している。時期的には時間差はあるが接続している。

本群に分けたものは二つの時期に分かれるか。

103, 104, 105号溝 (第27図 図版23)

本溝は調査区の西側から南、東側に直線的に伸びるもので西側では1号溝に掘切られている。この部分では103, 104号のみ確認出来た。幅は1.6mと60cmで深さは20cm前後と浅いが、立ち上がりと底部は縮まりを持ち長い期間使用された感じをもつ。中央部では、103号溝とわずかに104号溝が覗く。幅は1.5m、深さは15cmと浅くなる。東側では103と104の間の立ち上がりは低く締じて浅い。105のみやや立ち上がり、深さが明確的。幅70cm、深さ15cm。東端では農道下に入り不明、確認面では103のみで1mから50cm以下がる。

遺物は円筒埴輪、土師器甕、坏、皿、碗、須恵器、須恵質甕、石等が合計36片出土している。104では石が4点、土師器甕が出土している。

これらの遺物から本溝の時期は1~2世紀にわたる水路としての機能を有していたと推定される。

63, 65, 66号溝 (第28図)

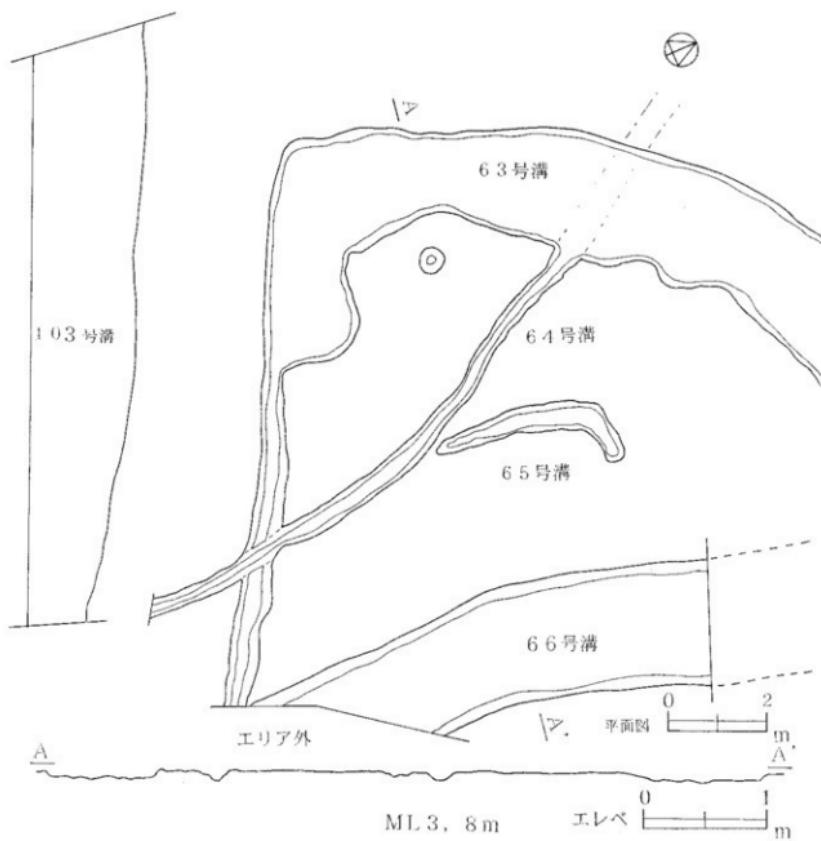
本溝群は調査区東端に位置し63号溝は幅変則的な『へ』の字状を呈し東北側の66号溝に合流している。掘り込みは10cm前後と浅く平坦。底部はシルト層剥出し、縮まりは無い。隅部は遺構の掘り方等に差異をもつ。この部分からは時期が変わるのが。畠の溝とした64号溝を切り、掘り込まれていることから『畠』以後の時代の遺構か。

遺物は皆無に近く、判断は出来なかった。

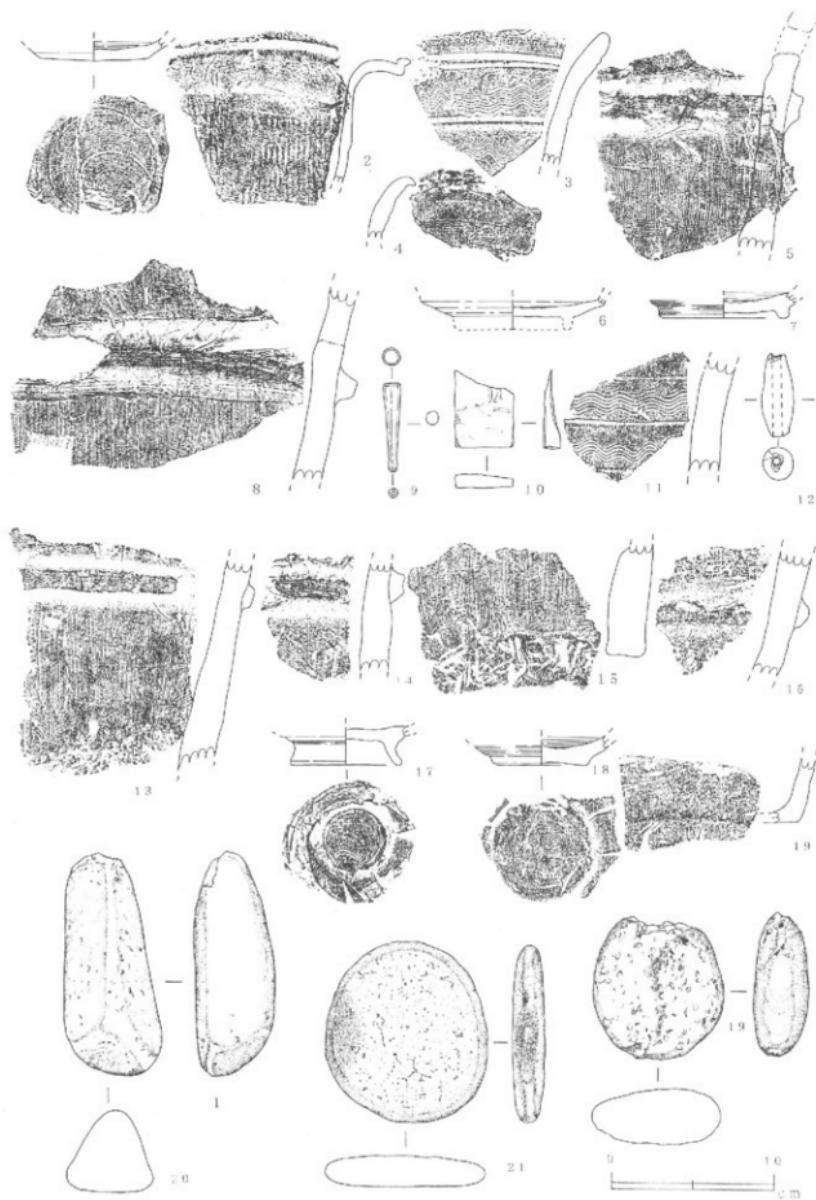
100号溝, 101号溝 (第27図 図版4, 5, 23)

本溝は調査区中央部に南北に貫通する溝で弱く反りが見られる。両溝の幅は13~18mで、規則性はないと思われる。幅1m、掘り方は台形状ではほぼ共通している。何れの遺構もすべて100, 101号溝に掘込まれている事からも新しい時期の所産と推察される。遺物は円筒埴輪、常滑の破片、砥石、管状土錐等が見られる。

101では弥生式壺10片、土師器甕、石器等が出土している。やや遺物に差異があるが掘り方プランから時期的には差異は無いと推察する。



第28図 第63, 64, 65, 66, 103号溝実測図



第29図 溝出土遺物実測、拓影図

IV 土坑

本遺跡では67基の土坑が検出された。ここでは溝に近いもの、ピット状のもの、更に掘建遺構のもの等種々あるが、ここでは掘建遺構は柱穴として扱い土坑の記述から除外した。その他はすべて土坑として述べる。したがって欠番が生じる。

1号土坑（第30図 図版17）

本遺構は、103号溝の中に位置して検出された。径1.1mの円形プランで、掘り込みは鍋底状を呈し50cmの深さをもつ。底部は小石を含む砂質のシルト層剥出しであった。覆土は黒褐色、暗褐色等3層がレンズ状の自然埋積。1層には砂泥が含まれていた。遺物は皆無で、時期・性格は特定出来ない。

2号土坑（第30図）

本遺構は、1号土坑の東側3mD-3Gに位置している。長さは南北2.3m、幅は50cmで深さは20cm前後で底部は平坦、縫まりは無い。覆土は2層で黒褐色、暗褐色で白砂が混入している。遺物は皆無。

3号土坑（第30図）

本遺構は、2号土坑の北側60cmD-3Gに位置し検出された。長さは東西2.4m、幅1.2m程の長円形状を呈している。掘り込みは20cm前後と浅い。底部は平坦で縫まりは無い。シルト層剥出し。遺物は皆無。

4号土坑（第30図）

本遺構は、2号土坑の東側6.5m、C-2Gに位置し検出された。径1.6mで円形掘り込みは55cm、底部は鍋底状を呈し、シルト層剥出しで縫まりは無い。覆土は投げ込み的で白砂、黄砂等がブロック状に埋積していた。シルト層の採掘？

遺物は皆無で、時期・性格を特定すべきものは無い。

5号土坑（第30図）

本遺構は、4号土坑の東側6mC-3Gに位置し、長辺70cm程、短辺50cmと長円形を呈する。掘り込みは浅く10cm前後、底部は凹凸が多くシルト層が剥出状。小型で浅く遺物は皆無。溝の一部？

6号土坑（第30図）

本遺構は、5号土坑の北側60cmに位置南北1.6m、幅70cmと溝状プランで掘り込みは10cmと浅い。底部は平坦で縫まりは無い。覆土は2層で底部は黄褐色砂が多量に含まれる。遺物は皆無。5号土坑同様、溝の一部か？

7号土坑（第30図）

本遺構は、103号溝の中に位置して検出された長方形の土坑で東西1.2m、南北90cm掘り込みは30cm。底部の砂泥の中には径10cm程の丸太が並列していた。やや崩壊気味の壁面は弱く立ち上がる。土師器甕底部が出土している。

覆土は3層で黒褐色、暗褐色、褐色等で1層には砂泥、3層褐色には白砂、砂泥が含まれる。103号を掘り込みこれよりは新しくなる。木片は杉の小木、丸太である。

8号土坑（第30図 図版13）

本遺構は、103号溝を掘り込みに位置していた。一辺1.3m程の方形を呈し、掘り込みは70cmと深い。底部はやや長方形状で1m×60cm、平坦でシルト層はやや縮まる。覆土は4層で確認面では黒褐色、砂泥を小量含む。黒色では砂泥が多量。底部近くは暗褐色で小径の角材、丸太が『井桁』状に見られた。崩壊防止の施設又は井戸か。

その他円筒埴輪の下部が出土している。本遺構も103号より新しくなる。

9号土坑（第30図）

本遺構は、8号土坑の東側2.8mに位置し径1mの円形状で掘り込みは鍋底状で50cmと深い。シルト層を掘り込む。覆土は自然埋積で3層が認められ、底部近くは黄砂を含む。遺物は皆無。時期は103号を掘り込む為、これよりは新しくなる。

10号土坑（第30図）

本遺構は、調査区の西側E-2Gに位置し南北1.3m、東西60cmの溝状プランで、掘り込みは10cm、底部は平坦で白砂剥出し、縮まりは無い。覆土は黒褐色で小量の砂泥を含む。遺物は皆無。時期、性格は不明。

11号土坑（第30図）

本遺構は、一部を調査エリア外に置き全容は把握出来ない。調査範囲では径2.2mでピットの連結状。掘り込みは25cmで中央がやや深い。立ち上がりは緩やか。

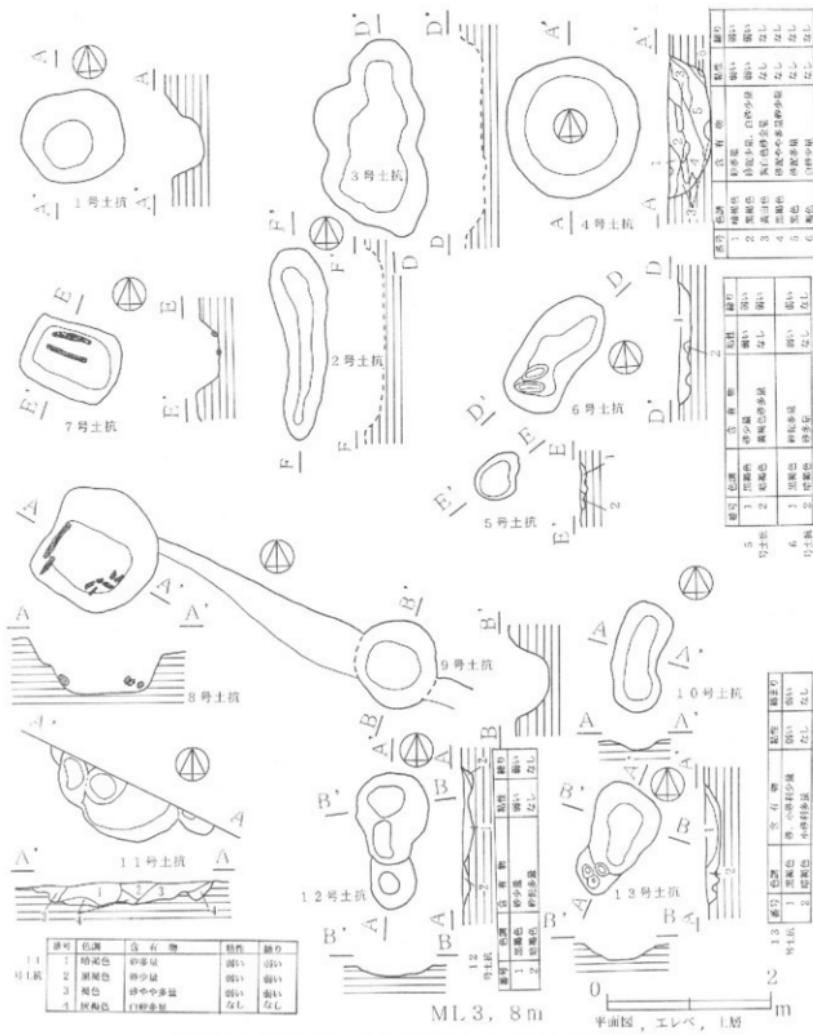
覆土は4層で投げ込み的、何れも白砂を含む。遺物は皆無で時期、性格は不明。

12号土坑（第30図 図版12）

本遺構は、2号土坑の東側に位置し、円形ピットの連結状で長円形で1.6m、短径は90cm。掘り込みは浅く10cm前後。底部は凹凸が見られ縮まりは無い。遺物は皆無で時期、性格は不明。

13号土坑（第30図 図版12）

本遺構は、12号土坑の東側に位置し長辺1.4mの長円形。掘り込みは18cm前後で皿状形態。覆土は2層で黒褐色、暗褐色でレンズ状の自然埋積。遺物は皆無。



第30図 第1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13号土坑実測図

14号土坑（第31図）

本遺構は、11号土坑の東側1.6mE-2Gに位置し東西に1.1m、幅30cm程で、底部にピット状の掘り込みが見られ、溝状で5cm前後、シルト層の締まりは無い。ピット状部分は崩壊気味。覆土は暗褐色、褐色で白砂を含む。遺物は皆無。

15号土坑（第31図）

本遺構は、E-3Gに位置し径1mの円形状を呈する。掘り込みは鍋底状で深さ30cm、1層は自然埋積でレンズ状、他の2、3、4層は投げ込み的でブロック状に認める。覆土から見れば2、3、4層は人工的に埋められ、1、2層は自然埋積。これは埋められた時期が2期に分かれるからである。遺物は皆無で時期は不明。

16号土坑（第31図 図版12）

本遺構は、15号土坑の東側2m、E-4Gに位置、長辺1.6m、短辺1.3mの楕円形状を呈する。掘り込みは60cmと深く、半円状で4層のみ一旦埋積し、その後1層黒褐色、2層の黒色で砂泥層、3層黒褐色と自然埋積が見られる。これは2層の段階で冠水し埋積している。遺物は皆無で時期は確定出来ないが、2回の埋積過程が推察出来る。

17号土坑（第31図）

本遺構は、16号の西側1.5m、D-3Gに位置、長さ1.5mの溝状で幅50cm、掘り込みは5~10cmで浅い。底部は凹凸が見られ、シルト層が剥出し。縦まりは無く遺物は皆無。時期、性格は不明。

18号土坑（第31図）

本遺構は、17号土坑の東側1.8mに位置、径50cmの円形で掘り込みは27cmとピット状で鍋底。覆土は自然埋積で2層が見られ、1層には砂泥が認められる。

遺物は皆無で時期、性格は不明。

19号土坑（図版13）

本遺構は、16号土坑の北側6m、E-4Gに位置1.5m程の楕円形状で、掘り込みは55cmと深く鍋底状プラン。覆土はレンズ状の自然埋積で3層に黒褐色の砂泥層が見られ、冠水が想定される。2層には白砂が混入している。2期にわたる埋積が推察できる。

遺物は皆無で時期、性格は不明。やや崩壊気味？

20号土坑（第31図）

本遺構は、19号土坑に隣接し径1.5mの円形で、底部は60cmの平面が認められ、台形状を呈する。掘り込みは60cmと深く縦まりは弱い。覆土は、19号に類似し2回にわたる埋積が見られた。遺物は皆無で時期、性格は不明。

規模、プラン、覆土と同様の19号と隣接しており類似する性格、使用形態が推察される。

21号土坑（第31図）

本遺構は、18号土坑の南側5.4m、D-4Gに位置し径1m程の楕円形状のプランを持つ土坑で、掘り込みは15cmと浅く皿状、底部はシルト層剥出し。覆土は2層で1層には砂泥を含む。遺物は皆無。

2号土坑 (第31図 図版12)

本遺構は、21号土坑の東側1m、D-4Gに位置し、径1m程の円形のプランをもつ。掘り込みは開いたU字状で45cmの深さを持つ。覆土は1層、黒褐色は自然埋積、2、3層は黒色、暗褐色で砂泥、砂泥層を含む、これは冠水に因るも埋積である。4層は暗褐色で白砂を含む。遺物は皆無で時期は特定出来ないが冠水以前の遺構である。

23号土坑 (第31図)

本遺構は、22号土坑の南側9.6m、C-5Gに位置し南北1.8m、幅1m程の長円状で掘り込みは15cmと浅い。底部はシルト層剥だしで締まりは無い。覆土は3層で1層には砂泥を含む。総じて自然埋積と推察される。

遺物は、土師器皿が1片出土している。底部から10世紀前後が推察される。

24号土坑 (第31図)

本遺構は、23号土坑の南側2.4m、2.4mC-5Gに位置し東西80cm、幅60cmの長円形状を呈する。底部は崩壊気味の鍋底状で、深さ32cmでやや凹凸がある。覆土は2層で自然埋積か。2層は黒色で、砂泥層全量である。本遺跡では珍しい埋積状態である。遺物は皆無で時期は不明である。

25号土坑 (第31図 図版23)

本遺構は調査区の中央部E-5Gに位置、径2.5mの正円形を呈する。掘り込みは半円形状で60cmの深さを測る。底部、側面はシルト層剥だしで締まりは弱い。覆土は6層で2、3層は砂泥を含み、4、5層は砂泥層で大規模な冠水が想定される。

遺物は、桐製の下駄の一部が出土している。『歯』は削り出しで着け歯では無い。表面はかなりの使用痕が見られ凹凸がある。何れも断片からの推察である為見解の相違が見られる可能性があるかも知れない。その他杉の小枝も5層から出土している。

砥石、須恵器の台付壺底部、管状土錘、高台壺内墨等が5、6層から出土している。これらから9世紀頃が推察出来る。

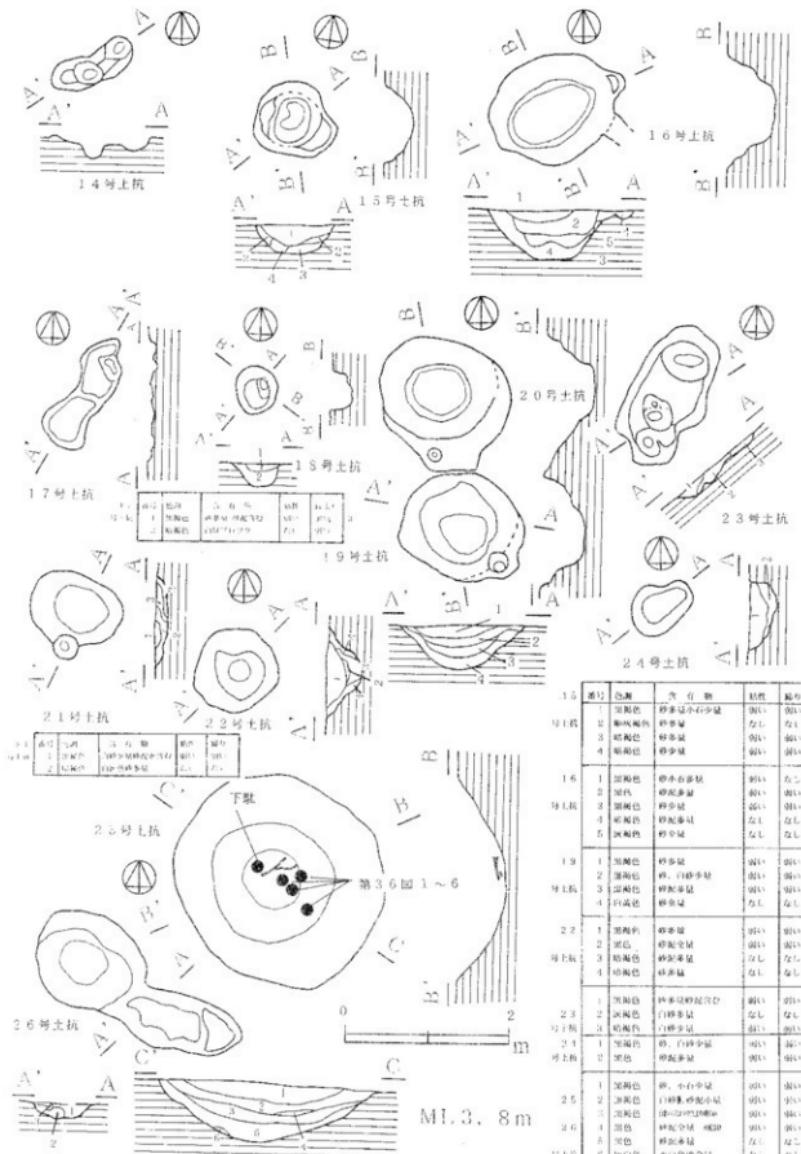
26号土坑 (第31図)

本遺構は、25号土坑の南側20cmに位置し長さ2.8mで、中央部分は括れ気味で二つの土坑が複合の感じにもたれる。西側では1.2m程の楕円形状と幅70cm程の長円形で、掘り込みは20cmと浅く皿状プラン。西側の円形部分は30cmと深い。覆土は2層で黒褐色、小石(1~3mm)を含む。底部はシルト層剥出しで締まりは無い。

遺物は、土師器壺、壺4片(体部と底部)が出土している。これらから8~9世紀の遺構の可能性が推察される。

27号土坑 (第32図 図版13)

本遺構は、25号土坑の東側4mに位置し径90cmの楕円形、東側に30cm程の掘り込みを持つ。覆土は3層で底部の3層は黒色で砂泥多量。ピット状プランである。底部は砂質のシルト層で締まりは無い。遺物は皆無。時期は不明。



第31図 第14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 22, 23, 24, 25, 26号土坑実測図

28号土坑 (第32図 図版13)

本遺構は、25号土坑の北側5mに位置し長さ3m、幅1mで溝状プランである。掘り込みは土層断面図が示す様に北側でオーバーハング状、砂層の遺構では理解しにくい掘り方である。深さは30~40cmとやや深く、底部はシルト層剥だしで締まりは無い。

覆土は6層で1層はレンズ状の自然埋積、2層は黒色で砂泥層冠水が想定される。3、4層は白砂、6層は砂質粘土を含む。5層は砂泥を含む。投げ込みと冠水が混在している。遺物は皆無。

29号土坑 (第32図 図版13)

本遺構は、28号土坑北側に沿うように検出され、長さ3.7m、幅1m前後の溝状プランである。掘り込みは40cmと深い。底部は緩やかな凹凸を持ちシルト層剥出しで締まりは無い。覆土の1層はレンズ状の自然埋積、2層は黒色で砂泥層、冠水に因る埋積。3層は黄褐色で砂多量。本層はイキ? 遺物は皆無。28号と対のようだが、覆土は1、2層のみ同様で他は異なる。

30号土坑 (第32図 図版13)

本遺構は、29号土坑の北側60cmに位置し、検出された径1.1m程の楕円形状プラン。掘り込みは半円状で30cmの深さを持つ。3層はレンズ状の自然埋積、4層は灰褐色で白砂に砂泥が混入する。崩壊と冠水が想定される層序。遺物は皆無。

30'号土坑 (第32図 図版13)

本遺構は、29号土坑の北東80cmに位置し(L)字状を呈する。長さ3m、幅1.2mで掘り込みは30cm、平坦な底部はシルト層で締まりは弱い。3ヶ所のピット状の掘り込みが見られるが何れも浅い。覆土は2層に分類され、何れもシングス状の自然埋積。2層は黒色で砂泥層。冠水が推察できる。遺物は皆無。

31号土坑 (第32図)

本遺構は、30号土坑の北西4.5m、G-5Gに位置し検出された。長辺1.2mで円形プラン。掘り込みは40cmと深く、鍋底状がやや崩壊気味。底部はシルト層の剥だし、締まりは弱い。覆土は3層で2層は黒色、砂泥層である。遺物は皆無で時期、性格は不明。

32号土坑 (第32図)

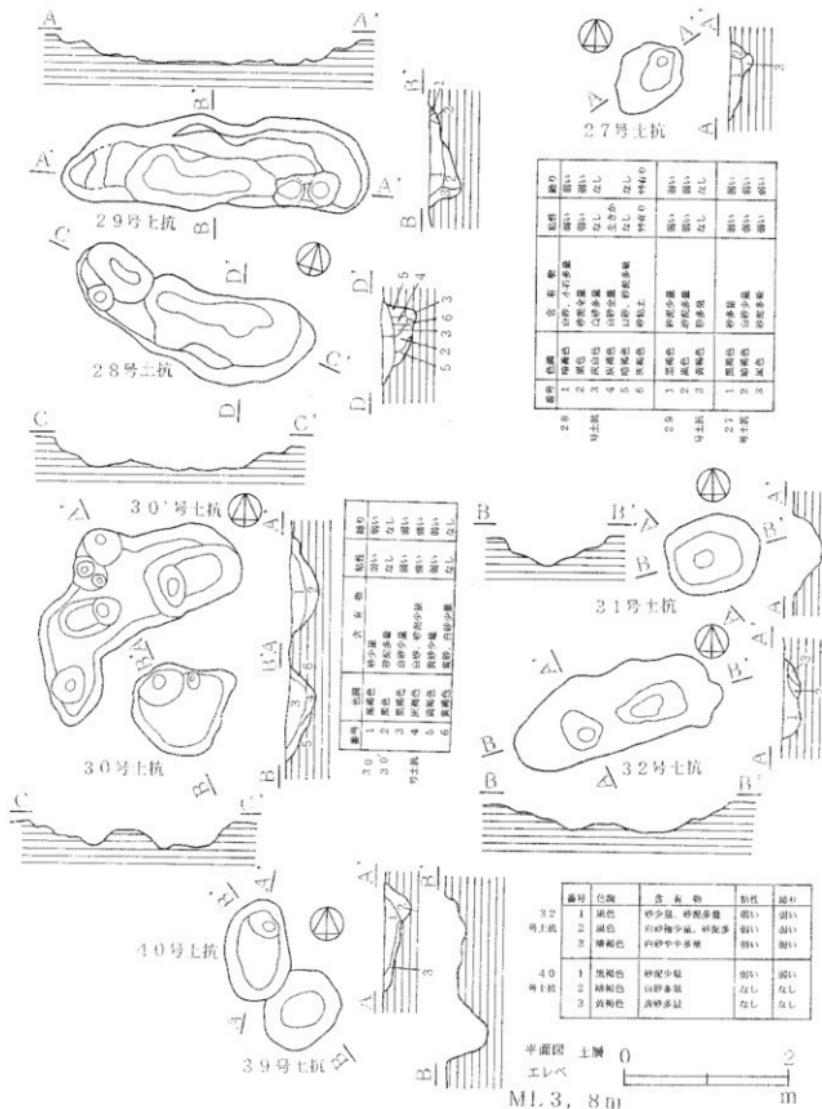
本遺構は31号土坑の北側H-5Gに位置し検出された。東西2.6m、幅1mの溝状を呈する。掘り込みは45cmと深いが、これは左右にピット状の掘り込み部分で他は浅い。覆土は3層で1層は黒色で砂泥層、2層は白砂に砂泥が交じる。2、3層は人工的な埋積。遺物は皆無。本遺構は9号掘建遺構、高床式と推察される南側に位置する。関連施設の土抗か。

33号土坑からは掘建遺構、高床式建屋と推察される土坑群で本記述から除外した。

39、40、43、44、46号土坑 (第32、33図)

本遺構群は、9号掘建遺構(高床式)の北側に位置する一群で円形、楕円形状で覆土はほぼ同一、1層はレンズ状の自然埋積、2層は黒色砂泥層である。本群は38号土坑に見られる土器(高

台杯、碗、墨書等から8~9世紀に位置づけられる土器を出土している)である。位置関係から関連施設の可能性が強い。



第32図 第27, 28, 29, 30, 30', 31, 32, 39, 40号土坑実測図

4 1, 4 2 号土坑 (第20図)

本遺構は、前述の土坑群からやや離れた位置に検出された遺構で一応別扱いとした。掘り方、プラン、覆土からは、ほぼ同一の可能性が強い。

4 1号土坑は、4 0号土坑の西側4 mに位置し北側には3 5号溝が近接する。径6 0 cm程の楕円形で掘り込みは2 5 cm程で浅い。遺物は皆無。

4 2号は3 5号溝の中に位置し、溝を掘り込み東西1 m、幅7 0 cmで長方形プランを呈する。掘り込みは5 0 cmと深い。覆土は確認面が黒褐色で一連の土抗群と時間的には大差が無いと推察する。遺物は皆無。

4 7号土坑 (第33図)

本遺構は、調査区の中央部C - 6 Gに位置し1 mと6 0 cmの円形プランが連結状のプランを呈し、掘り込みは1 5 cmと浅く皿状。底部はシルト層剥だしで平坦、締まりは無い。溝の一部?

4 8号土坑 (第33図)

本遺構は、4 7号土坑の東側1 mに位置し北側は1 0 1号溝に掘り切られ、南北2 m、幅7 0 cmで溝状を呈する。掘り込みは1 5 cm程と浅く、平坦で締まりは無い。遺物は皆無。一群の溝の一部か?

5 0号土坑 (第33図)

本遺構は、4 9号土坑西側1 0 m、D - 7 Gに位置し弱い(く)の字状を呈する。掘り込みは弱く5 cm前後、底部はシルト層で締まりは無い。本遺構も溝に近い。遺物は皆無。

5 1号土坑

本遺構は、4 8号土坑の東側6 m、C - 6 Gに位置し径1.8 mの円形を呈する。遺構の平面確認、ボーリング探査では深さ1 5 cm前後と浅い。

5 2号土坑 (第33図)

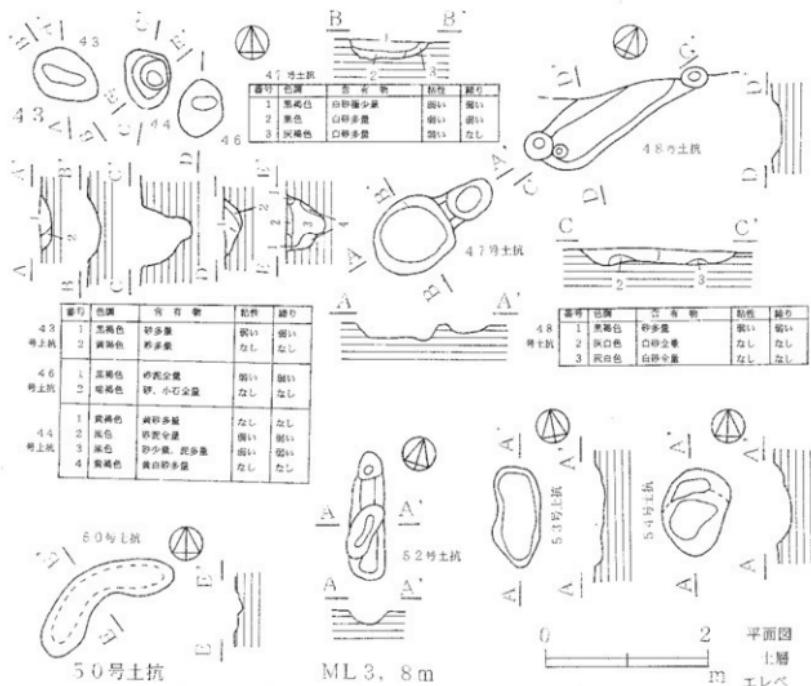
本遺構は、5 1号土坑の西側6 m B - 6 Gに位置し長さ1.6 mの溝状を呈する。長さ1.6 m、幅4 0 cmで、掘り込みは1 0 cmと浅く、U字状。底部はシルト層剥だしで締まりは弱い。覆土に砂泥を含む。遺物は皆無。

5 3号土坑 (第33図)

本遺構は、5 2号土坑の西側1 0 m B - 5 Gに位置し長さ1.2 m、幅5 0 cm。掘り込みは1 0 cmと浅く、底部はやや凹凸が見られ、締まりは無い。遺物は皆無。

5 4号土坑 (第33図)

本遺構は、5 1号土坑の南側6 m B - 7 Gに位置し長径1.1 mの楕円状を呈する。掘り込みは2 0 cmと浅い。U字状で底部はシルト層で締まりは弱い。覆土には砂泥を含む。遺物は皆無。



第33図 第43, 44, 46, 47, 48, 50, 52, 53, 54号土坑実測図

5 5号土坑（第34図）

本遺構は、5 4号土坑の南側6 m B - 7 Gに位置し長さ2.1 m、幅80 cmで一旦は括れる。南側は5 7号土坑に掘り切られている。深さは10 cm前後で平坦、2ヶ所落ち込みが見られ10 cm程下がる。シルト層で縛まりは無い。覆土には砂泥がみられた。遺物は皆無。

5 6号土坑（第34図）

本遺構は、5 5号土坑の南側8 m A - 7 Gに位置し長さ80 cm、幅50 cmの方形状を呈する。掘り込みは10 cmと浅く皿状。覆土には砂泥層が見られ自然埋積。底部は平坦、シルト層で縛まりは弱い。遺物は皆無。

5 7号土坑（第34図）

本遺構は、5 5号土坑の南東側8 m A - 7 Gに位置し長さ1.1 mの長円形状を呈する。掘り込みは15 cmと浅く底部は平坦、縛まりは弱い。覆土は砂泥を含み自然埋積。遺物は皆無。

これらの土坑に共通する事は何れも浅く、自然埋積で砂泥を含み溝状形態である。

5 8号土坑 (第34図)

本遺構は、4 9号土坑の東側5 m F - 8 Gに位置しプラン、形態は(へ)の字状を呈し長さ2.8 m、幅は40~90 cmで西側が広くなる。掘り込みは20 cm前後でやや浅い。底部は平坦でシルト層、締まりは弱い。覆土は3層で2層に砂泥層が見られる。冠水に因る埋積が推察される。遺物は皆無。

5 9号土坑 (第34図)

本遺構は、調査区の中央部の北隅F - 7 Gに位置して検出された。黒褐色層を調査した所変則的な6角形状プランを持つ。底部は明確な面は捉え切れず破線で図示したが単なる低地なのか、掘り込みなのか判断に窮したが一応上坑として取り上げた。南北2.2 m、東西2 mを測る。掘り込みは5 cm前後でシルト層、締まりは無い。遺物は皆無。覆土に砂泥を含む。

6 0、6 1号土坑 (第34図)

本遺構は、2 9号土坑の東側4 m F - 6 Gに位置し検出された。東西に1.1 m前後の溝状を呈し、分離すれば6 0号土坑は1 m程の長円形で掘り込みは鍋底状。締まりは無い。6 1号は1.2 mで掘り込みは40 cm。西側はV字状の掘り込みでやや浮いた状態で木片が出土している。崩壊気味で抜き取り痕か。2層に砂泥を含む。

6 2号土坑 (第34図)

本遺構は、6 0号土坑の東側2.2 m F - 6 Gに位置し、径40 cmと1.1 mの円形状のビットと土抗からなる。掘り込みは弱いV字状を呈する。10~20 cm前後と浅い。底部はシルト層で締まりは弱い。覆土は2層でレンズ状の自然埋積。1層には砂泥が含まれる。遺物は皆無。

6 3号土坑 (第34図)

本遺構は、6 2号土坑の北側1.6 m F - 6 Gに位置し三角形状プランを呈する。長辺2.3 m、高さ1.3 mで掘り込みは10 cmと浅い。底部は平坦でシルト層、締まりは無い。覆土は1層に砂泥の混入が見られる。遺物は皆無。

6 4号土坑 (第34図)

本遺構は、1 3号土坑の北側1 m D - 2 Gに位置し東西2.7 m、幅60 cmの溝状プランを呈する。掘り込みは浅く15 cm前後、底部は弱い凸凹が見られシルト層で締まりは無い。2層に砂泥を含む。2層は自然埋積。1層は搅乱、人工的な埋積か。遺物は土師器碗底部と破片が出士している。時期は、遺物から9世紀前後が推察される

6 5号土坑 (第34図)

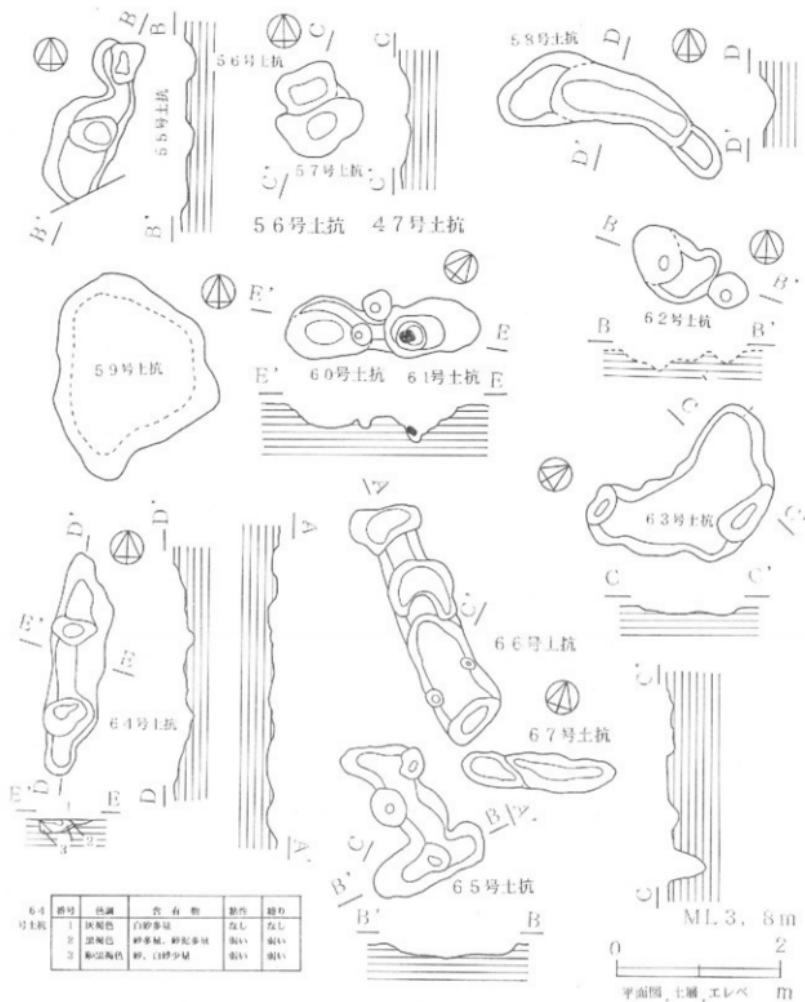
本遺構は、5 9号土坑の西側3 m F - 7 Gに位置し「上」状を呈し長さ1.8 m、幅60 cmで西側は東西に1.4 m、幅50 cmと溝状を呈する。掘り込みは15 cmで底部は平坦、シルト層剥出しで締まりは弱い。変則的プランを呈する。遺物は皆無。

覆土は、2層で自然埋積、一部砂泥を含む。

6 6号土坑（第34図）

本遺構は、6 5号土坑の北側40 cm、F - 7 Gに位置し長さは東西に3 m、幅70 cmの溝状プランを呈する。掘り込みは10 cm程度で浅く、上部を耕作等に因りカットされた感じである。覆土の黒褐色層には砂泥が混入する。

遺物は材質不明の木片長さ2 cmが出土している。時期、性格は不明。



第34図 第55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67号土坑実測図

67号土坑（第34図）

本遺構は、66号土坑の西側20cmに位置し、東西1.9m、幅50cmの溝状。掘り込みは10cm前後と浅い。底部は平坦でシルト層剥だし。縫まりは無い。覆土1層に砂泥が交じる。遺物は皆無。

69号土坑（第35図）

本遺構は、58号土坑東側2.4m、E-8Gに位置し東西に長さ2m、幅70cm溝状プランで掘り込みは12cmと浅い。底部は平坦シルト層剥だし、縫まりは無い。遺物は皆無。時期は前述の「溝」の時期か。

70号土坑（第35図）

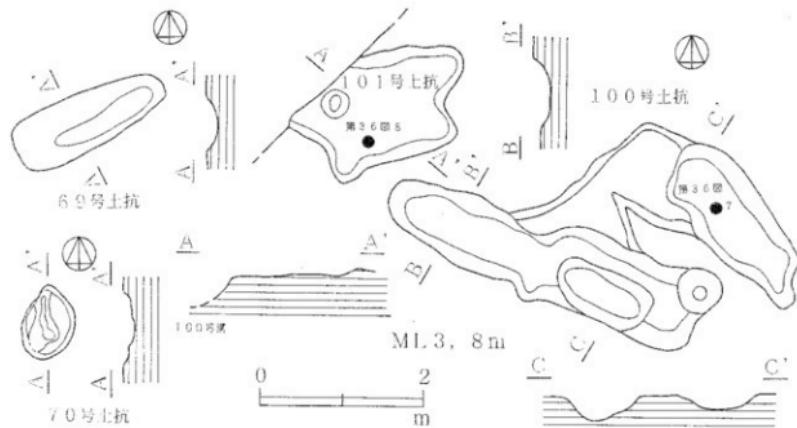
本遺構は、52号土坑の北側6m、E-8Gに位置し長径90cm程の長円形状を呈する。掘り込みは浅く15cm程で底部は若干の凹凸が見られる。覆土は2層で1層の黒褐色層には砂泥が交じる。遺物は皆無。

100号土坑（第35図）

本遺構は、58号土坑の北側6mE-8Gに位置し、長さ4m程の溝状部分に「へ」の字状に溝が付属している。大部分は10cmと浅く部分的には30cmを測る。溝状の複合か、底部はシルト層で縫まりは無い。遺物は皆無。

101号土坑（第35図）

本遺構は、100号土坑の北側50cmE-8Gに位置し、長さ2m程で北側を溝に掘り込まれ欠失している。幅は1.4mで方形状プランを呈する。掘り込みは12cmで浅く平坦、シルト

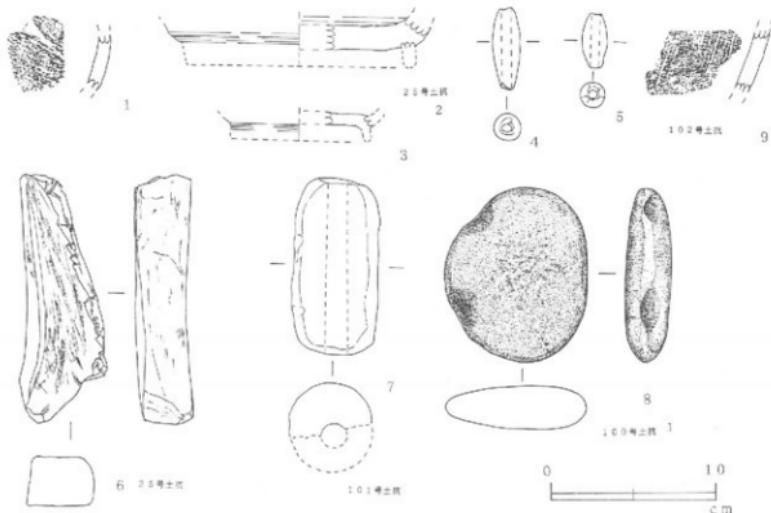


第35図 第69,70,100,101号土坑実測図

層剥だして締まりは無い。覆土は2層で1層の黒褐色には砂泥が混入し、冠水埋積が推察される。

◎土坑夢夢

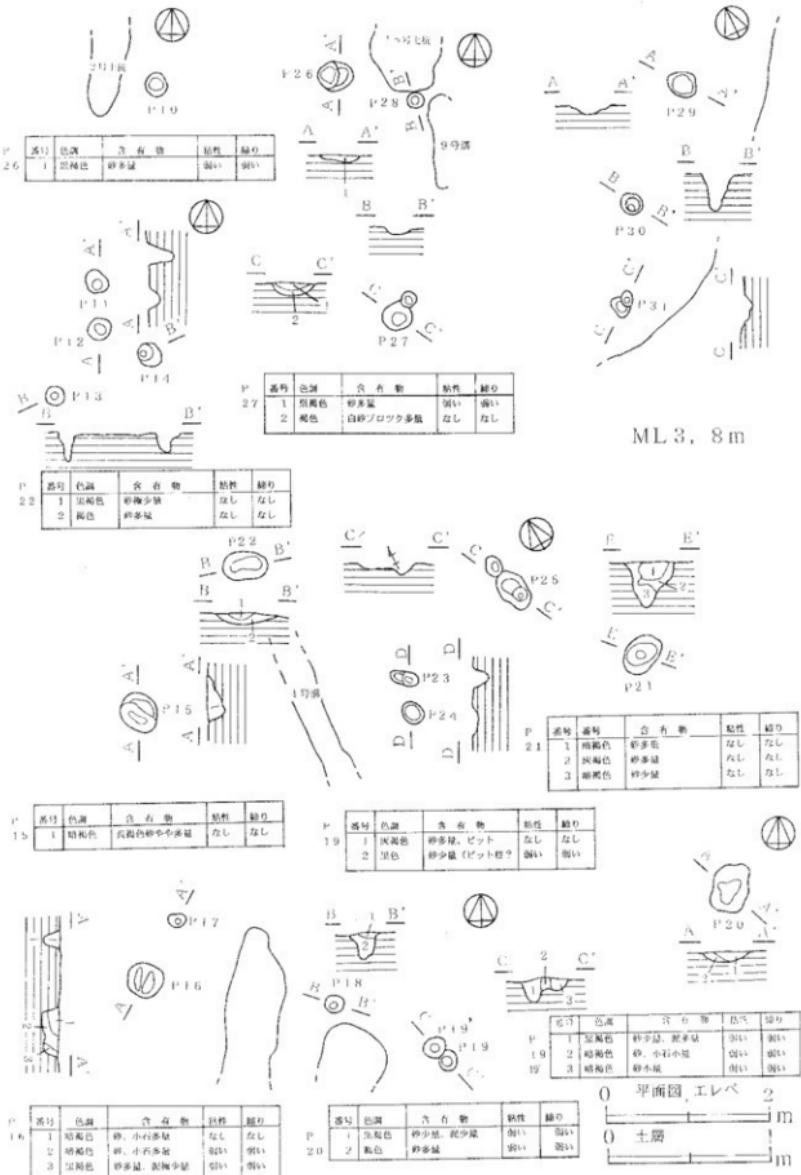
土坑の中には覆土に砂泥層、砂泥の埋積が見られるものがあり、投げ込み的に白砂が混入しているもの、底部近くのもの、確認面近くのもの、上層部に砂泥の混入が見られるものに分かれる。これは砂泥の混入時の時間差、時代差を表しており、すべて洪水等の大水出水に起因し、強い風ももちろん伴っていたんだろう。溝、ピット出土の半裁や上部の変形した柱は、折れた残存部の哀れな姿と思う。災害と戦い生きた人々の生活を彷彿させる遺跡である。



第36図 土坑出土遺物実測、投影図

V ピット

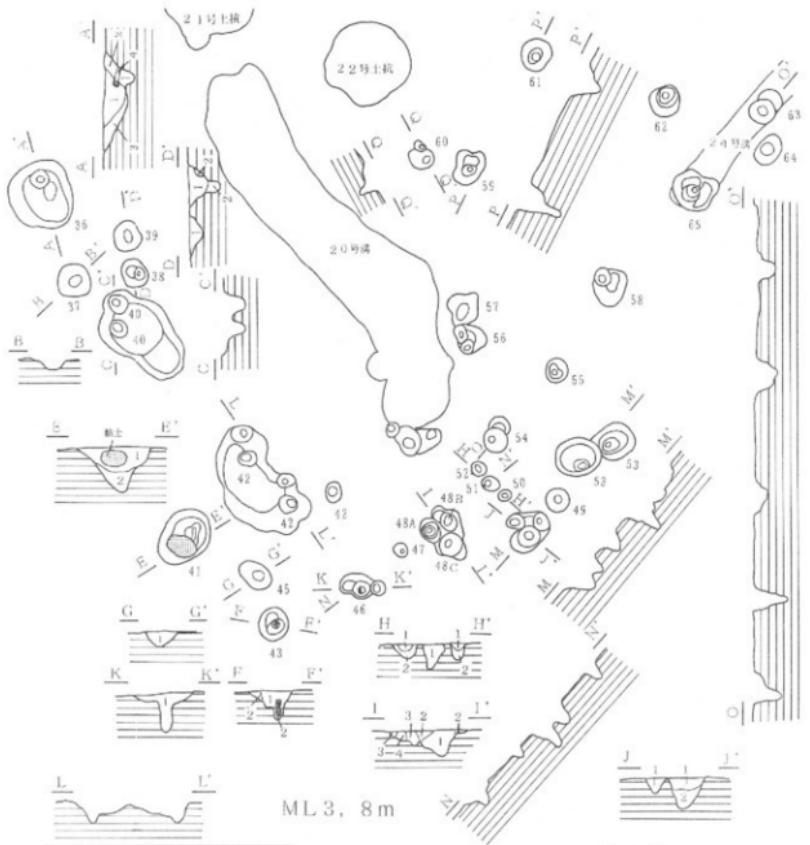
ピットは総数500基以上が検出された。これらには掘建遺構の柱穴であったり、使用方法や構成の判らないもの、溝の中に位置するものもあった。以下掘建遺構のピットを除き、構成の判らないものについて表に示す。9号迄は欠番である。覆土は確認面では概ね黒褐色層である。



第37図 第10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 19', 20, 21, 22, 23, 24, 25, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31号ピット実測図

表1 第10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19', 20, 21, 22, 23, 24, 25, 25', 26, 27, 28, 29,
30, 31, 36, 37, 38, 39, 40, 40', 41, 42, 42', 43, 45, 46, 47, 48ABC, 49, 49', 50, 51, 52号ビット

番号	径、 深さ	形状、掘り方	出土遺物	備考
10	25 15	円形 U		小型
11	28 30	楕円 U		やや深い
12	28 15	円形 U		11と並列
13	22 40	円形 V		底部円筒で深く砂泥層を持つ
14	30 25	円形 U		底部に砂泥層を持つ
15	50 20	円形 鋸底状		崩壊の感じ
16	45 20	円形 鋸底状		3層に砂泥を含む
17	20 20	長円形 U		小型
18	20 30	円形 U		小型で2層に砂泥を含む。
19	25 30	円形 U		小型で2層に砂泥を含む。
19'	25 15	円形 U		"
20	50 10	方形状 直状	土師器皿破片	方形プランで浅い
21	50 60	方形状 V		砂が多量 覆土は灰褐色、褐色
22	50 10	楕円 直状		覆土は2層自然埋積
23	10 20	円形 U		小型 22と並列
24	25 5	円形 直状		小型 23と並列
25	50 10	長円形 U		浅い掘り込み 25' と並列
25'	20 5	円形 直状		浅い掘り込み 25 と並列
26	30 5	円形 直状		浅く覆土は1層
27	30 10	円形 半円		浅い。覆土は2層で2層は白砂
28	15 5	円形 直状		浅い。覆土は1層
29	30 10	円形 直状		浅い。
30	22 55	円形 U		深く下層は砂泥を含む
31	18 10	円形 U		浅い。崩壊か
36	80 20	鋸底状		崩壊の感じ、4層は砂泥層
37	40 15	円形 直状		浅い。
38	35 15	楕円 V		覆土1層は砂泥層
39	38 40	楕円 U		やや崩壊した感じ
40	20 25	円形 U		1mの状況が記述されている。
40'	20 25	円形 U		
41	70 60	楕円 V		註出1層でK層の状況で2層は砂泥層
42	20 25	円形 U	クスの破片	A, B, C, D等のビット跡ある
42'	25 15	長円形 U		やや浅い
43	40 45	円形 U	クスの破片	やや大型
45	40 25	楕円形 半円		大型、崩壊2層は砂泥層
46	50 30	円形 円筒状		やや大型
47	15 20	円形 U		小型、覆土下部には砂泥層
48A	20 30	円形		小型、崩壊不明
48B	18 20	円形		小型、崩壊不明
48C	25 30	円形 U?		崩壊しているがU字状か
49	25 25	円形 U		砂泥層が複数ある。
50	15 25	円形 U		50, 51, 52は連続して検出され何れも小型で51のみ1層、2層には砂泥を含む。
51	20 40	円形 V		
52	15 25	円形 U		



P	品目	色調	含有物	粘性	触り
3-6	1	黒褐色	砂少多量	弱い	弱い
	2	深褐色	砂多量	弱い	弱い
	3	暗褐色	砂少/ブラック	なし	なし
	4	黒褐色	砂多量	弱い	弱い
3-9	1	黒色	砂多量	弱い	弱い
	2	暗褐色	砂少/ブラック	なし	なし
4-1	1	黒褐色	砂少/粘上/ブラック	特有の 強い	弱い
	2	黒褐色	粘上/ブラック	強い	強い
4-5	1	暗褐色	砂多量、炭少量	弱い	弱い
	1	暗褐色	砂多量	弱い	弱い

番号	色調	含有物	粘性	繊り
1	茶色	紗認多量小プロック	弱い	弱い
2	黒褐色	紗多量	なし	なし
3	秋紅葉色	紗少量	なし	なし
4	濃青色	紗少量	弱い	弱い

番号	色調	含有物	粘性	繊り
1	焦褐色	紗多量	弱い	弱い
2	暗褐色	紗多量	弱い	弱い
3	黒色	紗多量	街い	街い
4	灰褐色	紗・じブロツク	強い	強い
5	墨褐色	紗多量	弱い	弱い
6	深褐色	紗多量	弱い	弱い

品目	色調	含有量	活性	繰り返し
1	黒褐色	珍多量	弱い	弱い
2	黒褐色	珍多量、微量	なし	なし
3	黒褐色	少々量	なし	なし
4	黒褐色	微量	なし	なし
5	黒褐色	微量	なし	なし
6	黒褐色	微量	なし	なし
7	黒褐色	微量	なし	なし

平面図、エレベ、土解

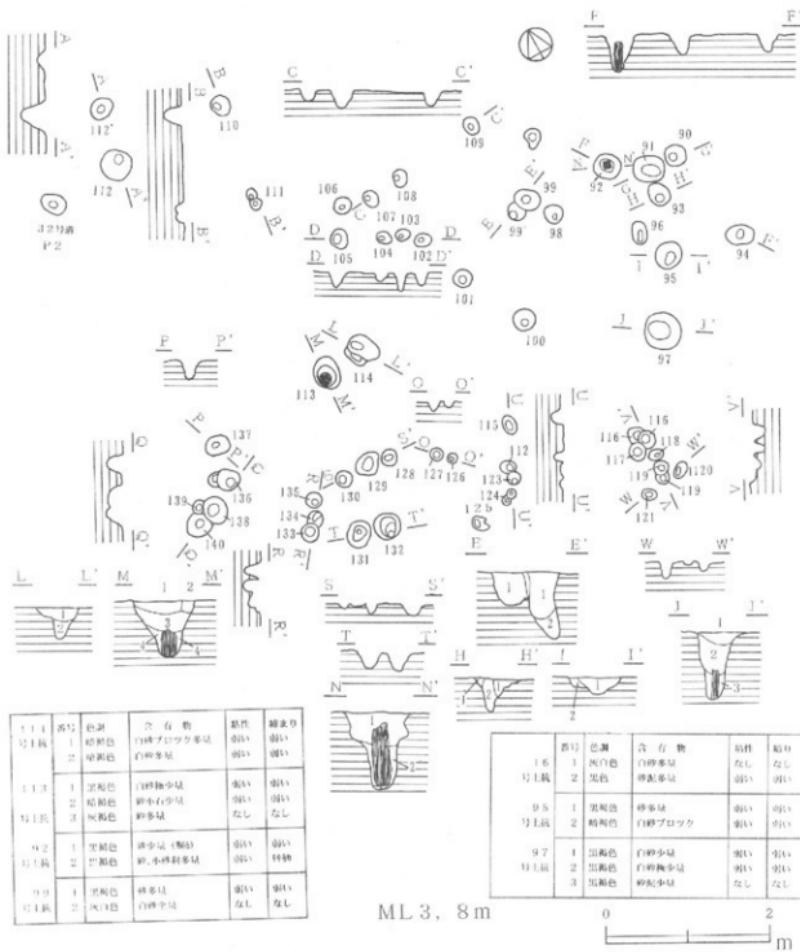
12

第38図 第36, 37, 38, 39, 40, 40', 41, 42, 42', 43, 45, 46, 47, 48ABC, 49, 49', 50, 51, 52, 53,

53°, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64 号ピット実測図

表2 第53, 53', 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99,
99', 100, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 112', 113, 114, 115, 116号ビット

番号	径、 深さ	形状、掘り方	出土遺物	備考
53	5.0	5.3	楕円 円筒	5.3, 5.3'は隣接し切り合う
53'	4.5	1.5	楕円 蝶状	円筒部分は砂泥層、5.3は崩壊
54	3.0	2.0	円形 V	北側の円形ビットを掘込む
55	3.0	2.0	円形 U	崩壊気味の感じ、砂配を含む
56	3.5	2.0	楕円 U	内部に小ビットが2基ある
57	4.0	2.0	方形状 U	5.6と隣接、崩壊状
58	4.0	4.0	方形状 U	やや崩壊が進む、砂泥層をもつ
59	4.0	2.0	長円形 円筒	下部は円筒状、砂泥層を持つ
60	3.5	2.5	円形 円筒	崩壊し下部は円筒、砂泥層
61	4.0	2.8	円形 V	底部に砂泥層を含む
62	4.0	5.0	円形 円錐	逆円錐状底部には砂泥層
63	3.0	3.0	円形 U	2.4号溝の中に位置
64	4.0	2.5	円形 U	5.4~6.3ラインからずれる
65	5.0		方形状 円筒	中央部は円筒状、砂泥層
66	欠			
90	2.5		円形 U	9.1と並ぶ
91	4.0	2.0	楕円 U	浅く小型で方形状
92	3.0	4.0	円形 U	栗の木が折れた状態で出土
93	2.2	2.8	楕円 V	2層は砂泥層を持つ、小型
94	2.0	1.5	楕円 V	崩壊気味
95	3.0	1.5	円形 鑷底	砂配を含む
96	3.0	1.5	楕円 U	小型
97	4.5	5.5	円形 U	丸太状木材
98	2.0	1.5	円形 U	1.0 cm程の小片出土
99	3.0	5.5	円形 U	小型
99'	2.0	2.5	円形 U	崩壊気味 9.9'をきる
100	2.5	1.5	円形 U	9.1から9.9迄は一群的在り方
102	2.2	1.8	円形 U	小型、外れた位置
103	2.0	2.0	円形 U	細く浅い
104	1.8	1.0	円形 U	崩壊気味
105	2.5	2.0	円形 V	遺存状態は良い
106	2.2	1.5	円形 U	小型
107	2.5	1.5	楕円形 U	小型
108	2.0	2.0	楕円形 U	小型
109	2.0	2.0	円形 U	小型
110	2.2	2.0	円形 U	小型
111	1.5	1.0	円形 U	小型 1.0.1から一群のビット群
112	4.0	3.0	円形 U	大型で方形状
112'	3.0	1.0	円形	浅い
113	3.2	4.5	円形 U	カシの短い角材、砂泥層
114	3.5	2.5	方形 V	覆土に白砂を含む
115	2.0	1.8	楕円 U	小型
116	1.8	2.0	楕円 U	1.16', 1.17に切られる
116'	2.0	2.0	円形 U	1.16, 1.16'を切り込む

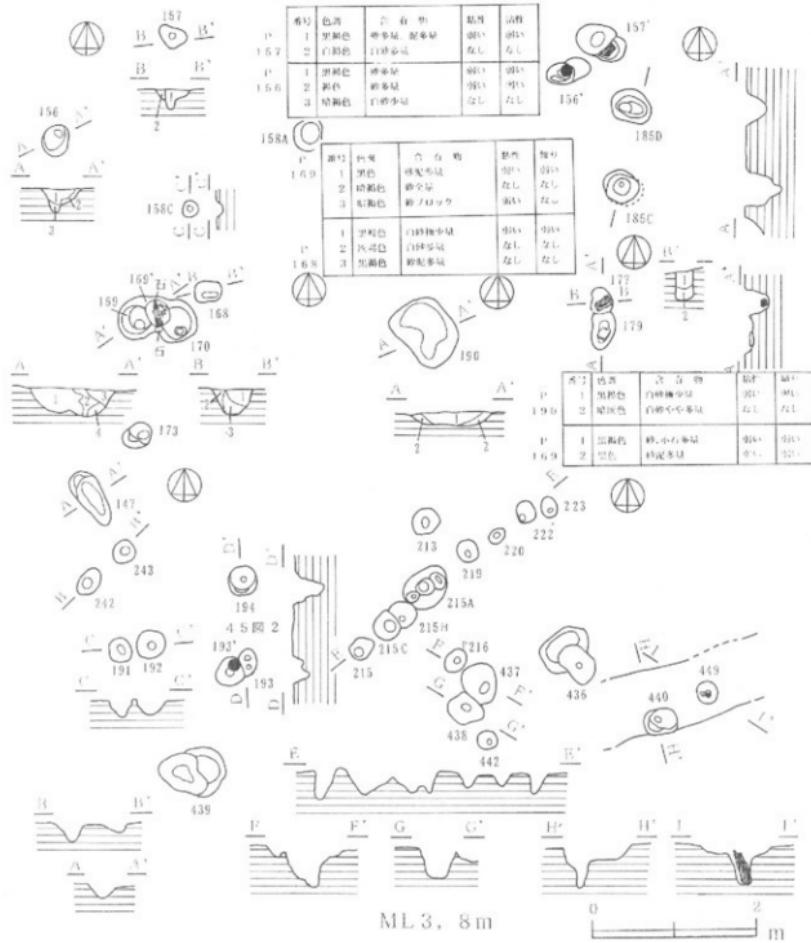


第39図 第90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 99', 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 112', 113, 114, 115, 116, 116', 117, 118, 119, 119', 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139号ピット実測図

表3 第117, 118, 101, 119, 119', 120, 121, 122, 123, 124', 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 133, 134
135, 136, 137, 138, 139, 140, 147, 156, 156', 157, 157', 158ABC, 168, 169, 169', 170, 173, 177, 179

185C, 185D, 191, 192号ピット

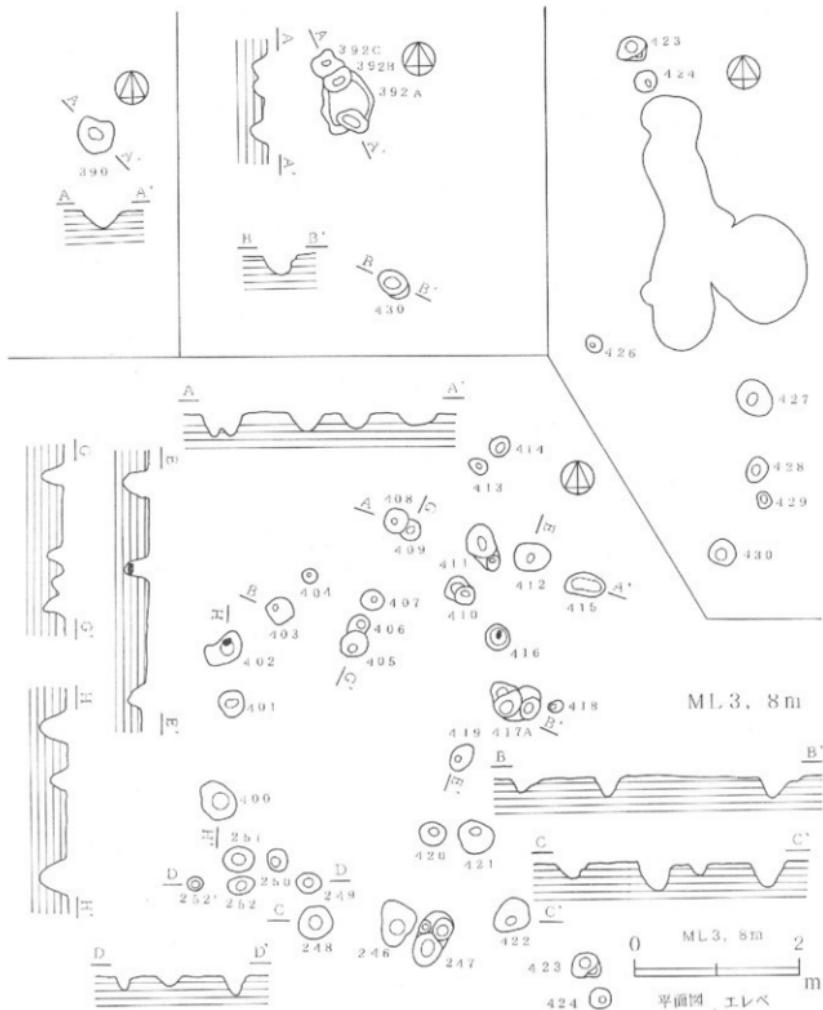
番号	径、 深さ	形状、掘り方	出土遺物	備考
117	20 25	円形 U		小型
118	20 15	楕円 U		小型
101	20 20	円形 U		小型
119	20 10	円形 U		小型
119'	20 10	円形 U		小型
120	25 15	楕円 U		小型 116~121は1組
121	20 15	楕円 U		小型
122	20 10	楕円 U		小型
123	15 5	円形 U		小型
124	15 5	円形 血状		小型
125	20 10	方形 血状		小型
126	10 5	円形 U		小型
127	15 10	円形 U		小型 122から127は一群
128	20 18	円形 V		小型
129	30 15	円形 U		やや大きい
130	18 5	円形 U		小型 128~130は並列
131	35 30	円形 U		やや大きい 131, 132は並列
132	35 30	円形 U		やや大きい
133	35 32	円形 U		小型
134	20 20	円形 U		小型
135	15 20	円形 U		小型 133~135は並列
136	22 20	楕円 U		小型 136, 138, 140は並列
137	22 20	円形 U		小型
138	30 20	円形 U		やや小型
139	15 10	円形 U		小型
140	35 25	円形 U		小型
147	70 15	長円形 V		浅い、長く深い
156	35 15	円形 U		1層に砂泥層を含む
156'	35 20	長円形 U		砂泥を含む
157	25 15	楕円形 V	松板 16 cm	小型
157'	40 20	楕円形 U		大きく深い
158B	30 20	長円形 U		3層砂泥層
158C	20 15	円形 U		小型
168	20 30	方形状 U		やや大きい
169	50 20	円形 U		1層砂泥層
169'	30 30	円形 U	桜、椎、楠、杉	短く切った丸太で出土 15 cm
170	50 25	円形 U		崩壊氣味
173	25 15	長円形 U		
177	25 30	楕円形 U	松	平面的で大木のものか
179	45 15	長円形 血状		堅木質
185C	40 45	円形 U	不明残木	底は円筒で砂泥
185D	45 25	楕円形 U		円錐状で底に砂泥
191	25 20	円形 U		小型
192	32 15	円形 U		小型



第40図 第147, 156, 156', 157, 157', 158A, 158C, 168, 169, 169', 170, 173, 177, 179, 185C, 185D, 191, 192, 193, 193', 194', 213, 215', 215ABC, 216, 242, 243, 436, 437, 438, 439, 440, 442, 449号ピット実測図

表4 第193, 193', 194', 213, 215', 215ABC, 216, 242, 243, 436, 437, 438, 439, 440, 442, 449, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 252', 390, 392ABC, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412号ピット

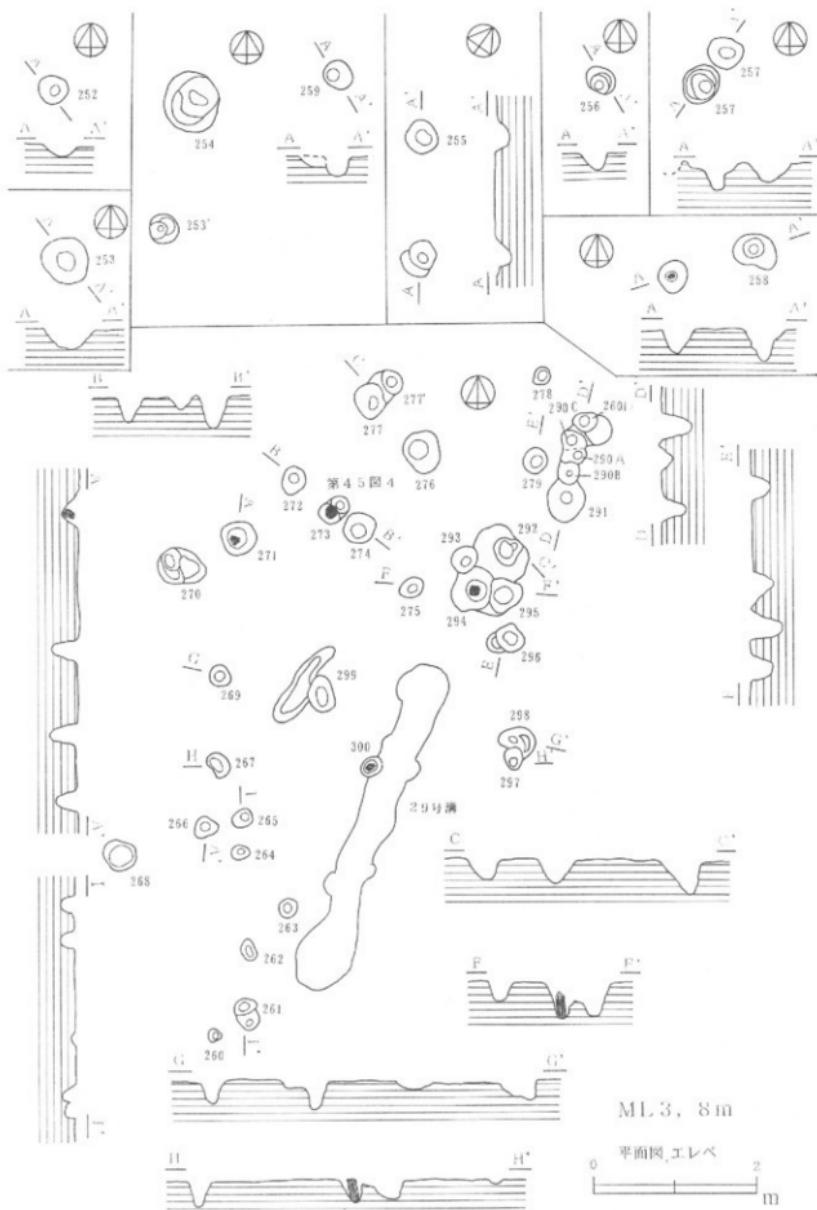
番号	径、深さ	形状、彫り方	出土遺物	備考
193	20 15	楕円形 U		小型 193'に切られる
193'	35 25	円形 V		小型、底砂泥
194'	32 35	円形 V		崩壊状、底は砂泥
213	32 20	円形 U		やや崩れ気味
215'	30 35	楕円形 U		崩壊気味
215A	60 30	楕円形 U		内部に3P有り
B	25 30	円形 U		Cに掘込まれる
C	32 30	楕円形 U		崩れ気味一連の並列
216	30 15	楕円形		小型で浅い
242	20 15	円形 U		小型
243	35 32	方形状 U	栗角柱	幅11、長さ25cm
436	50 20	方形 V	不明木片	長さ5cm前後
437	40 50	楕円形 V		大型、深い
438	35 40	方形状 V		437と切り合い
439	70 30	楕円形 V		大型
440	40 50	円形 U		底部U砂泥、溝中
442	22 15	円形 U		小型
449	23 70	円形 U	カシ丸柱	長さ60cm上部は折れた感じ
246	50 35	楕円形 U		三角形状
247	70 40	長円形 U		大型
248	40 20	円形 U		やや大きい
249	20 25	円形 U		小型
250	28 20	円形 U		小型
251	35 25	円形 U		やや大きい
252	32 15	長円形 V		小型
252'	15 15	円形 U		小型
390	45 22	円形 V		三角形状
392	70 10	長円形 □状		土杭状
A	30 20	円形 U		小型
B	40 15	長円形 U		小型
C	35 20	方形状 V		小型 ピット中
400	50 35	円形状 U		やや大型
401	30 22	円形 U		小型
402	40 42	長円形 U	根石	深め、底部に石をもつ
403	30 12	円形 V		浅い
404	18 10	円形 V		超小型
405	35 25	円形 U		406を切る
406	25 15	円形 V		405を掘込む
407	22 20	円形 V		小型
408	30 22	円形 V		408を切る
409	25 20	円形 V		小型
410	30 20	円形 V		長円状、埋込み有り、408に切られる
411	40 22	楕円形 U		
412	40 15	長円形 V		長円形状



第41図 第246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 252', 390, 392ABC, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 412, 413, 414, 415, 416, 417A, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 426, 427, 428, 429, 430号ピット実測図

表5 第413, 414, 415, 416, 417A, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 426, 427, 428, 429, 430, 430', 229, 252, 253, 253', 254, 254', 255', 256, 257, 257', 258, 259, 259', 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 269, 270, 271, 272, 273号ピット

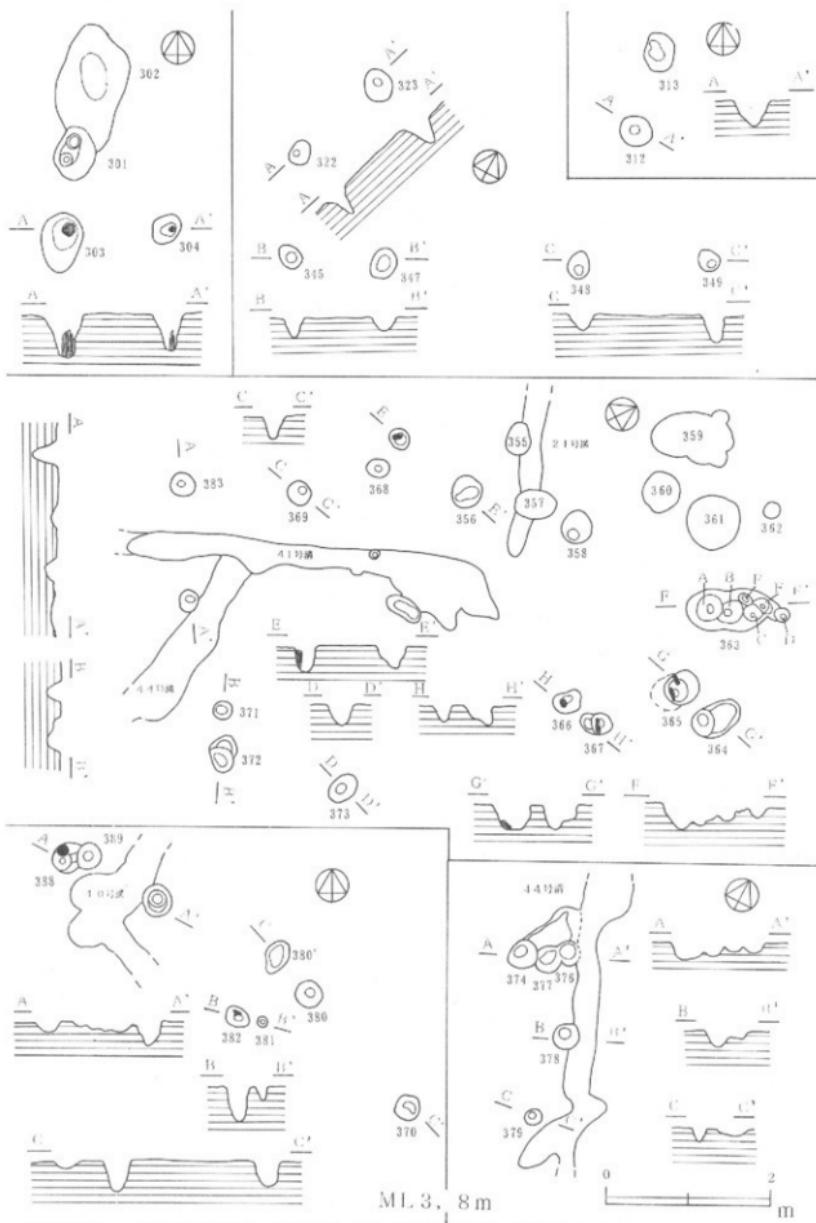
番号	径、深さ	形状、断り方	出土遺物	備考
413	20 15	楕円形 U		小型
414	25 20	楕円形 U		小型
415	50 15	長円形 脈状		長円形状、浅い
416	30 25	円形 U	カシの丸柱	長さ22cm、下端を焼く
417A	50 25	楕円形 U		大型で替えか
418	15 10	楕円形 U		超小型
419	35 21	長円形 U		浅い
420	30 20	円形 U		
421	40 30	楕円形 V		大きめ
422	50 30	楕円形 U		大きめ
423	40 20	楕円形 U		小型
424	30 20	円形 V		小型
426	18 15	円形 V		超小型
427	50 30	円形 V		やや大きい
428	30 15	楕円形 U		小型
429	20 15	長円形 U		超小型
430	30 22	長円形 脈状		崩壊し変形
430'	30 25	円形 U		小型
229	40 30	長円形 U		深め、砂泥層を持つ
252	32 15	円形 脈状		浅い
253	60 25	半円形		類例は少ない
253'	35	円形		小型
254	70 50	円形 U		深い、底部砂泥層
254'	40 20	楕円形 U		やや浅い
255'	40 15	半円形		類例少ない
256	35 22	楕円形 U		小型、浅い
257	50 35	楕円形 U		円錐状、崩壊気味
257'	35 25	円形 U		浅い
258	50 40	楕円形 V		底部に砂泥層
259'	40 30	円形 U		底部砂泥層
259''	35 25	円形 円筒		小型、浅い
260	18 10	円形 U		オーバーハング状
261	30 18	長円形 U		小型
262	25 5	長円形 U		小型 浅い
263	23 15	円形 U		小型
264	25 20	長円形 U		小型
265	23 14	楕円形 U		小型263~265は一連の中
266	30 30	楕円形 U		底部砂泥
267	30 35	長円形 U		底部砂泥
269	22 30	円形 U		底部砂泥
270	55 30	楕円形 U		底部砂泥
271	40 22	円形 V	カシの芯	開いたV字状 長さ12cm
272	30 30	楕円形 U		小型
273	40 42	楕円形 U	根石	双孔状



第42図 第229, 252, 253, 253', 254, 255, 256, 257, 257', 258, 259, 259', 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268', 269, 270, 271, 272, 273, 276, 277, 278, 279, 290B, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 300号ビット実測図

表6 第274, 275, 276, 277, 277', 278, 279, 290A~B, 291, 292', 293, 294, 295, 296, 297, 298, 300,
301, 302, 303, 312, 312', 313, 323A, 345, 347, 348, 349, 356, 358, 360, 361, 362, 363A~F号ピット

番号	径、深さ	形状、掘り方	出土遺物	備考
274	40 42	円形 V		底部砂泥
275	30 22	楕円形 U		小型
276	42 32	楕円形 U		崩壊状
277	30 30	円形 U		崩壊気味
277	21 20	円形 U		小型
278	20 15	円形 U		超小型
279	30 20	円形 U		小型
290A	20 5	円形 脳状		小型 浅い
B	30 5	円形 脳状		小型 浅い 291を切る
C	28 18	円形 V		小型 浅い
D	30 38	円形 U		小型
291	42 30	円形 U		底部砂泥
292	30 40	円形 V		底部砂泥
293	32 20	円形 U		小型 294, 292'を切る
294	60 42	楕円形 U	カシの丸柱	立ったまま出土
295	38 40	楕円形 U		崩壊気味
296	35 28	方形状 U		崩壊?
297	25 20	楕円形 U		小型
298	40 5	楕円形 U		変形気味
300	30 32	楕円形 U	栗の丸柱 5 3 cm	赤味、垂直で上ぶ折れ
301	60 30	円形 円筒状		中に2基のP有り 土抗状
302	110 15	溝状 脳状		土抗状
303	70 55	長円形 U	栗柱 8角~9角	半分割された状態で建つ 29 cm
304	40 45	長円形 U	栗の角柱	半分割れ欠失で出土 38 cm
312	30 30	円形 V		底部砂泥
312	40 30	円形 V		崩壊状
313	40 20	楕円形 U		崩壊状
323A	35 35	楕円形 V		312と並列
345	32 22	長円形 端底		小型
347	40 18	長円形 U		小型 345と並列
348	30 20	長円形 U		小型
349	22 35	円形 U		小型 深い、底部砂泥
356	40 30	円形		崩壊状
358	40 20	円形 U		崩壊状
360	40			確認のみ
361	60			"
362	20			"
363	110 40			"
A	30 35	円形 U		崩壊
B	28 30	円形		Aに切られる
C	25 20	長円形 U		小型
D	15 10	円形 U		小型
E	15 10	長円形 U		超小型
F	15 12	楕円形 U		小型 Cに切られる



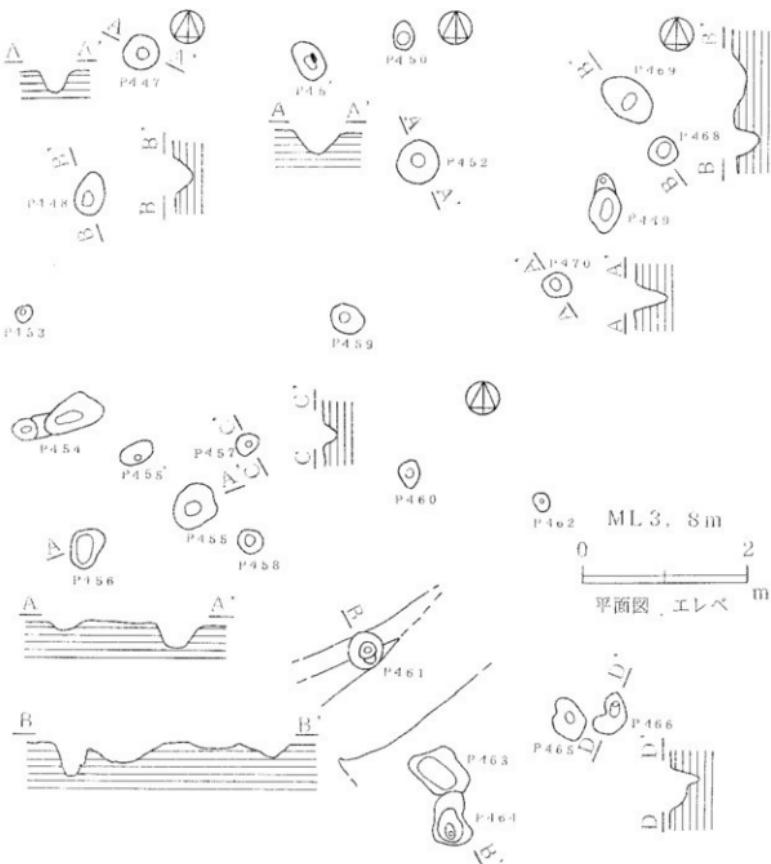
第43図 第301, 302, 303, 312, 312', 313, 323A, 345, 347, 348, 349, 356, 358, 363A~F, 364, 365, 366, 367, 368', 369, 370, 371, 372, 373, 374, 377, 378, 379, 380, 380', 381, 382, 385, 388, 389号ピット実測図

表7 第364, 365, 366, 367, 368, 368', 369, 370, 371, 372, 373, 374, 376, 377, 378, 379, 380, 380', 381, 382, 385, 388, 389, 45', 447, 448, 450, 452, 453, 454, 455, 455', 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 465, 466, 468号ピット

番号	径、深さ	形状、掘り方	出土遺物	備考
364	60 40	長円形 U		崩壊長円左に小ピット
365	40 35	円形 U	かめ縁と耕	19と14cm底部出土
366	32 32	楕円形 V	栗角柱	長さ25cm、幅11cm
367	25 30	円形 U		変形している
368	20 32	円形 U	カシ角柱 石	27cm 11cm
368'	22	円形		小型
369	30 35	円形 V		小型 底部砂泥
370	30 30	円形 U		小型
371	22 20	円形 U		小型
372	25 15	楕円形 U		小型 崩壊気味
373	40 25	長円形 U		やや変形?
374	38 22	円形 U		連結状左端
376	25 10	円形 地状		切り合い
377	30 15	円形 U		不明
378	30 20	円形 V		小型
379	20 10	円形 V		小型
380	30 35	円形 U		やや深い、底部砂泥
380'	40 5	長円形 地状		小型 浅い
381	7 15	円形 V		超小型
382	30 48	楕円形 U		底部砂泥
385	40 30	円錐状 V	不明木片	崩壊気味
388	22 15	円形 地状		浅い
389	32 20	円形 U		小型
45	30 35	長円形 V		深め、底部砂泥
447	40 5	円形 U		遺存状態良
448	52 22	長円形 V		開いた形
450	22 10	長円形 U		小型
452	50 30	円形 V		開いた形
453	21	円形 V		超小型
454	110	円形、長円		溝状、西側に小ピット
455	60 30	楕円形 鋸底		大型、底部砂泥
455'	40 30	長円形 V		454, 458と並列
456	50 10	楕円形 地状		浅い
457	25 18	楕円形 U		浅い
458	30 25	円形 U		小型
459	35 20	円形 V		小型
460	30 20	楕円形 V		小型
461	45 40	円形 U		底部砂泥
462	20 10	長円形 V		小型
463	65 5	方形 地状		土抗状
464	60 15	方形状 V		開いた、浅い
465	45 30	方形状 V		崩壊状
466	60 40	長円形 V		崩壊状
468	35 32	円形 U		底部砂泥

表8 第469,470号ピット

番号	径、 深さ	形状、掘り方	出土遺物	備考
469	70 15	稍円形 皿状		浅い 土坑状
470	30 38	円形 V		深い、底部砂泥



第44図 第45', 447, 448, 450, 452, 453, 454, 455, 455', 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462,
463, 465, 466, 468, 469, 470号ピット実測図

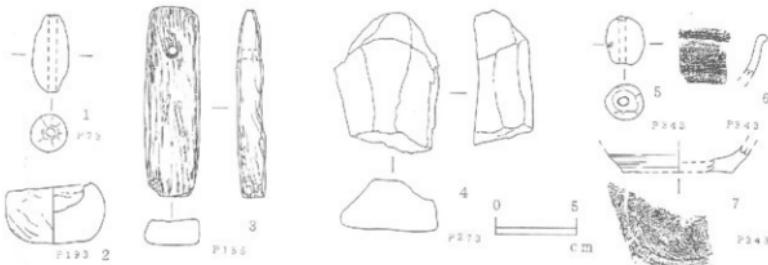
◎表採遺物 (第46図 図版24)

本遺跡からは遺構確認作業中、銅鏡2枚、キセルの雁首等が出土している。キセル雁首は江戸時代以降のもの。火皿は、朝顔型で深めのものと内傾気味のものが見られる。雁首も太めのと、細めのものが見られた。銅鏡は嘉祐通宝と文久永宝が出土している。嘉祐通宝は径2.1cmで小

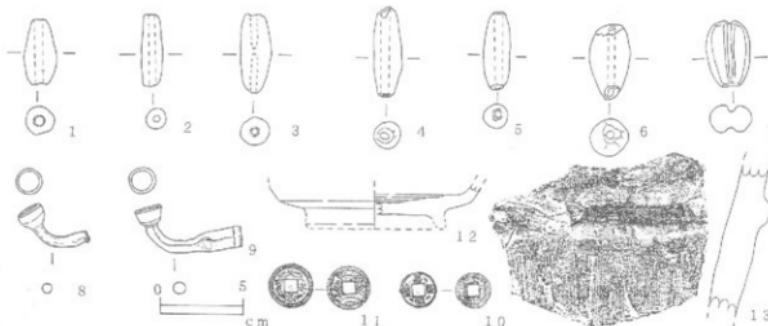
原寸より4mm程小さい。渡来銭で北宋の嘉祐元年1056年の铸造とされる。水田面下の遺構確認中の出土遺物で本銭は本遺跡の終末期、洪水、大風の時期平安末期～鎌倉時代初頭の11世紀を推論させる出土銭である。1次調査の堂宇近くから出土している。文久永宝は書体から1863年、文久3年の铸造と推察される。100号溝上部から出土している。

表9 管状土鍤、煙管、出土銭

番号	重さ g	長さcm	形態、特徴	備考
1	1.2	4.0	横円形、下部が張る	孔部円形
2	7	4.4	管状土鍤	孔部円形
3	1.6	4.6	中央部が強く張る	孔部円形
4	1.2	5.5	やや長めで中央が張る	孔部横円状
5	1.0	4.8	管状土鍤	孔部横円気味
6	1.9	4.6	中央部から大きく張る	孔部円形 近世の鍤に近い
7	1.5	4.0	中央表面の網掛け溝あり	小型であるが重さは変わらず
8	1.0	6.5	やや太めの形態	雁首のみ
9	7	4.4	やや細い	雁首のみ
10	2	2.7	北宋銭よりやや小型	書体から嘉祐元年(1056年)の初鋳
11	3	2.2	遺存状態は良い	書体から文久三年(1863年)の初鋳



第45図 ピット出土遺物実測図



第46図 沖洲、八重橋表探遺物出土遺物実測図

VI 総括

はじめに

八重橋遺跡の総括は、一次調査分はすでに報告しているがこれを修正することは可能である。しかし修正はしない。一次調査時点の結果であり、今回の調査終了時の見解との差異は当然あるべきである。あくまでも調査した遺物と遺構からの判断で有りここではそうした一次調査、二次調査を合わせて時代順に総括していきたい。

一次調査では10～12世紀の畠、堂宇、掘建遺構、柵列等が検出されたと報告した。花粉分析結果、出土木材の分析、根石の経文等の鑑定結果、畠から出土した藏骨壺は常滑の『三筋壺』と常滑市資料館の御好意に寄り12～13世紀の物との見解が寄せられた。これ等を元に一次調査では本遺跡の推論を重ねた。本調査の見解は一部の方々と相当の開きがあった。

1 掘建遺構

今回は一次調査を踏まえ、主に『八重橋遺跡』の一部について述べて見たい。一次調査を合わせて調査面積は約50a、遺跡の一部を調査したと推定したい。

時代的には『三昧塚古墳』の保存調査で古墳時代の住居跡が検出されている。(明治大学 2000)これらから、本砂州上には古墳時代和泉期以降鎌倉時代初期まで連続し、沖州地区の沖積地に人々は生活の痕跡を残していた。今回のは場整備事業地内にもその一部が存在していた。調査区は、こうした冲積地の標高4.5mを基準に設定した。

今回の調査で検出された遺構は、奈良時代に推定される9号掘建遺構『高床式建屋』の可能性が考えられる土坑群が検出された。土坑は楕円形状から方形状である。遺物は38号土坑から土器甕、内黒の坏体部に墨書「判読不可」がある。そして掘建遺構の東側に環状の二重の溝が巡り、時期在地勢力の根拠地として、又律令体制化の(村)としての使用が推察されよう。溝は須恵器、土器甕、坏10片等が出土している。

これに対応する掘建遺構は無い。未調査部分に存在したか。水田の耕作土を除去した後で観察すると土質、標高は西側から南側の一部に差異が見られ、この部分が当時の「屋敷」としての利用が可能であった。と推察する。

次に掘建遺構は全体に広がりを見るが、調査区中央部の2号とやや離れた5号が平安時代の掘建遺構と推察される。柱間は現寸法で6尺二寸前後、何れも居宅が推察される。

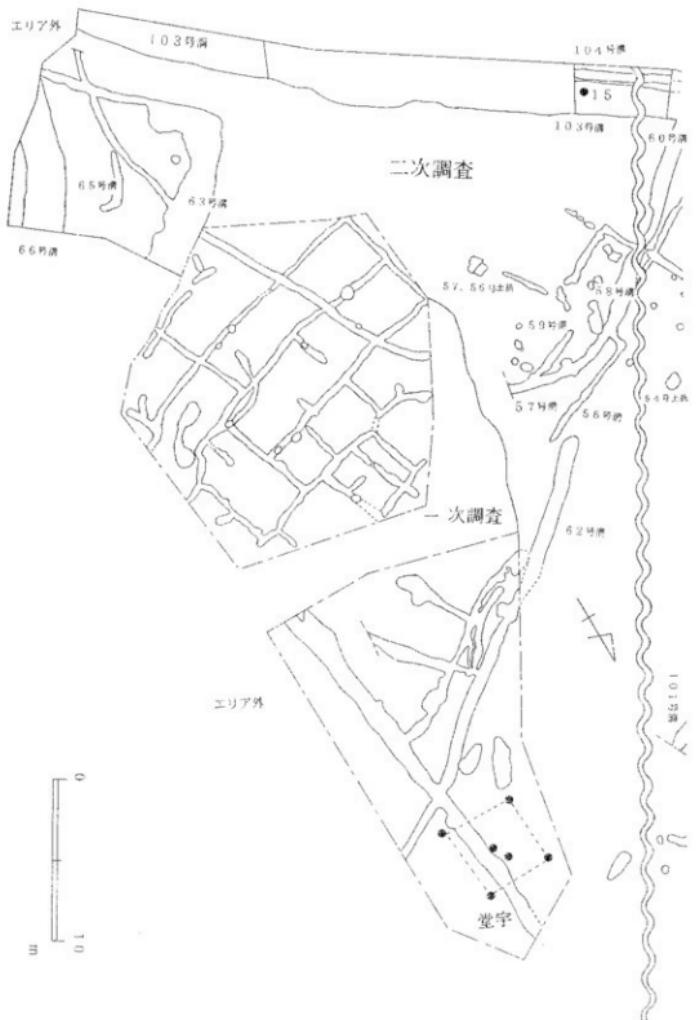
やや遅れて次に堂宇が建立された時期の1号掘建遺構、5号掘建遺構、7号掘建遺構があり集落の拡大期と推察され2間4面のお堂の建立を見た。それは集落の北端、環状に巡る溝を埋め、根石に「無量三部經」を墨書きした時期で、出土した坏から10世紀。

その後「畠」が作られた時期に3、4、6、8号掘建遺構が建てられ周辺にはソバ畠が広がり居宅が点在、小さいながら隣接し生活を営み、仏教の盛んな村の一時期が推察される。

畠の排水の溝から出土した坏は11世紀で、その時期に本集落が自然災害に巻き込まれ、冠水により壊滅した。多くの土坑、溝、ピット覆土には砂泥層、砂泥が認められこれらが裏づけられる。そして多くの「柱」の上部の折れ目は割れ、尖る。前述の状態から大風による倒壊、洪水により村落は消滅したと推察する。

これらの家屋の用材、柱は栗、カシ、コナラ、クス、杉、松等認められ、ピット下端には土器の欠片、石等が根石として据えられるものも見られる。又桜等の木材も見られた。

用材、ソバ栽培等から本地域が現在より若干寒冷の地であった事が裏づけられる。しかし稻の花粉もかなり多量に検出されている事から水田、稻作が盛んに行なわれていたことも事実で有り、水田はより低い地区に存在していたと思われる。



第47図 遺構位置図

2 土坑と溝

多くの土坑が検出された。時期が特定できる遺構は少なく一部は掘建遺構であった。プラン的には円形、溝状と分かれるが調査区北側には古墳時代の遺物を含むものも見られ、一部は高床、掘建遺構に付随する遺構が含まれる。

その他他の「下駄」の一部を出土している25号土坑の円形、掘り込みは半円形と言う掘り込みも見られた。覆土はレンズ状の埋積を示し、砂泥層が顕著に見られる。又4号土坑のように投げ込み的上層をもつものも見られる。

ピットを含め多くの遺構は砂泥層、砂泥を含み冠水状態の廃棄が見られるがそれ程壁面の崩壊は進行せず短時間のうちに埋没している。『シルト層のため時間が立てば崩壊が進行し覆土にもシルト層が混入する』崩壊進行は1割り前後であった。

溝は大きく分けると調査区西側と東西に直線的に伸びる103、104、105号と中央部100、101号の台形状の掘り込みがある。そのほか北側隅に見られた環状の溝、調査区東南側全体に広がる『溝』が検出された。

103号、104号、105号は底部の締まり、遺物等から古墳時代から奈良、平安時代にかけて利用されたものと推察する。100号、101号は掘り込みプラン、切り合い関係から遺跡廃絶、放棄された後に造られたものと推察する。

遺跡東南に広がる『溝』そのプラン、造り方から宅地と畠地の排水のものと推察する。16、17号溝は遺物から奈良時代末の遺構で同様の性格を持つと理解する。周辺の土坑群も同様か。

最後は本遺跡の終末については、遺構の覆土状態から水没し放棄したと推定するが、それは遺存木材の状態から大風に因る倒壊、洪水による冠水、倒壊の家屋からの回収が行なわれ、その結果底部に砂泥層、砂泥を持つピット群が見られた。

放棄した鎌倉時代末12世紀後半以前の集落周囲に、子孫は烟を作り、匂い、堂宇の上に常滑の三筋甌を利用して藏骨甌を埋葬した。多少の変化はあっても、そのまま今日に至っている。

本遺跡周辺は江戸時代末に新田開発が始まるまでは荒地の可能性が高い。旧街道は遺跡東側50mを迂回し小川町、石岡市府中に続く。三昧塚の山を見ながら。

行方郡の『草戸千軒』と私考し、その大半は南側の沖積地の下に今も生きていると推察される。それは沖州地区の下も含めて。そして三昧塚古墳の東側には周堤は存在せず103～105号溝が出土遺物から、当時の墓域との「境」として意識して造られたものか、とも推察される。本遺跡の溝は三昧塚古墳の周濠中に伸びていることは事実であることからも。

本遺跡の持つ意味、意義は大きい。今後霞ヶ浦徹高地の開発事業については細心の注意が必要と考える。それを明確にした遺跡である。

参考文献

- 明治大学 1995 『三昧塚古墳発掘調査報告書』
玉造町史編纂委員会 1985 『玉造町史』
鹿島町教育委員会 1983 『鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅰ、Ⅲ』



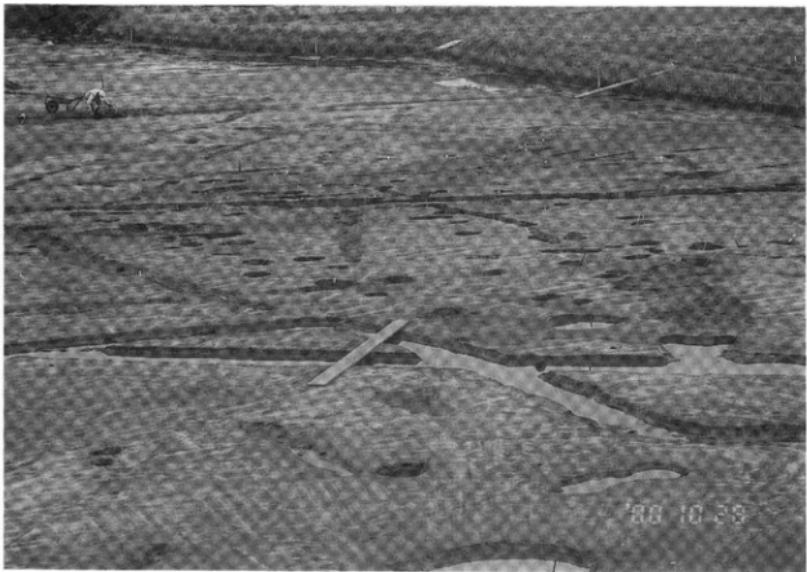
調査前の全景（南側から）鎌田川と小川町の台地を望む



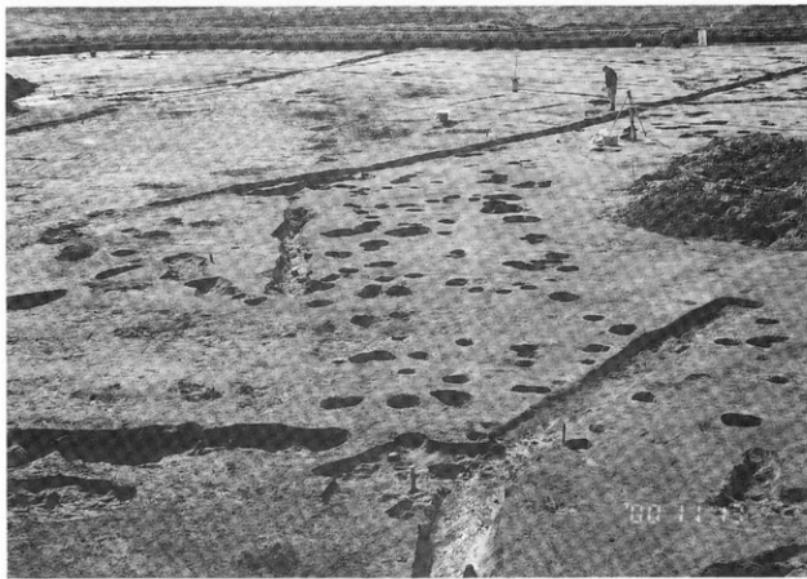
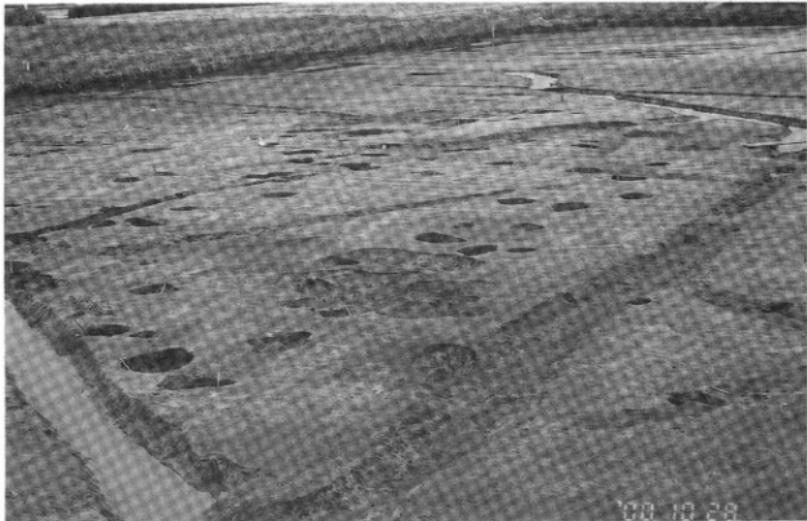
調査区北隅と三昧塚古墳、沖積地と霞ヶ浦の高浜入り



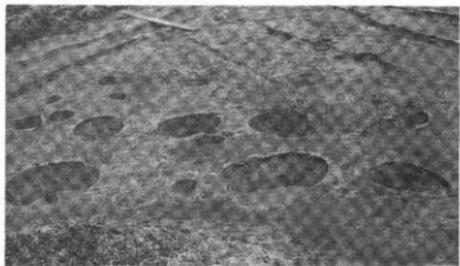
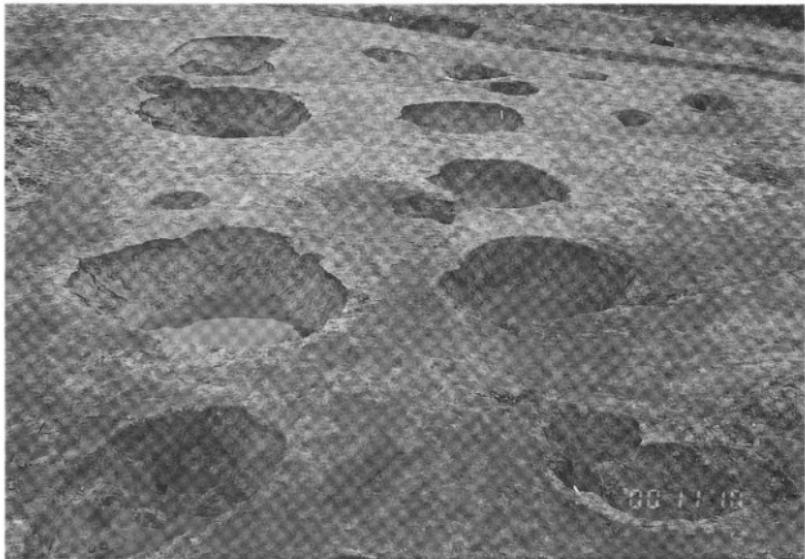
三昧塚と中央部の柱穴群、溝



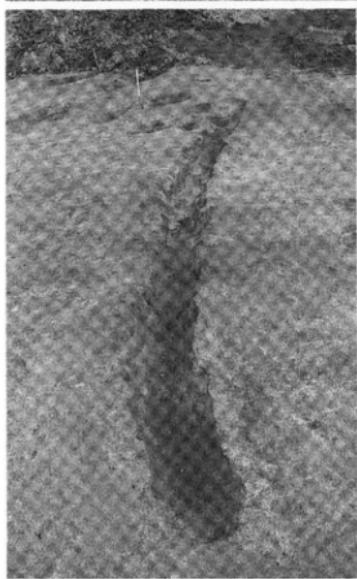
調査区東北部の柱穴群と溝



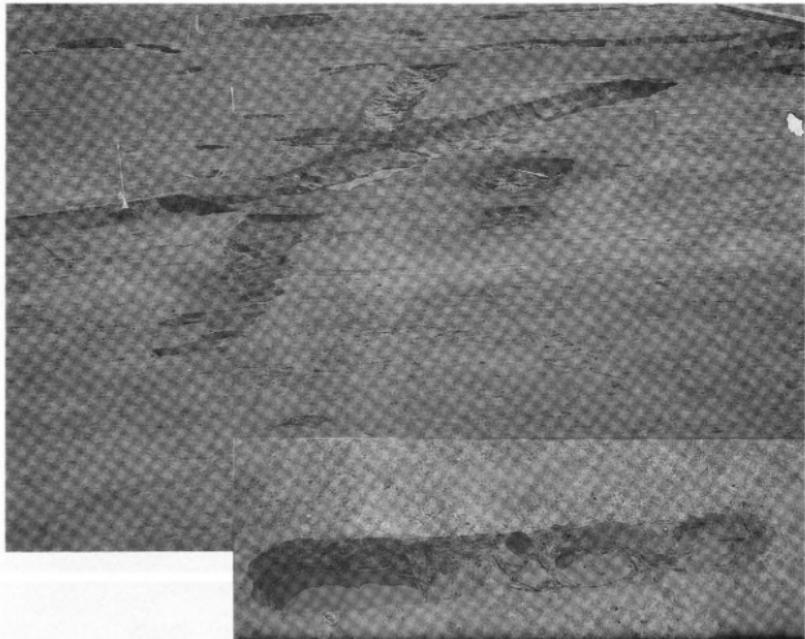
中央部の柱穴群、溝、1, 2, 5, 6据立遺構柱穴群、46, 101号溝



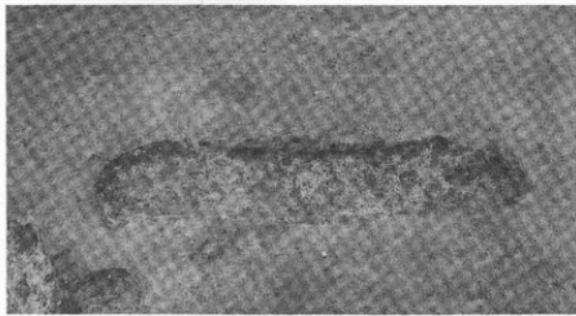
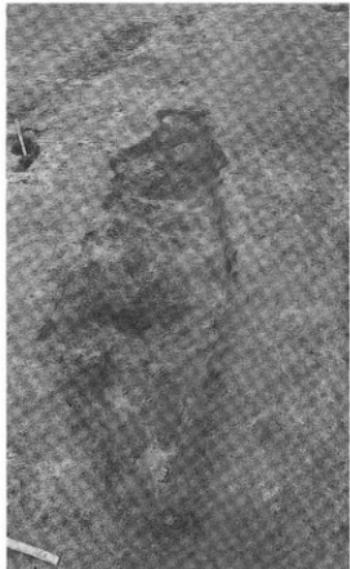
9 堀立遺構柱穴群（北西、東、西北側から）



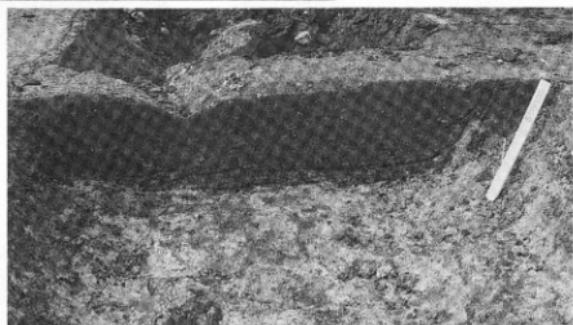
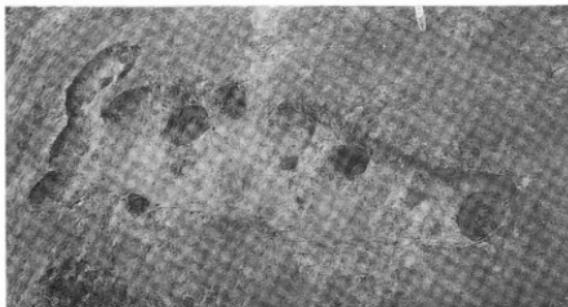
1, 2, 4, 5溝完掘状態



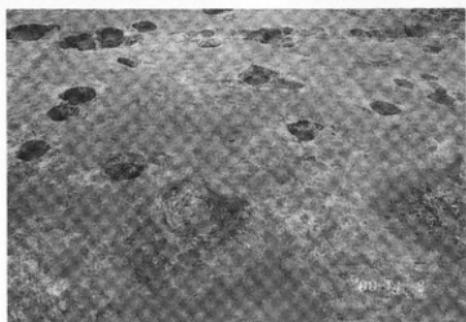
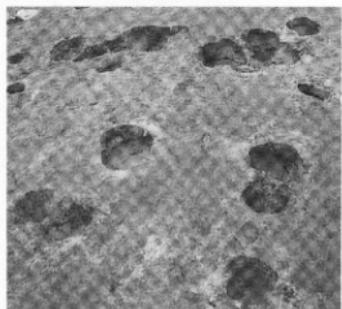
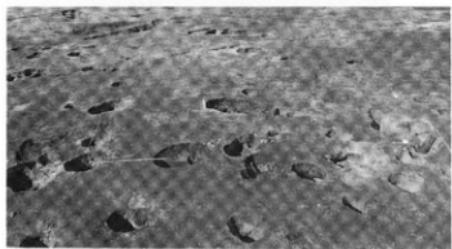
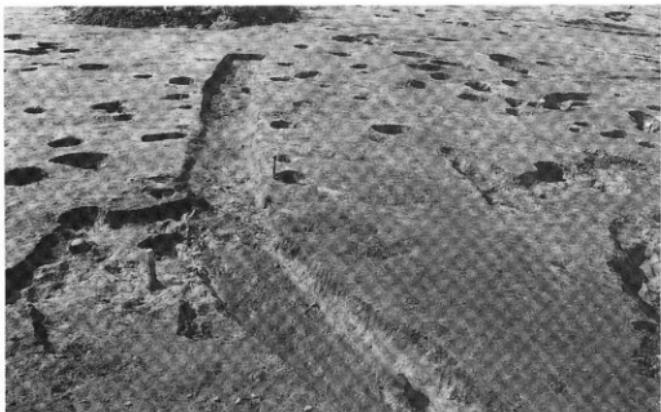
10, 11, 100号溝、16, 13, 32号溝完掘



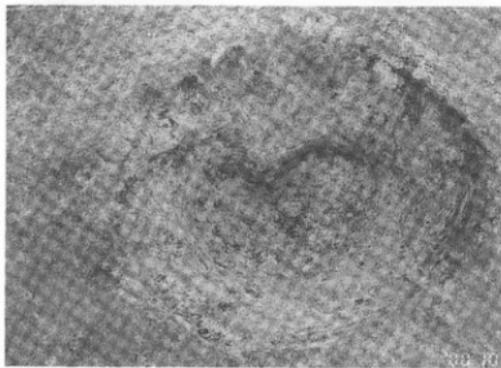
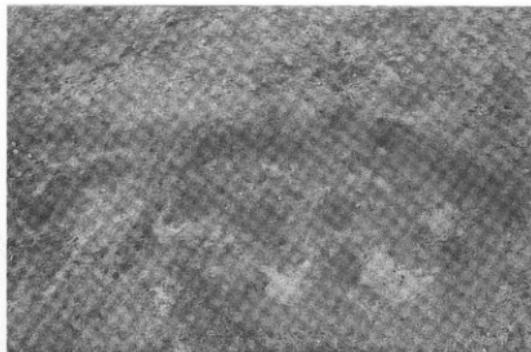
6号、17、16、19号，斐出土状态、28号满完据



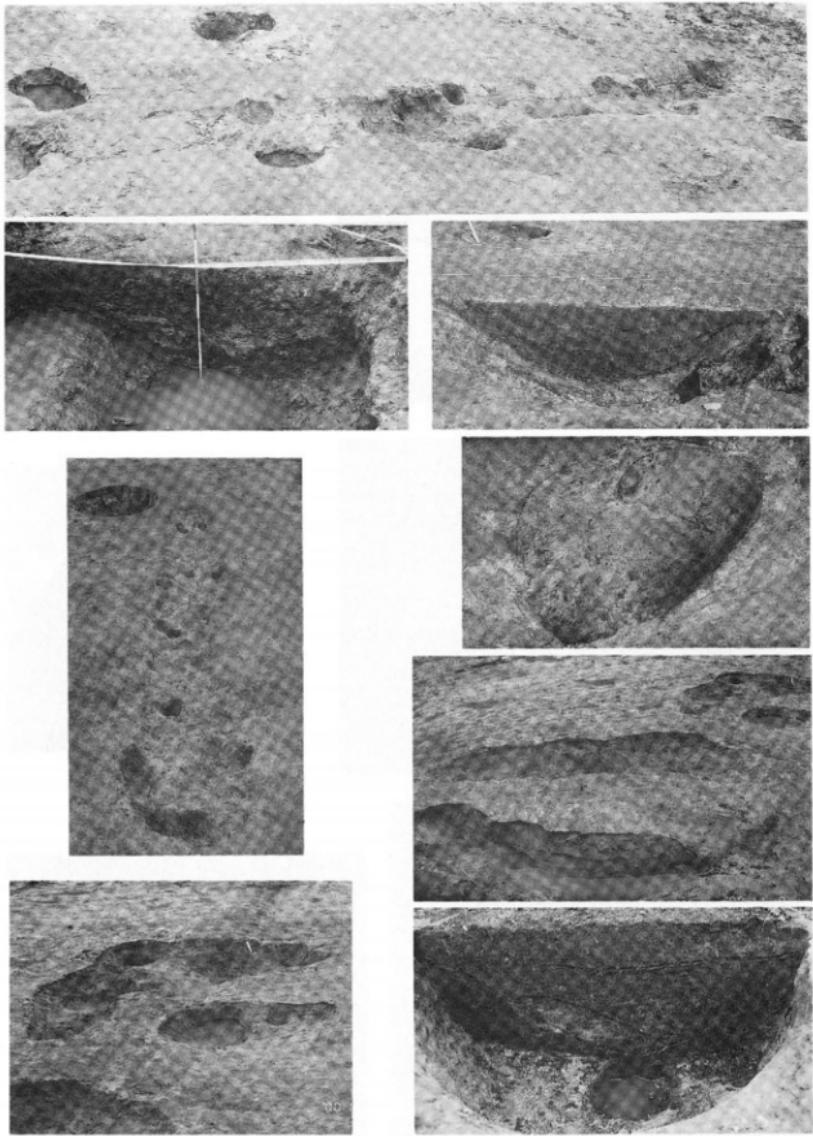
1, 2号掘立遺構、104, 101、八角形の柱が出土した右手前ピット群



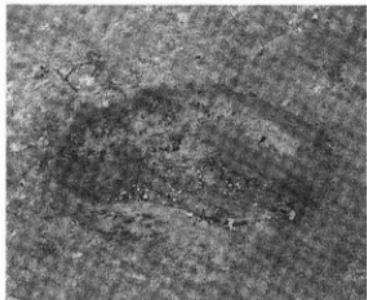
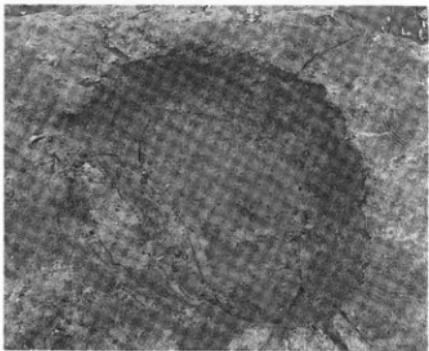
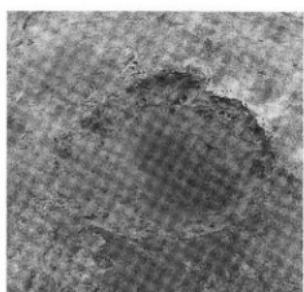
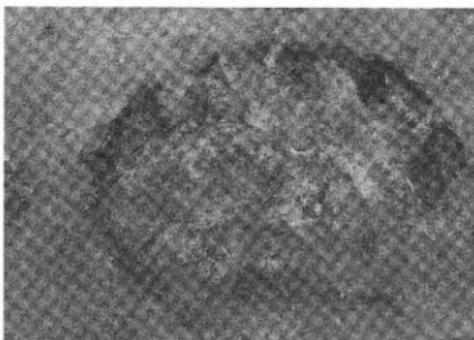
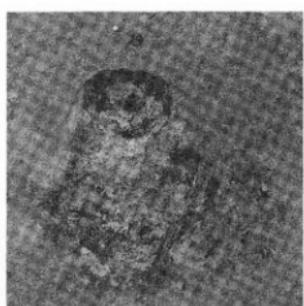
7, 8号掘立遺構、100, 101号土抗完掘、7, 8号掘立遺構ピット群



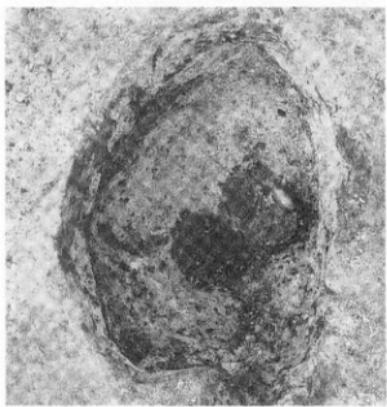
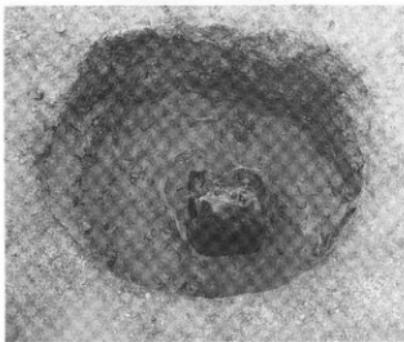
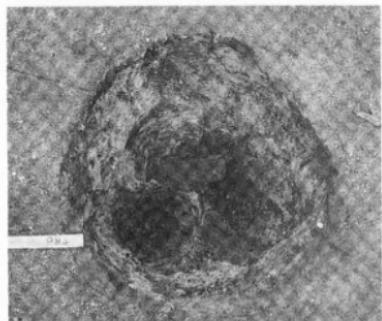
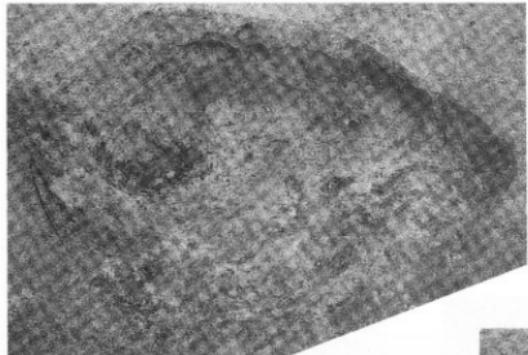
6, 13, 31, 22号土坑完掘状態



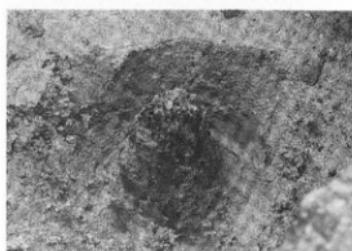
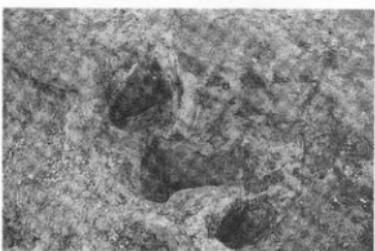
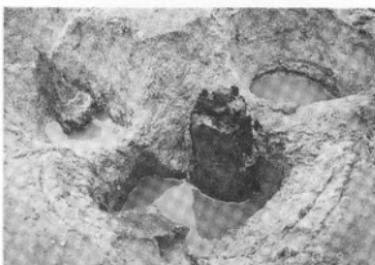
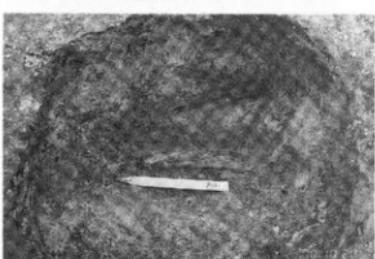
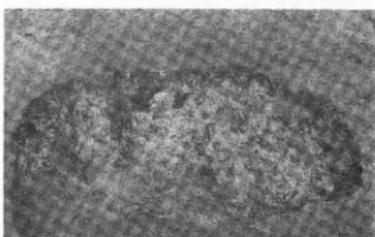
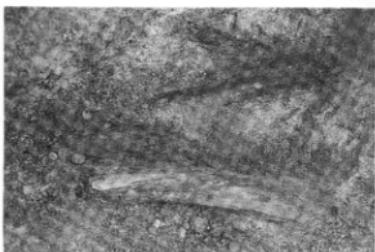
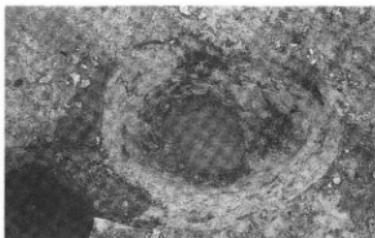
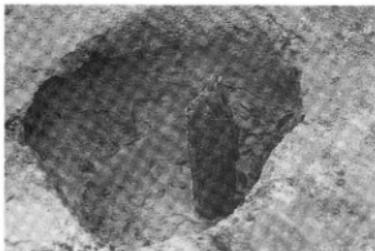
28号溝、8号土坑土層、12号溝、30, 30号土坑完掘、19号土坑
土層、27, 28, 29号土坑完掘



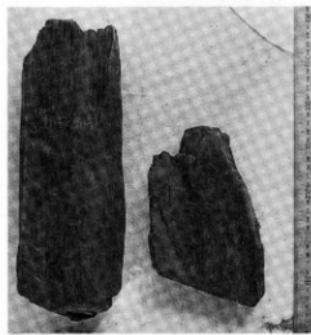
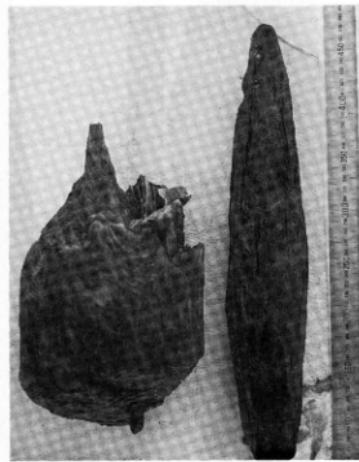
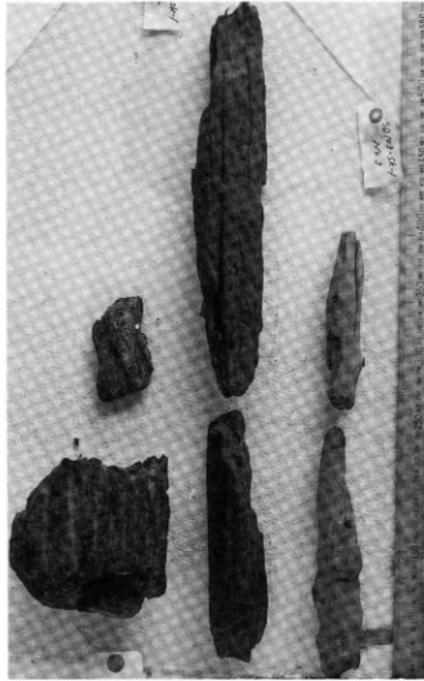
15, 32, 41, 27, 37, 43号ピット完掘



35, 83, 66, 92, 73号ピット柱、根太出土状態



92, 151, 152, 176, 239, 000, 229号ピット柱出土状態



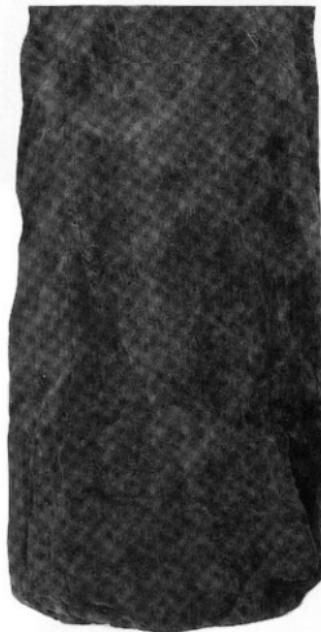
SD-1, 100, SK-1, 61, 85



P73



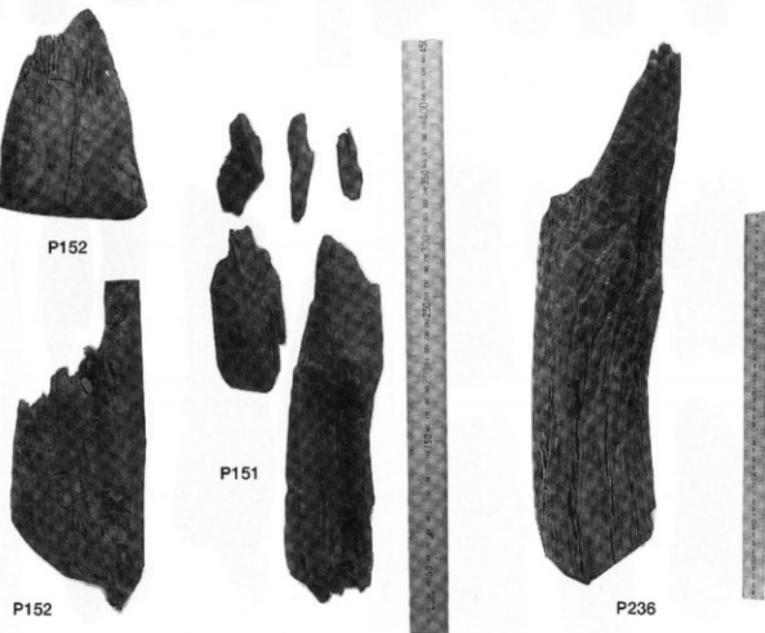
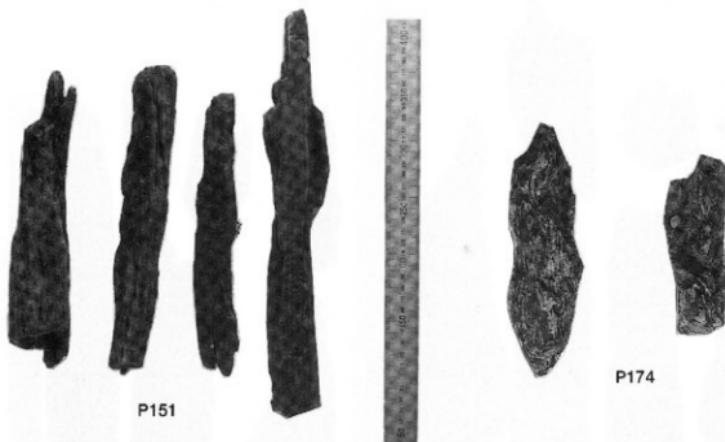
P92



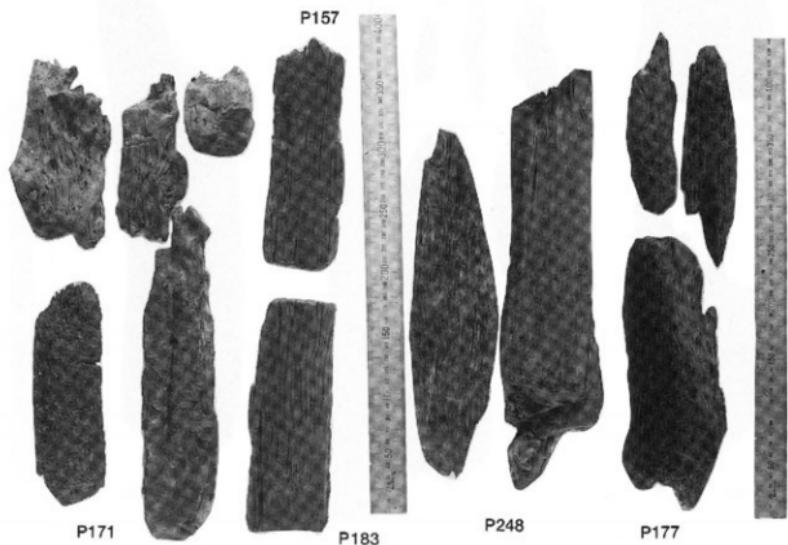
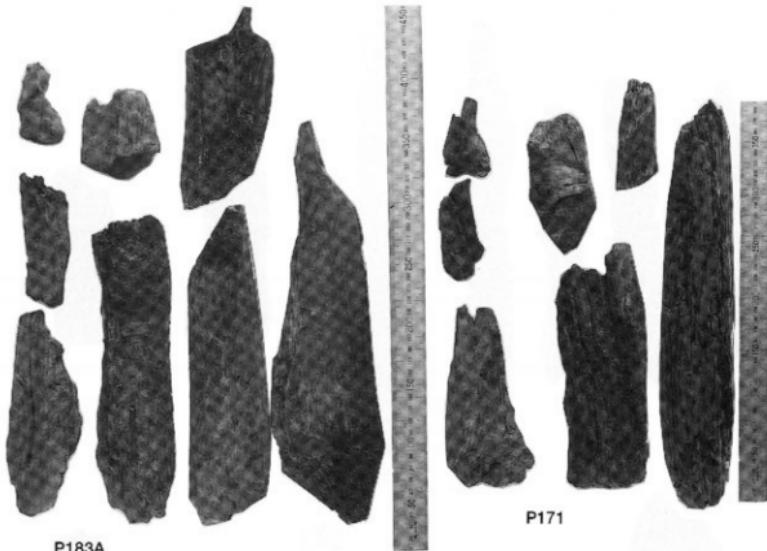
P165



P157



P-151, 152, 174, 236



P-138A, 171, 183, 243, 177



P189



P243 (SD中)



P243



P239



P196



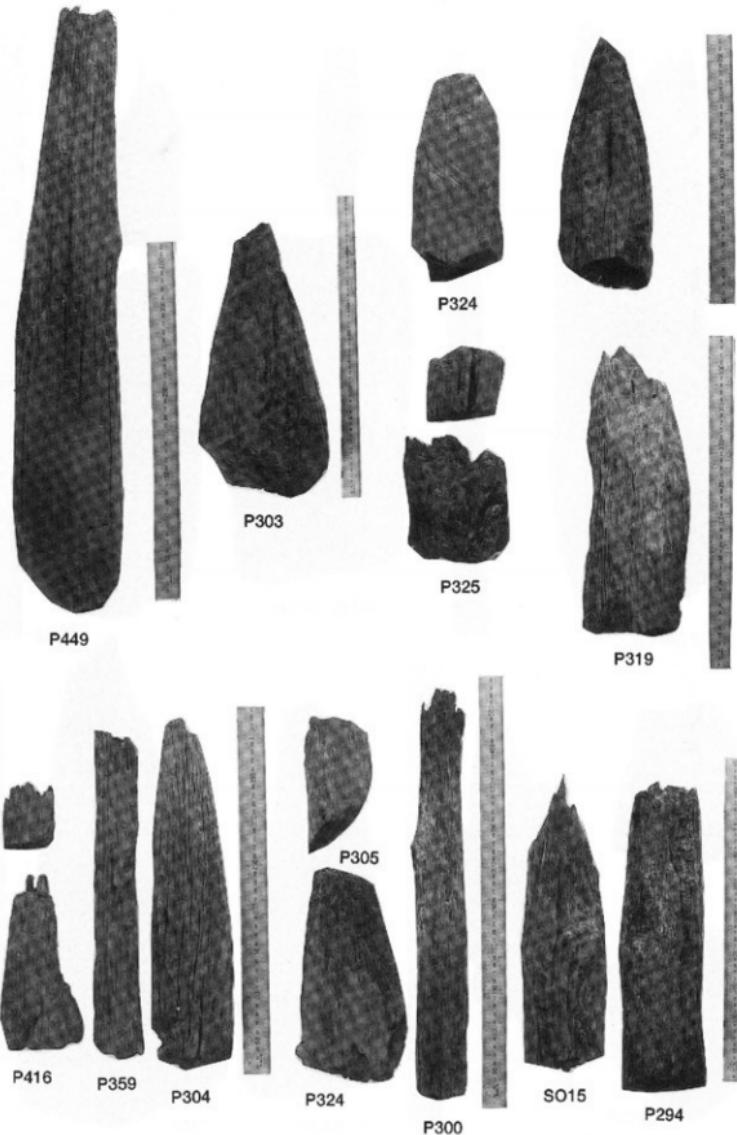
P330



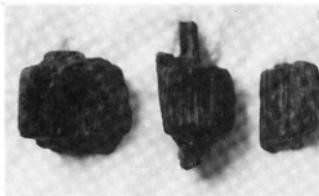
P310



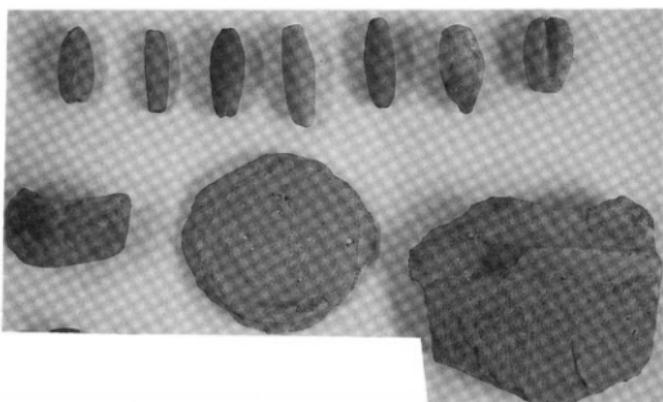
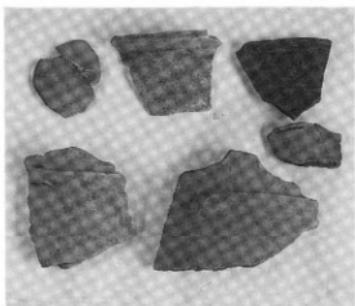
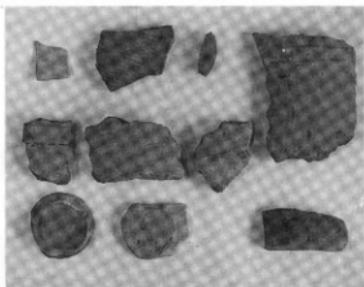
P-189, 239, 227, 196, 243, 329, 330, 310



P-449, 303, 325, 319, 416, 359, 304, 305, 324, 294, SD-15



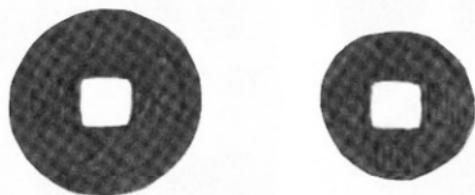
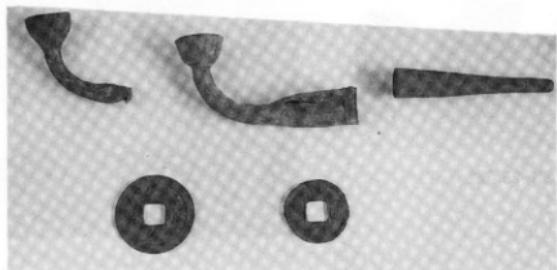
SK-25下駄



(上) SK-25下駄、SD-46, 100, 103, 46, 10

(中) SD-39, 17, 36, P-273, 39

(下) P-73, 384, 156, SD-103, 表探



グリット表採（上、下）

第 3 部

八 重 橋 遺 跡

自 然 科 学 分 析 報 告

バリノサーヴェイ株式会社

第3部 目 次

目次

はじめに

図表・図版目次

1. 試料

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

(2) 花粉分析

(3) 植物珪酸体分析

(4) 樹種同定

3. 結果

(1) 珪藻分析

(2) 花粉分析

(3) 植物珪酸体分析

(4) 樹種同定

4. 考察

(1) 溝の埋積過程

(2) 周辺植生

(3) 用材

引用文献

図表・図版目次

図 1 主要珪藻化石群集の層面分布

図 2 主要花粉化石群集の層面分布

図 3 植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状

表 1 分析試料の一覧

表 2 珪素分析結果

表 3 花粉分析結果

表 4 植物珪酸体分析結果

表 5 樹種同定結果

図版 1 珪藻化石 (1)

図版 2 珪藻化石 (2)

図版 3 花粉化石 (1)

図版 4 花粉化石 (2)

図版 5 植物珪酸体

図版 6 木材 (1)

図版 7 木材 (2)

はじめに

本遺跡は霞ヶ浦北岸、行方台地が鎌田川によって開拓される谷の戸口の沖積低地に位置する。これまでの発掘調査により、古代から中世とみられる溝・集石・土坑などの遺構や壙などの遺物が検出されている。

今回の分析調査では、遺跡周辺の古環境復元を目的として、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定を実施する。

1. 試料

土壤試料は、第1遺跡の溝埋積物から4点、第2遺跡の溝埋積物・土坑埋積物・集石下土壤から4点、第4遺跡の土坑埋積物から1点、合計9点が採取された。この内、第1遺跡と第2遺跡の溝埋積物から採取された計6点について、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。

また、第2遺跡から出土した木材2点（試料名：2-1・2-2）、第4遺跡から出土した木材4点（試料名：4-1～4-4）、第1遺跡と第2遺跡の間に設定されたトレンチから出土した木材1点、合計7点について樹種同定を行う。表1に分析試料の一覧を示す。

表1 分析試料の一覧

地点	試料名	試料の質	分析項目				備考
			D	P	P0	W	
第1遺跡	SD2-1 黒色シルト質砂	○	○	○	○	○	植物遺体、繊維を含む
	SD5-1 黒色シルト質砂	○	○	○	○	○	植物遺体を含む
	SD6-1 黒色シルト質砂	○	○	○	○	○	植物遺体を含む
	SD8-1 黒色シルト質砂	○	○	○	○	○	植物遺体、繊維を含む
第1と第2遺跡との間のトレンチ	木片 木材					○	
	SD1-1 黒色シルト質砂	○	○	○	○	○	植物遺体を含む
第2遺跡	SD5-1 黒色シルト質砂	○	○	○	○	○	植物遺体を含む
	2-1 木材					○	木柱
	2-2 木材					○	木柱
	4-1 木材					○	木柱
第4遺跡	4-2 木材					○	木柱
	4-3 木材					○	木柱
	4-4 木材					○	木柱

凡例 D: 珪藻分析 P: 花粉分析 P0: 植物珪酸体分析 W: 樹種同定

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査して、珪藻殻が半分以上残存するものを200個体以上同定・計数する。種の同定は、K. Krammer (1992)、K. Krammer and Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2%以上の主要な種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮する。堆積環境の解析にあたり淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については Asai, K. & Watanabe, T. (1995)、生活型などについては VOS, P.C. & DE WOLF, H. (1993) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料を溼重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸=9:1）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 植物珪酸体分析

試料を溼重約5g秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250kHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。これを400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）、および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出される種類とその個数の一覧表と植物珪酸体群集の層位分布図で表示する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(4) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合

液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表2、図1に示す。第1遺跡・第2遺跡とも珪藻化石が産出する。完形殻の出現率は、両遺跡とも40%前後であり、化石の保存が悪い。両遺跡とも水域に生育する水生珪藻と陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻とが、高い割合で混在する。産出分類群数は、23属137種類である。

第1遺跡における主な珪藻化石の産状は、SD2-1・SD5-1・SD6-1とSD8-1で若干異なる。SD2-1・SD5-1・SD6-1では、貧塩不定性種（少量の塩分であれば耐えられる種）、真+好アルカリ性種（アルカリ性の水域に生育する種）、流水不定性種（流水にも止水にも生育する種）が優占する。また、一般水域に生育する水生珪藻の他に、陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻も多産する。産出種の特徴は、汽水域～淡水域まで生育し塩分に対する適応性の広い広域塩性種の*Rhopalodia gibberula*、流水不定性の*Diploneis ovalis*が多産し、好流水性の*Navicula elginensis* var. *neglecta*、*Gomphonema parvulum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Pinnularia viridis*などを伴う。また、分布が陸域にほぼ限られる耐乾性の高い陸生珪藻A群（伊藤・堀内、1991）の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*などが、5～10%産出する。これに対してSD8-1は、他の試料と同様な種類が検出されるが、広域塩性種の*Rhopalodia gibberula*の産出が少ない。

第2遺跡のSD1-1・SD5-1で出現する珪藻化石の特徴は、第1遺跡のSD2-1・SD5-1・SD6-1に近似しており、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種が優占し、陸生珪藻も伴う。主に出現する種は、広域塩性種の*Rhopalodia gibberula*、流水不定性の*Diploneis ovalis*、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*などである。



図1 主要珪藻化石群集の層位分布

淡水～淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基數、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基數として百分率で算出した。なび、●は2%未満の試料について検出した種類を示す。

(2) 花粉分析

結果を表3、図2に示す。

第1遺跡SD2-1・SD5-1・SD6-

1、第2遺跡SD5-1から採取された4試料では、花粉化石がほとんど検出されない。わずかに検出される化石も保存状態が極めて悪い。第1遺跡SD8および第2遺跡SD1では保存状態が悪いものの、花粉化石が検出される。これら2試料の花粉化石群集は若干異なる。

第1遺跡のSD8-1ではマツ

属・コナラ属アガシ亜属が多産し、スギ属・クマシデ属一アサダ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属シノキ属・ブドウ属を伴う。草本花粉・シダ類胞子では、シダ類胞子が多産し、特に総花粉・胞子数に対して約50%占める。この他はイネ科が多産し、ガマ属・サジオモダカ属・オモダカ属・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・ソバ属・ヨモギ属・サンショウモなどが検出される。

第2遺跡のSD1-1ではアカガシ亜属が多産し、モミ属・マツ属・ニレ属一ケヤキ属などを伴う。草本花粉・シダ類胞子では、シダ類胞子が総花粉・胞子数に対して約50%占

表3 花粉分析結果

種類	試料番号	第1遺跡				第2遺跡	
		SD2 1	SD5 1	SD6 1	SD8 1	SD1 1	SD5 1
木本花粉		-	-	-	3	-	-
マキ属		-	-	-	-	-	-
モミ属	4	2	3	7	39	-	-
ツガ属	2	-	2	10	12	-	-
トウヒ属	-	-	-	6	2	-	-
マツ属	6	6	8	34	35	4	-
コウヤマキ属	-	-	-	3	-	-	-
スギ属	-	-	-	19	4	-	-
イチイ科一スガヤ科一ヒノキ科	-	-	-	-	1	-	-
ヤナギ属	-	-	-	2	-	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	1	-	-	-
サワグルミ属	-	-	-	1	1	-	-
クマシデ属一アサダ属	-	-	-	12	9	-	-
カバノキ属	-	1	-	4	-	-	-
ハンノキ属	-	-	1	6	4	-	-
ブナ属	-	-	-	9	8	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	5	15	8	1	-
コナラ属アガシ亜属	2	3	6	26	56	1	-
クリ属シノキ属	-	-	-	4	4	-	-
ニレ属一ケヤキ属	-	-	-	10	17	-	-
シラキ属	-	-	1	1	-	-	-
ツゲ属	-	-	-	1	-	-	-
カエデ属	-	-	-	1	-	-	-
ブドウ属	-	-	-	4	1	-	-
草本花粉		-	-	-	6	1	-
ガマ属		-	-	-	1	-	-
ヒルムシロ属近似種		-	-	-	3	-	-
サジオモダカ属		-	-	-	6	-	-
オモダカ属	17	15	30	447	262	5	-
イネ科	3	-	1	122	35	-	-
カヤツリグサ科	1	-	-	2	-	-	-
ミズアオイ属	-	-	-	2	-	-	-
クワ科	-	-	-	2	-	-	-
ナナエタデ節一ウナギツカミ節	-	-	2	9	4	2	-
タデ属	-	-	-	-	1	-	-
ブナ属	-	-	-	2	-	-	-
アカザ科	-	-	-	10	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	5	-	-	-
キンポウゲ科	-	-	-	-	3	-	-
タケニグサ属	-	-	-	1	-	-	-
アラナ科	-	-	-	14	-	-	-
ワレモコウ属	-	-	-	-	1	-	-
バラ科	-	1	-	1	2	-	-
メメ科	-	-	-	4	2	-	-
ミツハギ属	-	-	-	2	1	-	-
アリノトウグサ属	-	-	-	-	71	-	-
セリ科	-	-	-	-	6	-	-
オミナエシ属	-	-	-	7	1	-	-
ヨモギ属	2	2	11	170	71	-	-
オオモミ属	-	-	-	2	-	-	-
キク科	5	1	10	24	76	1	-
タンポポ科	2	2	1	27	212	12	-
下明花粉	-	-	-	12	11	-	-
シダ類胞子	-	-	-	-	-	-	-
ミズワラビ属	7	-	-	-	-	-	-
サンショウモ	-	-	-	1	1	-	-
ミズニラ属近似種	-	-	-	12	-	-	-
他のシダ類胞子	265	72	294	1027	1004	55	-
合計							-
木本花粉	14	12	26	179	192	6	-
草本花粉	30	21	55	869	751	20	-
不明花粉	0	0	0	12	11	0	-
シダ類胞子	272	72	294	1040	1005	55	-
总计(不明を除く)	316	105	375	2088	1948	81	-

めており、最も高率に出現する。この他ではイネ科が多産し、ガマ属・カヤツリグサ科・アリノトウグサ属・ヨモギ属・タンボボ亜科・サンショウウモなどが検出される。

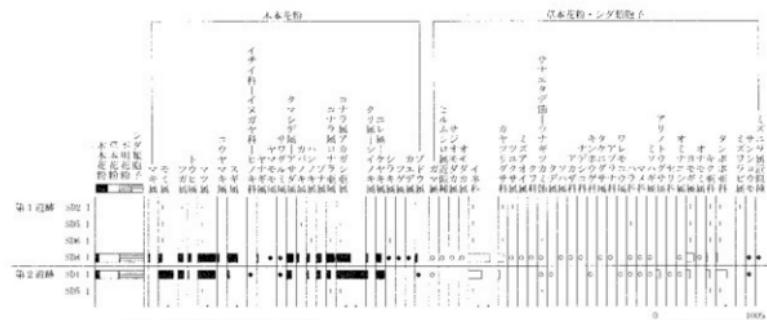


図2 小要花粉化石群の層位分布

出現率は、木本花粉は木本化石總数、草本花粉・シダ類胞子は總数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表4、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

第1遺跡のSD2-1・SD5-1・SD6-1・SD8-1の産状はほぼ同様であり、ウシクサ族の産出が目立ち、キビ族、タケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亞科などが認められる。また、栽培植物のイネ属も検出される。

第2遺跡のSD1-1・SD5-1の産状も第1遺跡の溝埋植物と同様

表4 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	第1遺跡				第2遺跡		
		SD2 1	SD5 1	SD6 1	SD8 1	SD1 1	SD5 1	
イネ科葉部短細胞壁酸体								
イネ族イネ属		19	-	17	12	-	-	-
キビ族チゴザサ属		1	8	1	2	2	3	
タケ亜科		53	52	53	39	43	30	
ヨシ属		63	139	69	65	94	65	
ウシクサ族コブナグサ属		15	27	20	22	19	6	
ウシクサ族ススキ属		137	219	216	134	258	185	
イチゴツナギ亞科		19	9	16	19	17	14	
不明キビ型		64	41	19	26	30	26	
不明ヒゲンバ型		8	22	13	12	22	15	
不明ダンチク型		45	32	23	15	20	16	36
イネ科葉部短細胞壁酸体								
イネ族イネ属		8	1	4	5	1	-	-
タケ亜科		44	39	43	30	31	17	
ヨシ属		7	10	5	3	3	10	
ウシクサ族		61	64	50	58	56	62	
シバ属		-	-	1	-	-	-	-
不明		26	11	11	10	16	19	
合計		424	549	447	346	505	374	
イネ科葉部短細胞壁酸体		146	125	114	107	107	108	
総計		570	674	561	453	612	482	
種類								
イネ属細胞壁酸体		1	-	-	2	-	-	-
イネ属短細胞列		1	-	5	1	-	-	-

であり、ウシクサ族の産出が目立ち、キビ族・タケ亜科・ヨシ属・イチゴツナギ亞科などが認められる。また、SD1-1では、栽培植物のイネ属がわずかに検出される。

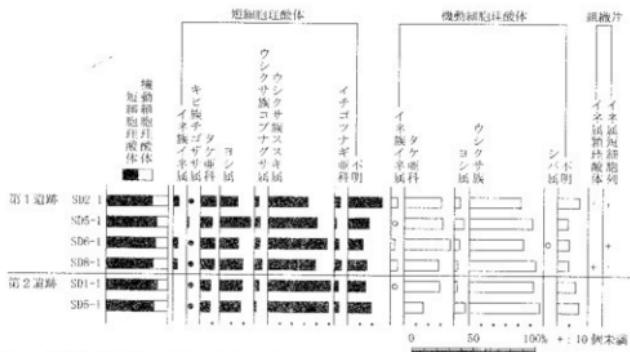


図3 植物杜アル群集の局所分布と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞束状体、イネ科葉身機動細胞束状体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により○の記号で示す。

(4) 樹種同定

結果を表5に示す。木材は、針葉樹1種類（カヤ）と、広葉樹材5種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・スダジイ・タブノキ属・クスノキ科）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

- カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型へヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

- コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

- クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

表5 樹種同定結果

地点	試料名	用途など	樹種
第1と第2遺跡との間のトレンチ	木片	カヤ	
第2遺跡	2-1	木柱	タブノキ属
	2-2	木柱	クリ
第4遺跡	4-1	木柱	クリ
	4-2	木柱	クスノキ科
	4-3	木柱	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	4-4	木柱	スダジイ

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属
環孔性放射孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～20細胞高。

・タブノキ属 (*Persea*) クスノキ科

散孔材で、管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2～3個が放射方向に複合する。道管は單および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独まれに2～3個が放射方向に複合する。道管は單穿孔または階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

4. 考察

(1) 溝の埋積過程

第1遺跡では、SD2-1・SD5-1・SD6-1とSD8-1で珪藻化石群集に若干の違いがみられた。前者では、塩類の集積し易い場所に多産する広域塩性種の *Rhopalodia gibberula* が多産し、真+好アルカリ性種・流水不定性種が優占し、陸生珪藻も多産する。これより、SD2・SD5・SD6は、塩類濃度が高く弱アルカリ性の水が存在しており、周囲の様々な場所の土壤が流れ込むことにより埋積したと考えられる。これに対して後者のSD8-1は、広域塩性種の *Rhopalodia gibberula* がほとんど検出されない。したがって、SD8は、SD2・SD5・SD6と同様な堆積環境で埋積が進んだと考えられるが、他の溝と比較して塩類の集積が少なかったと推測される。

一方、第2遺跡のSD1-1・SD5-1における珪藻化石の産状は、第1遺跡のSD2-1・SD5-1・SD6-1と類似する。よって、これらの溝も塩類濃度が高く弱アルカリ性の水域が存在しており、周囲の様々な場所の土壤が流れ込むことにより埋積したと考えられる。

ところで、第1遺跡のSD8と他の溝では珪藻化石群集に若干の違いがみられ、塩類濃度が異なっていたと考えられた。また、植物珪酸体の産状に注目すると、第1遺跡でイネ属珪酸体が検出されるが、第2遺跡でイネ属珪酸体がほとんど検出されない。したがって、第1遺跡の溝は、その内部に稻作耕土が流れ込んでいたと考えられ、稻作に関連する施設であった可能性もある。すなわち、両地点では溝の用途・機能が異なっていた可能性がある。今後これらの溝に対して、より平面的な調査を実施して情報を蓄積し、発掘調査所見を含めて改めて検討していきたい。

(2) 周辺植生

溝の埋積物からは、シダ類胞子が多産し、また検出される花粉化石も保存状態が悪い。一般的

に広葉樹に由来する花粉より、シダ類胞子や針葉樹に由来する花粉の方が、分解に対して抵抗性があるとされている（例えば、徳永・山内、1971）。このことを考慮すると、今回得られた花粉化石群集組成は、歪曲している可能性がある。ただし、検出される針葉樹のモミ属・マツ属・スギ属、広葉樹のクマシデ属ーアサダ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・ニレ属ーケヤキ属などの花粉化石は、当時周辺に生育していた母植物に由来すると考えられる。検出される種類の中で、アカガシ亜属が暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素である。これまで関東平野で行われた調査によると、縄文時代後期～晩期の層準からアカガシ亜属とスギ属の花粉化石が増加し、ナラ類に混じってカシ類やスギが分布・拡大したとされている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1988, 1989；辻、1988；辻・橋屋、1987；辻ほか、1983など）。また、構築材と考えられている木材は、常緑広葉樹のスダジイ・タブノキ属、落葉広葉樹のコナラ節やクリが検出されている。杭などの構築材に用いられる木材は、これまでの調査結果から遺跡周辺の古植生を反映することが指摘されている（高橋・植木、1994）。この他、第1と第2遺跡の間のトレンチから出土した木片は用途などの詳細が不明であるが、暖温帯常緑広葉樹とともに生育する針葉樹のカヤであった。以上のことから、当時、周辺は暖温帯に属しており、上述した植物群から構成される暖温帯林が存在していた可能性がある。

ただし、木本花粉の出現率が低率であることから、遺跡付近に森林が迫っていたとは考えにくい。むしろ本遺跡の周辺は、スキ属を含むウシクサ族、キビ族、タケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科をはじめとして、カヤツリグサ科・アリノトウグサ属・ヨモギ属・キク亜科・タンボボ亜科などの草本類が繁茂する、開けた草地のような状態であったと思われる。このような開けた場所では、第1遺跡の溝埋植物から栽培植物のイネ属珪酸体や畑作植物のソバ属花粉が検出されることから、畑作やソバ栽培などの畑作が行われていたと考えられる。また、溝の内部あるいはその周辺には、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ヨシ属、ミズアオイ属、サンショウウモなどの水生植物が生育していたと考えられる。隣接する三昧塚古墳の分析調査結果によると、周塙が構築された直後に、周塙内にガマ属、ヨシ属などの水湿地性植物、塙の周辺にはキビ族、タケ亜科、ウシクサ族などのイネ科植物が生育していたと推定した。また、栽培種であるイネ属型花粉の検出から、古墳の周辺あるいは鎌田川の上流域などで畑作が行われていた可能性があると指摘した（パリノ・サーヴェイ株式会社、1995）。今回検出された各遺構が、三昧塚古墳とのような関係にあったかについては、今後整理工業が進展しそれらの時代観が絞られた段階で、改めて検討を加えたい。

（3）用材

第2遺跡と第4遺跡から出土した木材は、いずれも柱穴から出土しており、杭か木柱の一部が残存したものと考えられている。樹種はいずれも広葉樹材で、ブナ科の木材が多い。これらの木材は、強度や耐朽性に優れた材質を有する種類が多く、利用環境に適した材質の木材を選択して

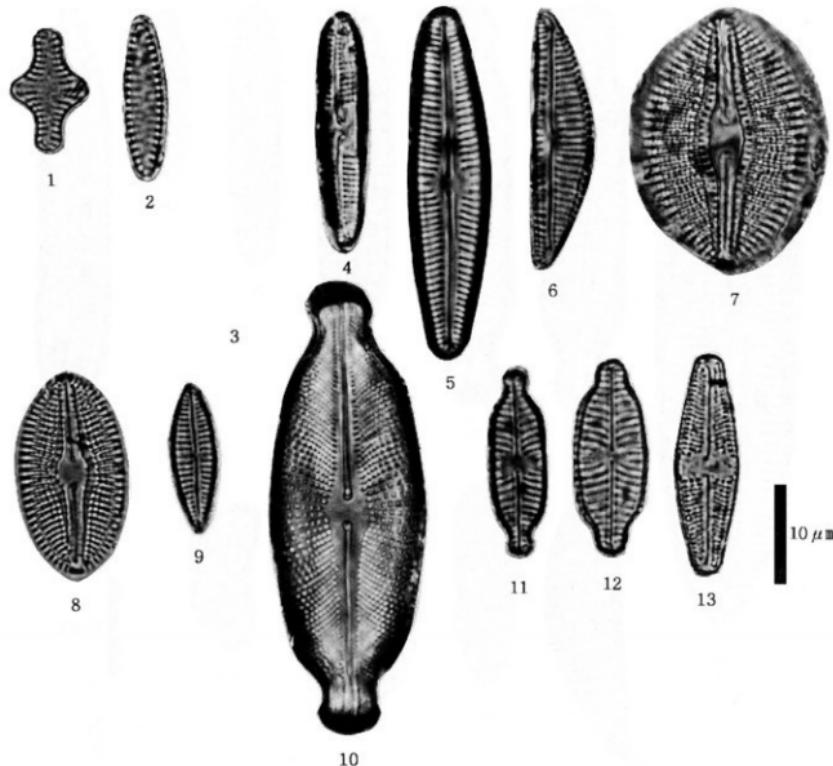
いたことがうかがえる。このうち、クリやコナラ節は、堅穴住居の構築材にも多く確認されている種類である（千野、1991；高橋・植木、1994）。これらの結果から、堅穴住居や掘立柱建物の構築材などに多く利用されていたことが推定される。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p. 73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p. 35-47.
- 千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか－遺跡出土の植物性遺物からの検討－。東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, p. 215-249.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究, 25, p. 31-64.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p. 1-353., BERLIN-STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Lange-Bertalot, H. unter Mitarbeit von A. Steindorf (1995) Rote Liste der Kieselalgen (Bacillariophyceae) Deutschlands. Schr.-R. f. Vegetationskde. H. 28 000-000 BfN, Bonn-Bad Godesberg p. 1-31.
- パリノ・サーヴェイ（1988）浜野川遺跡群の確認調査にともなう花粉分析報告。「千葉市浜野川遺跡群（低湿地における遺跡確認調査）」, p. 122-131, 財團法人千葉県文化財センター。

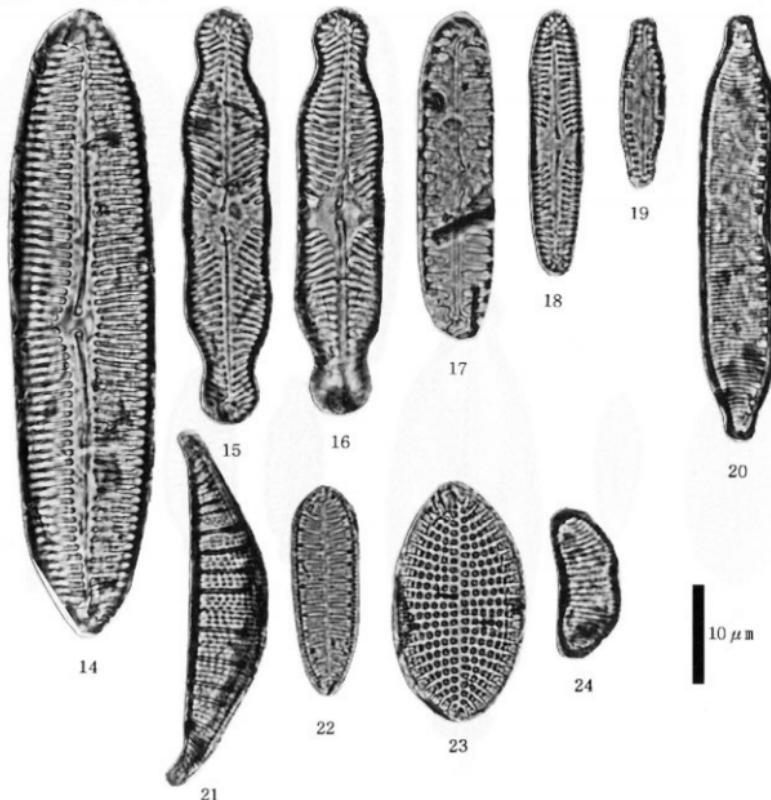
- バリノ・サーヴェイ (1989) 千葉市浜野川神門遺跡の堆積物に関する諸分析、「千葉市浜野川神門遺跡（低湿地貝塚の発掘調査）」, p. 88-127, 財團法人千葉県文化財センター。
- バリノ・サーヴェイ (1995) 三昧塚古墳築造前後の古環境。「茨城県玉造町三昧塚古墳発掘調査報告書」, p. 18-20, 玉造町教育委員会・三昧塚古墳発掘調査団。
- 高橋 敦・樋木真吾 (1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択, PALYN, p. 5-18, バリノ・サーヴェイ株式会社。
- 辻 誠一郎 (1988) 袋低地遺跡の縄文時代以降の花粉化石群集, 「袋低地遺跡－自然科学編1－」, p. 337-365, 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会・東日本旅客鉄道株式会社。
- 辻 誠一郎・南木陸彦・小池裕子 (1983) 縄文時代以降の植生変化と農耕－村田川流域を例として－, 第四紀研究, 22, p. 251-266.
- 辻 誠一郎・橋屋光孝 (1987) 東京都中里遺跡の縄文時代以降の花粉学, 「中里遺跡2－遺跡と古環境2－」, p. 185-251, 東北新幹線中里遺跡調査会。
- 徳永重元・山内輝子 (1971) 花粉・胞子, 化石研究会編「化石の研究法」, p. 50-73, 共立出版社。
- Vos, P. C. and H. de Wolf (1993) Reconstruction of sedimentary environments in Holocene coastal deposits of the southwest Netherlands; the Poortvliet boring, a case study of palaeoenvironmental diatom research. Twelfth International Diatom Symposium, p. 297-296.

图版1 珍藻化石 (1)



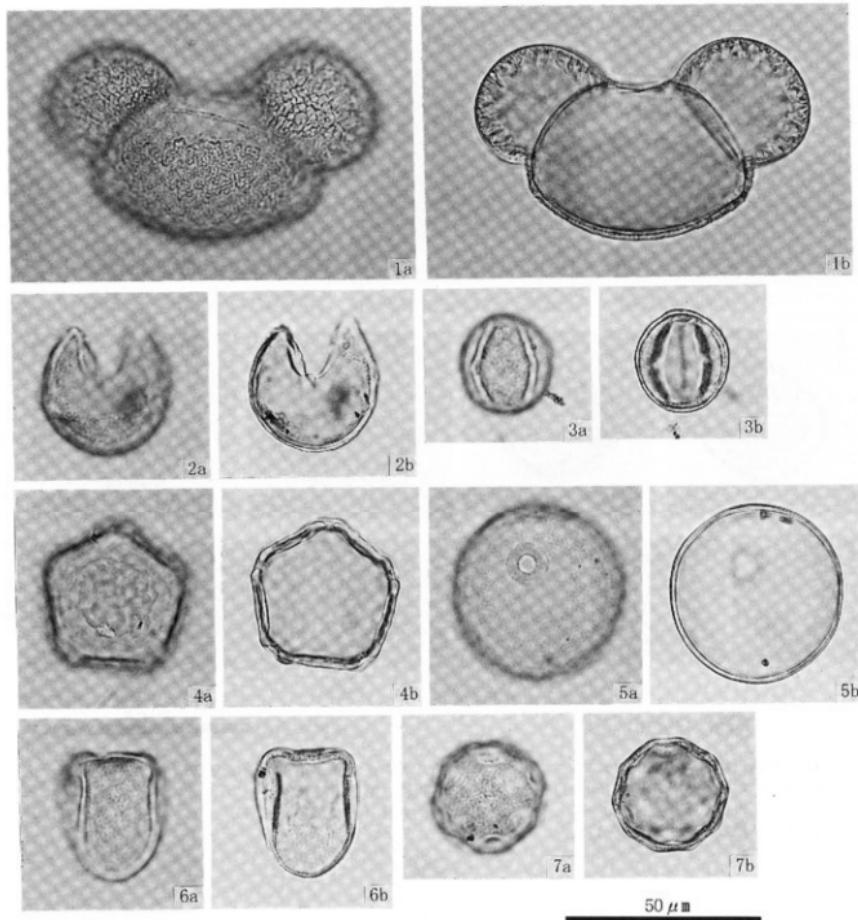
1. *Fragilaria construens* (Ehr.) Grunow(第1遺跡; SD2-1)
2. *Fragilaria brevistriata* Grunow(第1遺跡; SD6-1)
3. *Amphora affinis* Kuetzing(第1遺跡; SD8-1)
4. *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot(第1遺跡; SD5-1)
5. *Cymbella subaequalis* Grunow(第2遺跡; SD5-1)
6. *Cymbella silesiaca* Bleisch(第1遺跡; SD2-1)
7. *Diploneis parma* Cleve(第1遺跡; SD2-1)
8. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve(第1遺跡; SD2-1)
9. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(第1遺跡; SD2-1)
10. *Navicula pusilla* W. Smith(第2遺跡; SD1-1)
11. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs(第1遺跡; SD5-1)
12. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick(第1遺跡; SD6-1)
13. *Navicula mutica* Kuetzing(第1遺跡; SD8-1)

図版2 珪藻化石(2)



14. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (第1遺跡; SD8-1)
15. *Pinnularia mesolepta* (Ehr.) W. Smith (第1遺跡; SD2-1)
16. *Pinnularia mesolepta* (Ehr.) W. Smith (第1遺跡; SD8-1)
17. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (第2遺跡; SD5-1)
18. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (第2遺跡; SD1-1)
19. *Pinnularia subcapitata* Gregory (第1遺跡; SD2-1)
20. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (第1遺跡; SD5-1)
21. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Müller (第1遺跡; SD2-1)
22. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W. Smith) Hustedt (第1遺跡; SD2-1)
23. *Cocconeis scutellum* Ehrenberg (第1遺跡; SD8-1)
24. *Eunotia praerupta* var. *bident* Grunow (第1遺跡; SD5-1)

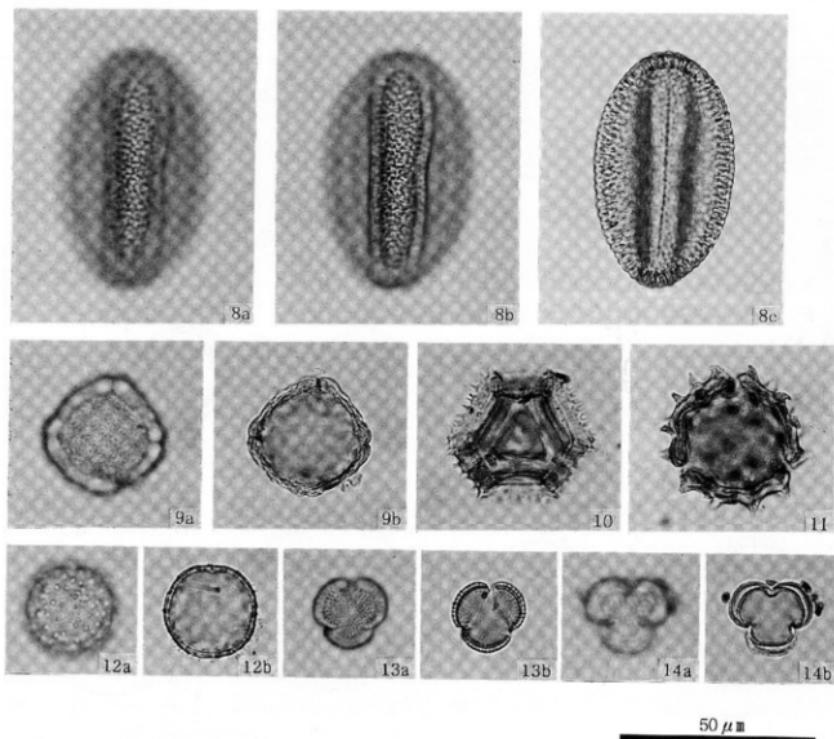
図版3 花粉化石(1)



1. マツ属 (第1遺跡; SD8-1)
3. コナラ属アカガシ属 (第1遺跡; SD8-1)
5. イネ科 (第1遺跡; SD8-1)
7. サジオモダカ属 (第1遺跡; SD8-1)

2. スギ属 (第1遺跡; SD8-1)
4. ニレ属-ケヤキ属 (第1遺跡; SD8-1)
6. カヤツリグサ科 (第1遺跡; SD8-1)

図版4 花粉化石（2）



8. ゾバ属 (第1遺跡; SD8-1)

10. タンボボ亜科 (第1遺跡; SD8-1)

12. オモダカ属 (第1遺跡; SD8-1)

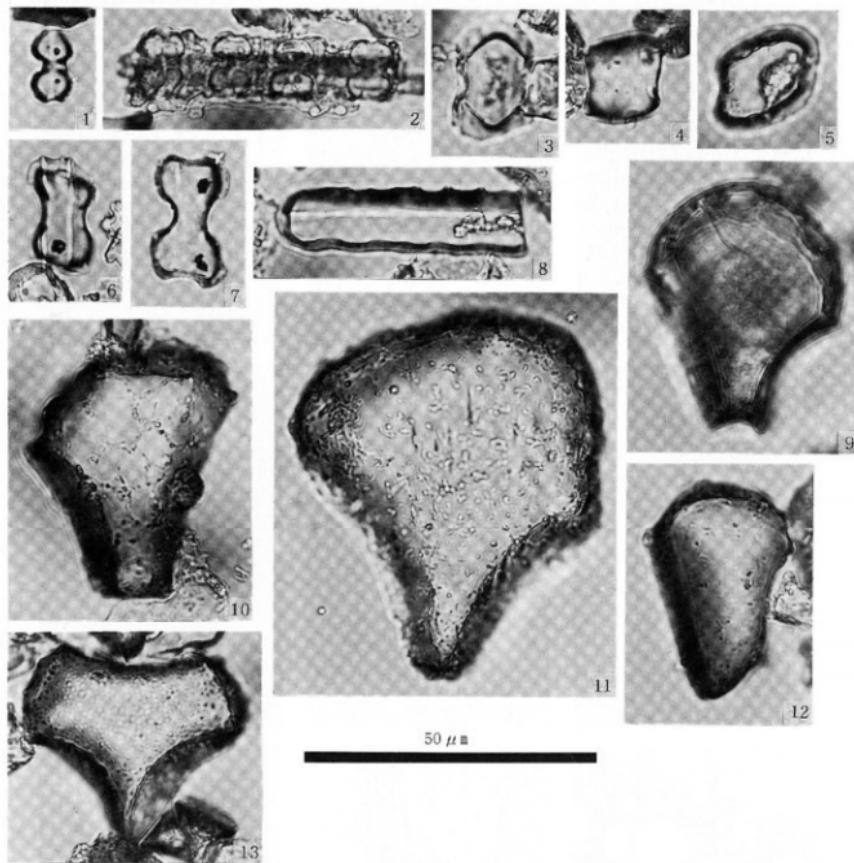
14. ヨモギ属 (第1遺跡; SD8-1)

9. アリノトウグサ属 (第1遺跡; SD8-1)

11. キク亜科 (第1遺跡; SD8-1)

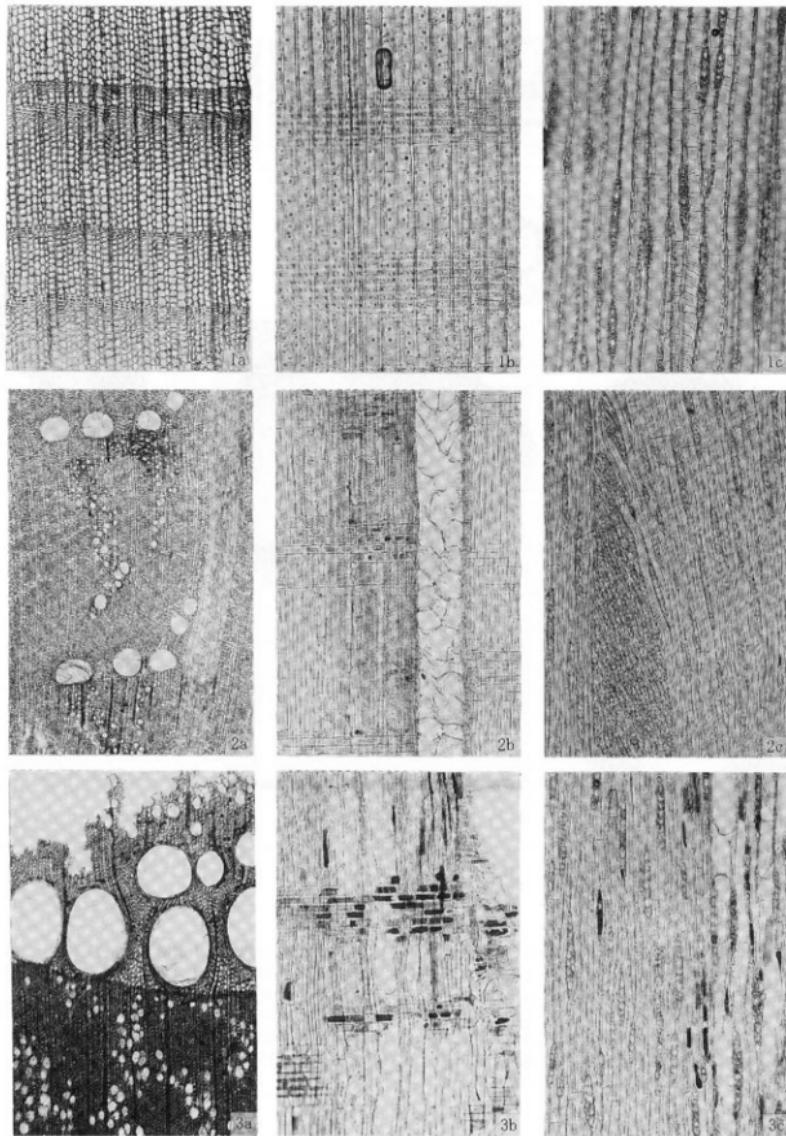
13. アブラナ科 (第1遺跡; SD8-1)

図版5 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体（第1遺跡；SD2-1）
2. イネ属短細胞列（第1遺跡；SD6-1）
3. チゴザサ属短細胞珪酸体（第1遺跡；SD5-1）
4. タケ亜科短細胞珪酸体（第1遺跡；SD6-1）
5. ヨシ属短細胞珪酸体（第1遺跡；SD5-1）
6. コブナグサ属短細胞珪酸体（第1遺跡；SD8-1）
7. ススキ属短細胞珪酸体（第2遺跡；SD1-1）
8. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（第1遺跡；SD8-1）
9. イネ属機動細胞珪酸体（第1遺跡；SD5-1）
10. タケ亜科機動細胞珪酸体（第1遺跡；SD6-1）
11. ヨシ属機動細胞珪酸体（第1遺跡；SD5-1）
12. ウシクサ族機動細胞珪酸体（第2遺跡；SD1-1）
13. シバ属機動細胞珪酸体（第1遺跡；SD6-1）

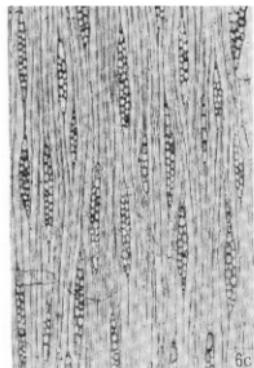
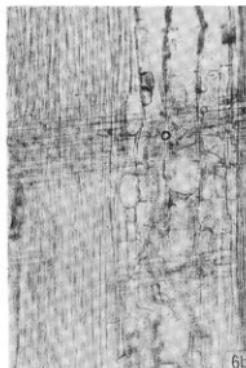
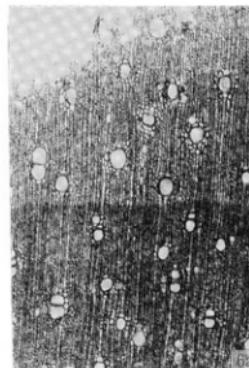
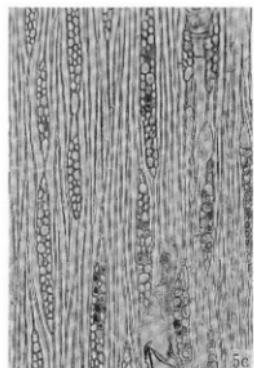
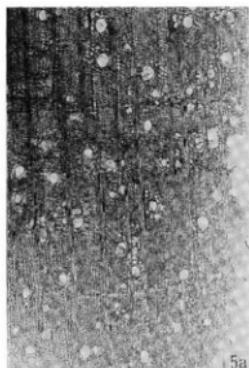
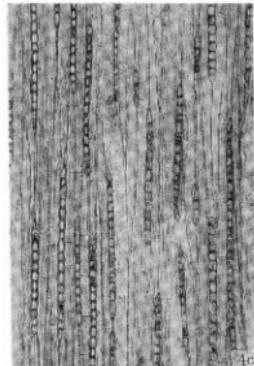
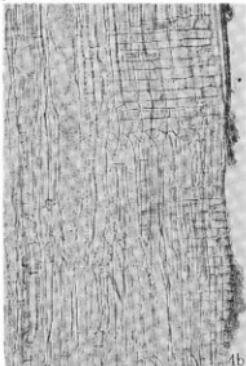
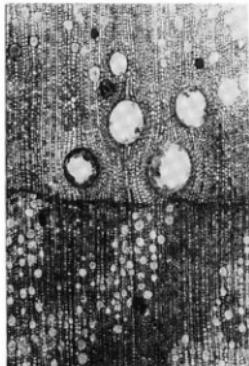
図版6 木材(1)



1. カヤ (第1と第2遺跡の間のトレンチ)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (第4遺跡 No. 4-2)
 3. クリ (第2遺跡 No. 2-2)
- a : 木口, b : 横目, c : 板目

— 200 μ m : a
— 200 μ m : b, c

図版7 木材(2)



4. スダジイ (第4遺跡 No.4-4)
5. タブノキ属 (第2遺跡 No.2-1)
6. クスノキ科 (第4遺跡 No.4-2)
a : 木口, b : 横目, c : 板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

八重橋遺跡発掘調査報告書

印 刷 平成13年3月9日
発 行 平成13年3月9日

編 集 鹿行文化研究所
発 行 玉造町遺跡調査会
玉造町教育委員会

印刷所 (株) さんゆう社印刷
